

靈界物語 第三四卷 海洋萬里 西の卷

出口王仁三郎

凡例

【】……底本で傍點が振られている文字列

(例) 【ヒ】は火なり

「ス」を現す記號(丸にホチ)は「」に置き換えた。その他、文字コード(ユニコード)に無い文字は「ニ」に置き換えた。

底本

『靈界物語 第三四卷』愛善世界社

2000(平成12)年04月02日 第一刷發行

底本をもとに若干の編纂を加えてある。詳細は次のウェブサイト内に掲載してある。

『王仁三郎ドット・ジエイピー』(オニド)

<http://onido.onisavulo.jp/>

現代では差別的表現と見なされる箇所もあるが修正はせず底本通りにした。

圖表などのレイアウトは完全に再現できるわけではないので適宜變更した。
編纂・データ作成：飯塚弘明（オニド主宰）

2009年11月20日修正

）
）
）
）
）
）
）
）
）
）

目次

序文 じよぶん

總説 そうせつ

第一篇 筑紫の不知火 つくし しらぬひ

第一章 筑紫上陸（九四二） つくし じやうりく

第二章 孫甦（九四三） まごこう

第三章 障文句さはりもんく〔九四四〕

第四章 歌垣うたがき〔九五四〕

第五章 對歌たいか〔九四六〕

第六章 蜂はちの巢す〔九四七〕

第七章 無花果いちじゆく〔九四八〕

第八章 暴風雨ばうふうう〔九四九〕

第二篇 有情無情うじやうむじやう

第九章 玉たまの黒點こくてん〔九五〇〕

第一〇章 空縁からえん〔九五二〕

第十一章 富士咲ふじさく〔九五三〕

第十二章 漆山うるしやま〔九五四〕

第十三章 行進歌かうしんか〔九五五〕

- 第一四章 落膽らくたん〔九五五〕
- 第一五章 手長猿てながざる〔九五六〕
- 第一六章 樂天主義らくてんしゆぎ〔九五七〕

第三篇 峠たうげの達引たてひき

- 第一七章 向日峠むかふたうげ〔九五八〕
- 第一八章 三人塚さんにんづか〔九五九〕
- 第一九章 生命いのちの親おや〔九六〇〕
- 第二〇章 玉卜たまつらなひ〔九六一〕
- 第二一章 神護しんご〔九六二〕
- 第二二章 蛙かはづの口くち〔九六三〕
- 第二三章 動靜どうせい〔九六四〕

〔 〕

序文 じよぶん

八月廿九日、伊豆國湯ヶ島温泉にて第三十三巻の口述を終りてより、口述者の誕生祝の神劇の監督を初め、家屋の建替や建直しの相談等に色々手間取りしたため、本巻の口述も思ふ様に行かず、漸く本月七日龜岡瑞祥閣に出張し、四五日休養の上、彌十二日より十四日まで三日間にて神助の下に編成を告げました。筆録者は松村眞澄、北村隆光、加藤明子の三人、残暑を忍び乍ら四人は机に相對して、筑紫の島即ち亞弗利加國へ三五教の黒姫が三人の従者と共に渡り、奇妙な運命を辿るといふ靈界の因縁物語を大略識した面白きものであります。

大正十一年九月十四日（午後五時）

本卷は三五教の宣傳使黒姫と云ふ勇健なる婦人が孫公、房公、芳公の三人の從
 者を引連れ、淤能碁呂島の聖地を立出で、日本海から太平洋に出で、一年有餘の
 日子を費やして亞弗利加の建日の港に安着し、それより小島別の舊蹟なる岩窟に
 立寄り、高山峠を越え、建日の館に立寄りて新教主に面會し、次に向日峠の麓の
 森林に於て、三人の男女の生命を救ひ、火の國の神館に進み行く面白き趣味深き
 修養的物語であります。文中、樂天主義の眞髓が極めて簡明に説いてあります。
 惟神靈幸倍坐世。

大正十一年九月十四日 於瑞祥閣

第一篇 筑紫の不知火

第一章 筑紫上陸〔九四二〕

黄金の玉の所在をば 搜して四方を彷徨ひし

三五教の黒姫は 玉に對する執着を

漸く拂ひ自轉倒の 神の御國の中心地

綾の聖地に立歸り 暫く吾家に潛みつつ

麻邇の寶珠の間違ひに 二世を契りし吾夫の

高山彦と衝突し 離縁騒ぎが持上がり

高山彦は聖地より 筑紫の島へ行かむとて

執念深く付きまとい 妻黒姫を振棄てて

ドロンと姿を隠しける
戀しき夫に捨てられし

黒姫今は矢も楯も
堪らぬ様になり果てて

玉の搜索第二とし
夫の所在を探らむと

皺苦茶だらけの中婆が
心猿意馬に煽られて

萬里の波濤を打渡り
心を盡し身を盡し

命の限り筑紫潟
行方は確に不知火の

海の底迄探らむと
孫、房、芳の三人を

伴に従へ由良の海
眞帆を孕みて漕ぎ出す

日本海をかけ離れ
太平洋を横切りて

龍宮島の沖を越え
印度の洋を右に見て

筑紫の島の東岸に
漸く渡り着きにけり。

此處は建日の港と言ひ、
其昔日の出神、面那藝司、
祝姫司の宣傳使が上陸され
た由緒深き港なりけり。

黒姫は三人の従者と共に麻邇の玉の所在や、黄金の玉の所在を搜索すると云ふは、只單に表面の理由であつて、其實玉に對しては、既に執着心を殆ど脱却してゐたのである。只高山彦に衆人環視の前にて夫婦の縁を切られ、其恥を雪がむとする一念と、高山彦に對する未練とが一つになりて、心猿意馬は忽ち頭を擡げ、此老軀を驅つて、結構な聖地を後に、再び斯かる野蠻國へ連れられて來られたのである。黒姫は高山彦が假令大蛇に還元しようが、鬼にならうが、又は石の唐櫃に隠れて居らうが、女の意地、どうしても一度面會して、心に堆く積れる鬱憤の塵を晴らし、都合好くば、再び舊交を温め、夫婦となり、手に手を取つて聖地に歸り、高姫其他の面々に、自分の意地は此通りと見せてやらねば、今迄盡して來た盡力が無になる。自分の面目玉は丸潰れである……と妙な所へ脱線して、戀と云ふ惡魔に取ひしがれ、殆ど半狂亂の如く、目は釣上り、頬は瘦こけ、顔色青ざめ、實に物凄い面相になつて居た。

孫、房、芳の三人は、黒姫に色々甘言を以て操られ、ここ迄従いては來たものの別に宣傳の目的もなければ何の楽しみもない、只一日も早く高山彦の所在を探

ねて、黒姫と共に自轉倒島へ歸りたいのが胸一杯であつた。黒姫も亦宣傳使の身であり乍ら高山彦の搜索に心魂を奪はれ、只一日も早く夫に會はせ給へと、朝夕祈願するのみで、道を宣傳すると云ふ其使命は殆ど忘却して居た。老婆の戀に狂うた位始末に了へぬものはない。黒姫が此建日の港に着く迄には幾度となくあちらの島へ寄り、此方の島へ寄り、厳しい搜索をやつて居た爲、餘程日子を費やしてゐる。殆ど一年許り掛つた。

さうして船は二三回難破し、便宜の方法にて舟を買つたり、拾つたりし乍ら、漸くここへ辿り着いたのである。其間には随分背中に腹の替へられないやうな憂目に遭ひ天則違反的行動をも続け、島に繋ぎありし、何人かの舟をソツと失敬して、乗つて來た事もあるものであつた。

三人の従者は黒姫に隨從して却て宣傳使として數多の黒姫の矛盾を目撃してゐるので、聖地を出た時の黒姫に對する信用と、今の黒姫に對する態度とは、ガラツと變つてゐる。黒姫は要するに口計りの人間で、行ひの伴はざる執念深き惡垂れ婆アと云ふ觀念が、三人の胸に期せずして兆してゐる。それ故日を逐うて黒姫

を輕蔑し、今は容易に黒姫の命令に服しない様になつて居る。のみならず却て事に觸れ物に接し、からかつて見ては、黒姫が喜怒哀樂、愛惡欲の面部の色に現はるるを見て、せめてもの旅の慰みとしてゐた位である。併し乍ら乗り掛けた舟、途中に引返す譯にも行かず、幾分か神様の教が三人共腹に浸み渡つてゐるお蔭で、太平洋の眞ん中へ出た時分から、三人はヒソビソと囁き合ひ、一層の事黒姫を海の中へ放り込んで、素知らぬ顔で自轉倒島へ歸らうかと迄、孫公が發起で相談した事もあつた。されどそんな無茶な事をすれば、忽ち天則違反の大罪を重ね、如何なる嚴罰に神界から處せらるるやも計り難しと、直日の魂の閃きに見直し直し、厭々乍ら、萬里の波濤を艱難辛苦してここ迄従いて來たのである。黒姫一行は舟を乗りすて、建日の港に上陸し、激潭飛沫の溪流を遡り、四方の風景を眺め乍ら、草を分けて細き谷道を登つて行く。比較的人通りが多いと見え、羊腸の小徑が九十九折に白く光つて居る。孫公「黒姫さまのお蔭で、思はぬ絶景を見せて貰ひました。際限もなき海原を日に照りつけられ、汐風に晒らされ、雨に當てられ、丸で澁紙さまの様になつて了

つた。黒姫さまは元から烏の様な御方だから、餘り目立たぬが、俺達は自轉倒島へ歸つて、宅のお安に此面を見せようものなら、どれ丈悔むであらう。それを思へば残念で堪らぬワイ。是と云ふも、元を糺せば黒姫さまが、餘りハズバンドに魂を抜かれて居るものだから、こんな結果になつて了つたのだ……なア芳公、房公、お前の顔も随分黒くなつたよ。貴様とこのお瀧やお鐵が、さぞ悔む事だらう。今から思ひやられて、可哀相なワイ」

芳公「ナア二、俺ン所のお瀧も房公と此お鐵も、元より覺悟して居る筈だ。お瀧の奴、俺の出る時に、名残惜さうに、俺の背中をポンと叩きやがつて……コレコレこちの人、お前さまは黒姫さまのお伴に行くのだから、顔の色迄黒姫さまの感化を受けて來なあきませぬぞえ。心の中迄黒うなつて來なさいと吐きやがつた。けれど俺は心の中丈は眞平御免だ。アハ、ハ、ハ、」

孫公「心の中迄貴様の嬢が、黒姫さまのやうに黒くなつて來いと云うたのは一つの謎だよ。貴様は何時も箸まめな奴だから、朝から晩迄お瀧と二人が、犬も喰はぬ悋氣喧譁計りやつて、生疵の絶間なし、近所合壁に迷惑をかけた代物だ。それ

だから黒姫さまが高山彦を慕ふ様に、此お瀧に一心になれ、さうしてお瀧の爲に
は假令千里萬里の山坂を越えても、敢て厭はぬと云ふ熱心な情の深い男になつて
來なさい、黒姫さまの貞節を學んで、それを妾にソツクリ其儘行つて呉れ……と
云ふ蟲の好い謎だ。貴様の嬢アも中々行手だ。餘程貴様とは智慧が優れて居るワ
イ。アハ、ハ、ハ、ハ、

芳公「俺やモウそんな事を聞くと、女房が戀しうなつて來た。翼でもあれば、此
儘翔つて歸りたいのだがなア」

孫公「何と云つても斯うなりや、モウ仕方がない。黒姫泥棒の乾兒になつたやう
なものだから、毒を喰はば皿まで舐れた。兔も角高山彦のハズバンドに出會あう
て、ヤイノヤイノの亂癡氣騒ぎを一幕か二幕見せて貰ひ、其後には吾々が居中調
停の勞を執り、夫婦が機會均等主義を發揮して、目出たく自轉倒島へ凱旋遊ばす
迄は、離れる事は出來ない因縁がまつはつてゐるのだ。今ヤツと建日の港へ着い
た許りだ。今頃に望郷の念に驅られては駄目だぞ。自轉倒島の間は何時も望郷
心が強いから大事業は到底成功出來ないのだ。斯うなつた以上は、嬢の一人や二

人何うでも好いぢやないか。都合が好ければ此筑紫島に永住して大事業を起し、一生自轉倒島へは歸らないと云ふ決心が肝腎だ」

芳公「お前は女房のお安を、始めから嫌つて居るのだから、自轉倒島に未練はなからう。俺はあれ丈親切な、惚切つた女房が、膝坊主を抱いて俺の歸るのを、今か今かと神様に願かけて待つてるのだから、そんな無情な事は出来ない。一日も早く歸つて、女房の喜ぶ顔を見るのが俺の唯一の樂みだ。世の中に夫婦位大切なものは無い。何程こんな所で成功をしたと云つても、女房子と一生あはれぬやうな所で、何が面白い」

孫公「アハ、ハ、ハ、毎日日あれ丈憎相に云うて喧譁をし乍ら、矢張あんなやん茶嬢が戀しいのか。戀といふものは分らぬものだなア」

房公「ソリヤ其筈だ。黒姫さまでさへも、云うと濟まぬが、夕日の影干しのやうな無恰好な禿頭の爺を、こんな所迄はるばる尋ねて來やつしやるのだもの、夫が女房を慕ふのは當然だ。俺ン所のお鐵でもそれはそれは親切なものだよ。孫公ン所のお安は、餘り親切にないのは、つまり孫公が悪いのだ。女と云ふものは、男

の方から親切に真心を以て可愛がつてやれば、どうでもなるものだ。貴様の様に、女房を家の道具だとか、器械だとか、産兒機だとか云つて、虐待するやうな事では、目つかちの女房だつて、夫を親身になつて思つては呉れないよ。チツと黒姫さまに倣つて、お前も女房を大切にしたら如何だい。こんな遠方迄来た土産として、女房に對する親切を益々濃厚に持ち直して歸るが、何よりの女房への土産だよ……なア黒姫さま……」

と舌をニユツと出し、頤をつき出して、稍嘲弄的に目を注ぐ。黒姫は始めて口を開き、

黒姫「お前さま達三人は自轉倒島を出た時は、随分誠實な熱心な信者であつた。それが如何したもののか、一日々々と誠がうすらぎ、遂には妾に迄、輕侮の目を以て見るやうになつたぢやないか。何の爲にお前さまは遙々と修業に出て來たのだい。これから先は建日別命が昔脂を取られた筑紫峠の谷間の岩窟があるから、今の中に心を直しておかぬと、昔の小島別のやうに脂をとられて、ヘトヘトになりますぞえ。今の間に改心をしなされ」

孫公「アハ、黒姫さま、改心する人は吾々三人計りですか？ まだ外に一人、第一に改心をせなくてはならぬ婆んつがある事をお忘れになりましたか？」
黒姫「改心し切つた者が、何うして改心する餘地がありませんか。お前さまは此黒姫の行ひを見なさつたら、大抵分るだらう」
孫公「惟神だ、天の與へだ……と云つて、人の舟を黙つてチヨ口まかし、それに乗つて來るのが誠ですか。あんな事が、改心し切つた人の行ひとすれば、吾々よりも泥棒の方が餘程改心しとるぢやありませんか」
黒姫「エ、ツベコベと小理屈を言ひなさんな。途中に船が破れて、進退これ谷まつた時に、主のない船がそこへ流れて來たのは、所謂天の與へだよ。諺にも天の與ふるを取らざれば、災却て身に及ぶと云ふ事があるぢやないか。神は人間になくてならぬものを與へ給ふと云ふ聖者の教がある。船一艘が大切か、吾々四人の生命が大切か、能く事の輕重大小を考へて御覽なさい。機に臨み變に應ずるは、即ち惟神の大道だよ。こんな事が分らぬ様な事で、能うお前さまも、三五教の信者ぢや、宣傳使の卵ぢやと云つて、こんな所迄從いて來ましたな、オツホ、」

孫公まごこう「呆あきれて物が言いへませぬワイ。併しかし乍ながら、お前まへさまが夫をととの爲ためには大切たいせつな神務しんむも忘れわすれ、宣傳せんでんを次つぎにし、あれ程ほど氣違きちがひのやうになつて居をつた黄金こがねの玉たまの事ことをケロリと忘れわすれて、大勢おほせいの前まへで肱鐵砲ひぢでつぱうをかましてくれた高山彦たかやまひこさまを慕したふ其貞節そのていせつには實じつに感心かんしんだ。大おほいに學まなぶべき點てんが「オホアリ」大根だいこんだ。アハ、、、、オホ、、、、ウツフ、、、、エへ、、、、イヒ、、、、」

黒姫くろひめ「コレ孫公まごこう、お前まへは此年このとし老よりを嘲弄てうろうするのかい」

孫公まごこう「岩屋いはやの神かみさまがソロソロ孫公まごこうさまに憑うつつて、言靈ことたまを始はじめかけたのだよ。ウフ、、、、」

と笑わらひこける。途端とたんに路傍みちばたの尖とがつた石いしに腰こしを打うちつけ「アイタタ」と云いつたきり、眞青まつさをな色いろになり、顔かほをしかめ、目めを塞ふさいで、人事じんじ不省ふせいになつて了しまつた。

（大正一一・九・一二 舊七・二一 松村眞澄録）

第二章 孫甦まごこう（九四三）

孫公は、笑ひ轉けた途端に腰骨を岩角に強か打ち「ウン」と云つたきり人事不省になつて了つた。房公、芳公の兩人は周章狼狽き、谷水を汲み來つて顔にぶっかけたり、口を無理にあけて水を飲ませなどして種々と介抱を餘念なく續けて居る。されど孫公は、だんだん身體が冷却する計り、呼べど叫べど何の應答も無くなつて了つた。黒姫は冷然として孫公の倒れた體を斜眼に見て居る。

房公「これ黒姫さま、孫公がこんな目に遇つて居るのです。なぜ神様に願つて下さらぬのか。早く數歌を歌ひ上げて魂返しをして下さい。愚圖々々して居ると、此方の者にはなりませんぞや」

黒姫はニヤリと笑ひ、

「神様の戒めは、恐ろしいものですな。皆様是を見て改心なさい。長上を敬へと云ふ……お前は天の御規則を何と心得て御座る。太平洋を渡る時から、此孫公は黒姫の云ふ事を一つ一つ口答へを致し、長上を侮辱した天則違反の罪が自然に報うて來たのだから、何程頼んだとて祈つたとて、もはや駄目だよ。……これ房公、芳公、お前も随分孫公のやうに此黒姫に口答へをしたり、又悪口を云つたであら

か
□

房公「俺は孫公の介抱をする。まだ少し温みがあるから蘇生るかも知れない。お

前は黒姫の曲津退治にかかつて呉れ」

と云ひながら、房公は孫公の倒れた體に向つて一生懸命に鎮魂をなし、天の數歌

を謠ひ出した。房公は兩手を組み黒姫に向つて「ウンウン」と靈を送つて居る。

黒姫「オホ、敵は本能寺にあり、吾敵は吾心に潛むと云つて、此黒姫が惡

に見えるのは所謂お前の心に惡魔が棲んで居るのだよ。そんな馬鹿な藝當をする

よりも早く神様にお詫をしなさい。此黒姫の腹立の直らぬかぎり、房公だつて

お前だつて孫公の通りだよ。さてもさても憐れなものだなア。心から發根の改心

でない、何程神様を祈つたとてあきませぬぞえ。これから何事も神第一、黒姫

第二とするのだよ」

芳公「高山彦さまと元の通り御夫婦になられた時はどうなります。高山彦第三で

すか、或は第二ですか、それを聞かして置いて頂かむと都合が悪いですからなア」

黒姫「今からそんな事を云ふ時ぢやありません。孫公があを通り冷たくなつて居

るのに、お前は何とも無いのかい」

芳公「さうですなア、黒姫さまが高山彦さまを思ふ位なものでせうかい。高山彦

さまが第二ですか、第三ですか、但は機會均等主義ですか」

黒姫はニヤリと笑ひ、

「極つた事よ。私のハズバンドだもの、オホ、、、」

と顔を隠す。五十の坂を越えた皺苦茶婆も、ハズバンドの事を云はれると少しく
恥かしくなつたと見える。

今迄打倒れて居た孫公は、房公の看病が利いたのか、但は御神力で息を吹き返
したのか、俄に雷のやうな唸り聲を立て出した。黒姫は眞蒼な顔になつて其場に
しやがんで了ふ。房公、芳公の兩人は且つ驚き且つ喜び、雑草の茂る道端を右に
左に周章へ廻る。孫公は益々唸り出した。さうしてツト自ら起き上り、道端の青
草の上に胡坐をかき眞赤な顔をしながら、への字に結んだ口を片つ方から少しづ
つ通草がはじけかかつたやうに上下の唇を開き初め、白い齒を一枚二枚三枚と露
はし初めた。三人は目も放たず驚異の念にかられて孫公の口邊ばかりを見詰めて

居ると、孫公の口は三十二枚の齒迄露出して、了つて、暫くすると蟻蛙が蚊を吸ふ調子で、上下の唇をパクパクと動かした機みに上下の齒がカツンカツンと打あふ音が聞えて来た。黒姫はツト傍に寄つて、

「コレ孫公、喜びなさい、黒姫の鎮魂のお蔭で、死んで居たお前が甦つたのだよ。これから黒姫に對しては、今迄のやうな傲慢の態度をあらためなさいや」

房公「これ黒姫さま、鎮魂したのは私ですよ。お前さまは孫公が死ぬのは天罰だ、神が表に現はれて善と惡とを立別けなさつたのだと、さんざん理屈を云つたぢやありませんか」

黒姫「お前が鎮魂しても、此黒姫の神力がお前に憑つたのだから、孫公が神徳を頂いたのだよ。きつと此黒姫が神力によつて甦らせるだけの確信を持つて居たから、泰然自若として冷靜に構へて居たのだ。覺え無くして宣傳使が勤まりますか、何事も知らず識らずに神様にさされて居るのだ。房公、お前の鎮魂で直つたと思つたら了見が違ひますぞえ。皆黒姫の餘徳だから、皆慢心をしたり、黒姫より私は偉い、鎮魂がよく利くなどと思ふ事はなりませんぞえ」

房公「まるで高姫のやうな事を云ふ婆アさまだなア。高姫と云ふ奴は人に命を助けて貰つて置き乍ら、いつも日の出神様がお前を使うて助けさしてやつたのだ、お禮を申しなさい……なんて、瀬戸の海の難船の時には救うて呉れた玉能姫にお禮を云はせたと云ふ筆法だな。矢張り高姫仕込だけあつて、負惜みの強い事は天下一品だ、アハ、ハ、ハ。年が寄つて雄鳥に離れると矢張り根性が拗けると見える。高姫だつて適當なハズバンドさへあれば、あんなに拗けるのぢや無からうに、人間と云ふ者は、どうしても異性が付いて居ないと妙な心になるものだ。黒姫さまを改心させるには、どうしても高山彦さまの顔を見せてあげなければなりません。い。俺だつてお鐵の顔を見る迄は、どうしたつて心がをさまらぬからなア、アハ、ハ、ハ、ハ」

黒姫「あまり口が過ぎると又孫公のやうな目に遇ひますぞや」

芳公「孫公のやうな目に遇つたつて構はぬぢやないか。お前さま達がヤツサモツサ騒いで居る間に平氣の平左で幽冥界の探險をなし、平氣の平左で甦つたぢやないか。俺だつてあんな死にやうなら何度もして見たいわ」

黒姫「罰が當りますぞや。好い加減に心を直しなさい。改心が一等だと神様が仰有りますぞえ」

芳公「改心しきつたものが改心せよと云つたつて、改心の餘地が無いぢやないか、

オホ、

黒姫「これ芳公、お前は又私の眞似をして嘲弄ふのだな」

芳公「あまり好う流行る豆腐屋で、豆腐が切れたから仕方なしにカラ買ふのだよ。

オホ、

孫公は兩手を組みそろそろ喋り出した。

孫公「ア、

黒姫「これこれ孫公、筑紫の岩窟は此處ぢや御座りませぬぞえ。小島別の昔を思

ひ出し、そんなア、なぞと云うと、悪の性來が現はれてアフンとする

事が出来ませぬぞえ、ちつと確りなさらぬかえ」

孫公「アハ、オホ、ウフ、エヘ、イヒ、

、

黒姫くろひめ「又またしても、曲津まがつがつきよつたかな。どれどれ此黒姫このくろひめが神力しんりきによつて退散たいさんさせて見みませう」
と云いひつつ青草あをくさの上に端坐うへたんざし、兩手りやうてを組み皺枯しわがれた聲こゑで天津祝詞あまつのりとを奏上そうじやうし始はじめた。
孫公まごこうは大口おほぐちを開あいて歌うたひ出した。

「ア」ハ、ハツハ阿呆あほうらしい 頭あたまの光ひかつたハズバンド

高山彦たかやまひこの後追あとうて 烏からすのやうな黒姫くろひめが

綾あやの聖地せいぢを後あとにして 荒浪あらなみ猛たける海原うなばらを

荒肝あらのきま放はなり出だし三人さんにんの 伴ともを引き連つれ「あ」ら悲かなし

假令たとへ惡魔あくまと云いはれやうが 遇あひたい見みたいハズバンド

亞弗利加國アフリカこくの果はてまでも 所在ありがを探さがして尋たづねあて

「あ」りし昔むかしの物語ものがたり 「ア」ラサホイサを云いひ出いだし

飽あ迄くまで初心しよしんを貫くわん徹てつし 愛別離あいべつりく苦かなの悲かなしみを

相身互あひまたがひに語かたらふて 愛想盡あいさつつかしを云いうて見みたり

悋氣喧譁りんきげんくわをして見よと 惡魔あくまの靈れいに【あ】やつられ

泡あわを吹ふくとは知しらずして やつて來きたのは憐あはれなり

【あ】ゝ惟かむながらかむながら神々々々 【あ】かん戀路こひぢに迷まよふより

諦あきらめなされよ黒姫くろひめさま 亞細亞アシア亞弗利加アフリカ歐羅巴ヨーロッパ

亞米利加國アメリカこくの果迄はてまでも 後あとを慕したうて見みたところ

所在ありかの知しれぬハズバンド 【あ】かん目的もくてきた立てるより

足の爪あし つまさき先明あかるいうちに 【あ】きらめなさつて逸いち早く

蜻蛉あきつの島しまに歸かへれかし 阿呆あほう々々と烏迄からすまで

【あ】すこの杉すぎで鳴ないて居ゐる 相見あひみての後のちの心こころに比くらぶれば

遇あはぬ昔むかしがましだつた 【あ】ゝあゝこんな事ことなれば

綺麗きれい薩張さつばり諦あきらめて 綾あやの聖地せいぢにおとなしく

朝あさな夕ゆふなに神かみの前まへ 仕つかへて居をつたがよかつたに

【あ】ゝあゝ何なんと詮せん方も 泣なく泣なく歸かへる呆あきれ顔がほ

【あ】こがれ慕したふハズバンド 頭あたまの長ながい福祿壽げほつさま

蜻蛉の島に御座るぞや

蟹のやうなる泡吹いて

【あ】らぬ夫を探すより

早く諦め歸ぬがよい

【ア】ハ、ハツハ

アハ、ハハ 呆れはてたる次第なり

【あ】、惟神々々

御靈幸倍ましませよ

黒姫はツト傍により、

「いづれの神様のお憑りか知りませぬが、今承はれば高山彦は蜻蛉島に居る、此亞弗利加には居ないと仰有いましたが、それは本當で御座いますか。孫公に憑つた神様、どうぞ黒姫の一身上にかかつた大問題で御座いますから、好い加減の事を云はずと【ハツキリ】と云つて下さい。聞いて居ればア、アと【アア】盡しで仰有つたが、そんな事云うて此黒姫をちよるまかし、アフンとさせむとする悪い企みぢやあるまいかな。飽きも飽かれもせぬ高山彦さまの行方、どうぞ明かに知らして下さい」

孫公まじこう 【イ】ヒ、ヒツヒ イヒ、ヒ、 【い】つ迄まで尋たづねて見みたところが

命いのちに替かへたハズバンド 居所きょ所分わる筈はずはない

色いろ々いろ雑ざつ多たとイチヤついた 往いとし昔むかしを思おもひ出だし

色いろに迷まよふた黒くろ姫ひめさま 【い】かに心しん配ぱい遊あそばして

色いろ迄まで青あをうなつて來きた 異い國こくの果はてを探さがしても

居ゐない男をとこは居ゐはせぬぞ 意い外ぐわいも意い外ぐわいも大おほ意い外ぐわい

命いのちに替かへた高たか山やま彦ひこさまは 伊い勢せ屋やの娘むすめの虎とらさまと

意い茶ちやつき廻まはつて酒さけを吞のみ 意い氣き揚やう々と今いま頃ころは

石いしの肴さかなを前まへに据すゑ 固かたい約やく束そく岩いはの判はん

石いしに證しょう文もん書かき竝ならべ 【い】よいよ眞まことの夫ふう婦ふぞと

朝あさから晚ばん迄まで樂たのんで 意い茶ちやつき暮くらす面おも白しろさ

伊い勢せの鮑あはびの片かた思おもひ 何なに程ほどお前まへが探さがすとも

高たか山やま彦ひこは黒くろ姫ひめに 唯ただの一いち度ども遇あうてはくれぬ

あゝ惟かむ神な々ながら々かむ 叶かなはぬならば逸い早ちはく

綾の聖地に立ち歸り 意茶つき暮らす兩人の

生首ぬいてやらしゃんせ ウフ、フツフ ウフ、フツフ

黒姫「これ孫公、私を馬鹿にするのかい。本當の事を云うて下さい。これ程黒姫が一生懸命になつて尋ねて居るのに、ウフ、フツフとは何の事だい。大方お前は此の二人の代物と腹を合せ、死眞似をしたのであらう。ほんにほんに油斷のならぬ代物だなア」

(大正一一・九・一二 舊七・二一 加藤明子録)

第三章 障文句(一九四四)

孫公は、委細構はず神懸となつたまま謠ひ續ける。

【ウ】フ、フ、フ、フ、ウフ、フ、フ、
良金神現はれて

有象無象を立別ける
【う】つつを抜かした黒姫が

浮世氣分を放り出して
【ウ】ロウロ此處迄やつて来た

【う】るさい男の後追うて
【う】んざりする様な惚氣方

浮世の常とは言ひ乍ら
憂身をやつす戀の闇

【ウ】ラナイ教の看板を
打つて一時はメキメキと

羽振を利かした黒姫も
高山彦のハズバンド

【う】つかり貰うた其爲に
憂世の味を覚え出し

心の空も迂路々々と
行方定めぬ旅の空

動きのとれぬ目に會うて
珍の聖地を立ち離れ

渦巻わたる海原を
越えて此處迄【ウ】ヨウヨと

迂路つき来る憐れさよ
狼狽者の宣傳使

黒姫さまの甘口に
【う】まく乗せられ吾々は

牛に曳かれて善光寺
詣る婆アの後につき

移うつつて來きたのは亞ア弗フリ利リ加カの 憂「うつ」世きよ離はなれた筑つく紫し島しま

瓜「うり」の樣やうなる細ほそ長ながい 壽げ老ほう頭あたまの老おやぢ爺ぢをば

憂「うつ」身きみを竄やつして追おうて來くる 煩「うつ」さい女をんなが唯ただ一ひとり人

蛆「うつ」蟲じむし見みた樣やうな魂たましひで 迂「う」路ろ々ろ々ろやつて來こられては

如いかに女をんなに熱ねつ心しんな 高たか山やまぢやとて煩「うつ」さかろ

煩「うつ」さの娑しや婆ばに存ながらへて 憂「うつ」目きめを看みるより逸いち早はやく

改かい心しんした方ほうが宜よからうぞ 碾ひき臼「うつ」みすた樣やうな尻しりをして

【ウ】口くちウう口くちしたとて仕しかた方たない あゝ惟かむ神な々ながら々かむ

煩「うつ」さい事ことではないかいな 一いち時じも早はやく火ひの國くにへ

致いたして御ご座ざる暇ひまあれば 一いち時じも早はやく火ひの國くにへ

足あしを早はやめて行ゆきなさい 顔かほは違ちがふか知しらねども

高たか山やま彦ひこが御ご座ざるぞや 其またの又また高たか山やま彦ひこさまは

神かむ素す盞さ鳴の大神おほかみの 八や人たり乙をとめ女の其その一ひとり人

愛あい子この姫ひめと云いふ方かたが 朝あさな夕ゆふなに侍かしづいて

家事萬端は言ふも更さら
水も洩らさぬ勤め振り
笑壺に入つて脂下り
あゝ惟神々々かむながらかむながら
一目見せたら如何だらう
鼻をムケムケ口歪め
天の雲迄焦すだらう
五十の尻を結んだる
雪を欺く白い顔
何處に言分ない娘
愛子々と愛で給ふ
誠に立派な夫婦ぞや

痒い處に手の届く
高山彦の神さまは
えらい機嫌で御座るぞや
黒姫さまにあんな處
忽ち二つの目を釣つて
恨みの炎は忽ちに
高山彦は偉い奴
悪垂れ婆と事變り
ボツテリ肥た膚の色
女房にもつて朝夕に
他所の見る目も羨りよな
エへ、へ、へツへへ、へ、へ、へ、へ、へ、へ

黒姫くろひめ「コレコレ孫公まごこう、お前まへそれは本當ほんたうかい。あの高山たかやまさまが愛子あいこひめと云いふ、天あまの

岩戸を閉めた素盞鳴尊の娘ツちよを女房に持つて、火の國に御座らつしやるとは合點の行かぬ話だ。高山さまに限つてそんな筈はないのだが、何卒本當の事を云つてくれ。如何に氣樂な黒姫でもこんな事を聞くと、如何しても聞き逃しが出来ませぬ。さあ何卒早く虚實を明かに答へて下さい」

房公「黒姫さま、孫公があんな事言つて擲掬つて居るのですよ。本當にしちやいけませぬぜ。……ナア芳公、どうも怪しいぢやないか」

芳公「いや、俺は決して怪しいとは思はぬ、よう考へて見よ。最前からの様子、如何しても人間の惡戯とは思へぬぢやないか。屹度神様のお告に間違ひは無からうぞ」

房公「それでも言ふことが矛盾して居るぢやないか。高山彦は綾の聖地に伊勢屋の娘と暮らして居ると云ふかと思へば、火の國に今は愛子姫と脂下つて居ると云ふなり、何が何だかチツとも譯が分らぬぢやないか」

芳公「それもさうだなア。大方枉津が憑つたのだらう。……おい孫公、シツカリせぬかい。貴様は目を廻しやがつて矢張り氣が遠くなつたと見え、そんな矛盾の

事を吐くのだらう。チツとしつかりしてくれないか。俺達もこんな處で發狂されては心細いからなア」

黒姫「いかにも房公の言ふ通り、孫公の言ふ事は前後がチツとも揃はない、枉津と云ふものは、賢い様でも馬鹿な者だなア。高山さまが自轉倒島に居ると云ふかと思へば、火の國に居ると云ふなり、何が何だか譯の分つたものぢやありませんか。わい…人を力にするな、師匠を杖につくな…と云ふ教がある。こんな男の神懸に誑かされて居つては、三五教の宣傳使もさつぱり駄目だ。さあさあ房公、芳公、こんな男は此處に放棄つておいて筑紫の巖窟迄行きませう。そこ迄行けば屹度巖窟の神様が正確な事を聞かして下さるに相違ありません。さあ行きませう」

房公「巖窟の神様に昔の小島別の様に五大韻の言靈攻に會はされては堪りませぬぜ。随分疵持つ足の吾々だからそんな危険區域の地方へは寄りつかない方が利巧ですよ」

黒姫「又お前は氣の弱い退嬰主義を採るのか。三五教は進展主義ですよ。決して退却はなりません。小島別の神さまだつて、終には建日別命と云ふ立派な神にな

つたぢやないか。屹度悪い後は善いにきまつてるから、さあ早く行きませう』

芳公『黒姫さま、孫公はお連れになりませぬか』

黒姫『来るものは拒まず、去る者は追はず、孫公の自由意志に任せませうかい』

芳公『これ孫公、俺達と一緒に黒姫さまの後について行かうぢやないか。何時迄

もこんな處でア、オ、ウと言霊もどきをやって居つても、てんから脱線だらけだ

から、流石の黒姫さまも愛想づかしをなさつた位だから、誰も聴手があるまい。

さア俺と一緒に行かう』

と言ひ乍ら孫公の左右の手をグツと握り引き立たさうとする。孫公は地から生え

た岩の様に何程ゆすつても引いてもビクとも動かず、只一言、

『俺の自由意思に任すのだよ』

と言つたきり目を閉ぢ無言の儘坐つて居る。黒姫は委細構はず言霊の濁つた宣傳

歌を謠ひ乍ら、風當りのよき谷道をスタスタと登り行く。房、芳の二人は孫公に

心を惹かれ乍ら、後振り振り返り嫌さうに黒姫の後に跟いて行く。

黒姫は漸くにして其日の黄昏、筑紫の巖窟建日別の舊蹟地に辿り着いた。

黒姫「さあ、此處は有名な小島別命が、月照彦の神様の神靈から脂をとられ出世した目出度い處だ。皆々、一同に天津祝詞を奏上しませう」

房公「先づ第一に高山彦様の御安泰を祈り、第二に黒姫様の御改心を祈り、第三に孫公さまの御出世を祈る事にしませうか」

黒姫「えゝ又しても又しても、高山さま高山さまと云つて下さるな。高山さまは妾の夫ですよ。お前等に名を呼ばれると、あまり心持がよくありませんからな」

芳公「第二の亭主だから名を言はれても減る様な気がなさいますナ」

黒姫「今日限り高山彦さまの事は言つちやなりませぬぞや。それよりも第一に神様の事を云ひなさい。心得が悪いと又此處で孫公の様な目にあうて、脛腰が立たず口ばかり達者な化物になつて了ひますよ。黒姫に敵たうた者は誰も彼も皆あの通りだ。さあさあ皆々、祝詞を濟まして今晚はおとなしく此處で寝みなさい。私はこれから神様にお伺ひをせなくてはならない。お前さま達が起きて居ると悪の靈が混線してはつきりした神勅が受けられませぬからな」

房公「黒姫さま、貴女は宣傳使にも似合はず、實に冷酷なお方ですな。太平洋を

渡る時は、吾々三人の者が居らなくてはならない者だから、何と言はれてもおとなしく俺達の機嫌をとつて御座つたが、此島に着くや否や、高山彦さまが御座ると思つて俄に權幕がひどくなり、吾々を邪魔者扱ひにされる様子が見えて來ただやありませぬか」

芳公「戀に焦がれた五月水、秋田になればふられ水……だ。秋風が吹いてからは冷い水は必要がないとみえるわい。年老の冷水とか云つて、そろそろ此婆アさまも冷水になりかけたのだよ。それだから人間をあてにしても駄目だと云ふのだよ。こんな婆アさまの後について來るよりも、矢張り孫公の側で看病して居つた方が宜かつたなア。さあ今頃は孫公は……房、芳の兩人は友達甲斐のない奴だ、俺の危難を見捨てて萬里の異郷に……と云つて嘸怨んで居るであらう。あゝ本當に友人の信義を忘れて居つた。これと云ふのも黒姫と云ふ黒い雲が包んで居つたからだ。さアこれから孫公を迎へに行かうぢやないか」

房公「迎へに行かうと云つた所で、此通り四邊が眞暗になつては危なうて歩く事が出來ぬぢやないか。まアゆつくりと氣をおちつけて、明日の朝迄此處で夜を明

かし、改めて足許が分つてから慰問使となつて行かうぢやないか」

芳公「此處でドツサリと慰問袋の用意をして置かうぢやないか、アハ、ハ、ハ、」

黒姫「コレコレ兩人、闇がりに何をグツグツと、云つて居るのだい。早く寝みな

さらぬか」

房公「何分、黄金の玉と麻邇の寶珠が私の天眼通にチラつき、高山彦さまが愛子

姫さまと抱擁接吻して御座る状態が、パノラマ式に眼底に映るものだから氣が揉

めて寝られませぬワイ。これを思ふと修羅が燃えて折角染めた頭髮までが褪げる

様な氣分になります。オツトドツコイ何時の間にか黒姫さまの靈が半分ば

かり憑つたとみえる、オホ、ハ、ハ、」

芳公「コレ高山彦さま、お前さまも餘りぢや御座んせぬかい。龍宮の一つ島まで

も手に手を把つて玉探しに行き、クロンバー、クロンバーと云つて可愛がつて下

さつたが、男心と秋の空、變れば變る世の中ぢや。六十の尻を作つて、未だ三十

にも足らぬ愛子姫とやらを女房に持つとは、量見がチト違ひはしませぬかい。お

半長右衛門よりも年が違つてる女房を持つて、それが何名譽で御座んすか。エー

口惜い、残念な、(サハリ)折角長の海山を越え、お前に會ひ度い會ひ度いと、
苦勞艱難しながらも、此處迄探ねて來た妾、鶉の尾を切つた様に、思ひきるとは、
それや聞えませぬ高山彦さまオツチンオツチン……」

房公は作り聲をして、

「アイヤ黒姫、そなたの心は察すれども、雀百まで雌鳥を忘れぬとやら、棺桶に
片足突込んだ白髪頭の皺苦茶婆よりも、今を盛りと咲き匂ふ、水も滴る様な愛子
姫の香りに、サツパリ此高山彦も精神顛倒し、麝香の香に比して糞臭の臭に似た
糞婆と、如何して一緒になる事が出來やうかい。思はぬ望みを起すより、思ひき
つて國許に歸つたが宜からうぞや。武士の言葉に二言はない。その手を放しや……
と衝つ立ち上り一閒にこそは入りにけり。チャチャチャンチャンチャンぢや
芳公「そりや聞えませぬ高山彦サン、お言葉無理とは思へども、初めて會うた其
日から、壽老の様な長頭、南瓜の様によく光る、若い時から皺だらけ、翠玉に目
鼻をつけた様な其お顔立ち、こんな男と添うたなら、何時迄もお顔の色は變るま
いと、そればつかりを樂しみに、ウラナイ教の教理に背き、お前を夫に持つたの

は、よもや忘れては居やしやんすまい。思へば思へば残念ぢや口惜いわいな……
と取りすがつて、涙さき立つ口説き言、才ホ、ホ、ホ、

黒姫「コレコレ兩人、又しても又しても妾を擲掬ふのかい。あまり馬鹿にしな
るな。女一人と侮つて無禮な事ばかり仰有るが、今に高山彦さまに出會つたら、
お前等の無禮を残らず申上げるから、其時には何程謝つても量見はしませぬぞや。
チツと嗜みなされ」

房公「何だか知らぬが、高山彦や黒姫さまの靈が兩人の身體に憑依して、あんな
事言ふのだもの、仕方がありませんわ」

黒姫「大方、孫公の靈が憑いたのだらう。どれ是から妾が闇がりだけど鎮魂して
あげませう」

と云ひ乍ら雙手を組み天の數歌を一生懸命に謠ひあげ、

黒姫「國治立大神様、豊國姫大神様、日の出神様、龍宮乙姫様、木花咲耶姫大神
様、何卒一時も早く高山彦に會はして下さい。次には此兩人に憑いて居る惡靈を
速に退却させて下さいませ。憐れな者で御座いますから……」

此時闇がりにガサリガサリと何者かの足音が聞え、傍の岩窟の中へ這入る様な氣配がした。

(大正一一・九・一二 舊七・二一 北村隆光録)

第四章 歌垣(九五四)

三人は暗の中に端坐し、寝つきもならず、夜の明けるのをもどかしげに待つてゐる。忽ち傍の岩窟より『ウーウー』と唸り聲が始まつた。夜は既に丑滿の刻である。森羅萬象寂として聲なく、蚯蚓の鳴聲さへ聞える静かさであつた。そこへ岩窟の中からウーウーと唸り聲が聞えて來たのだから、一層三人の耳には嚴しく感應へるのであつた。岩窟の中より何者の聲とも知れず、
『エ、えぐたらしい婆アだの。折角ここ迄連れて來た力になつた孫公を途中に見すてて、自由行動を執るとは、實にえぐい惡魔のやうな精神だ。此世の閻魔が

現はれて、汝が襟首取つ掴み、千仞の谷間へ放り込んでやらうか。

オ、鬼が大蛇か曲神か。譬方なき人非人、戀の暗路に踏み迷ひ、はるばる年を老つてから、亞弗利加三界迄、犬が乞食の後を嗅つけたやうにやつて來るとは、さてもさても見下げ果てたる婆アぢやなア。

カ、烏の様な黒い顔を致して、何程秋波を送つても、高山彦は見向きも致そまいぞや。かけがへのない大事の男だと、其方は思つて居るだらうが、高山彦は天空海闊、汝が如き婆アには一瞥もくれず、到る處に青山あり、行先や吾家で、世界の女は残らず吾妻と、極端に慈善主義を發揮し居る、氣の多い男の愛を、獨占しようと思つても駄目だよ。早く、カ、改心致して歸つたがよからうぞ。

キ、氣味の悪い此谷間で、夜を明かし、月照彦神に散々脂を絞られて苦しむよ
りも、一時も早く自轉倒島へ立歸れ。神は嘘は申さぬぞよ

黒姫は首を傾け乍ら……どことはなしに、最前の孫公の聲に能く似てゐるなア
……と半信半疑の念に驅られてゐる。

黒姫「コレコレ、何者の惡戯か知らぬが、此暗い夜さに、そんなせうもない言靈

は止めて貰ひませうかい。アタ面白くない、悪神さま迄が、高山彦々々と云つて、此黒姫をからかふのだな。随分柄の悪い厄雜神だなア」

房公「モシ黒姫さま、お前さまはそれだから可かぬと云ふのだ。神様に口答へをするといふ事がありますか」

黒姫「黙つてゐなさい、子供の口出しする所ぢやありません。黒姫には勿體なくも、龍宮の乙姫様が、御守護遊ばして御座るのだから、天地の間に恐るべき者は、國治立命様只一方計りだ。其他の神々は皆枝神さまだ。其國治立命様の片腕になつて御働き遊ばす龍宮の乙姫様の……ヘン生宮で御座りませぬ。何ほ暗いと云つても、餘り見違をして貰ひますまいかい……なア龍宮の乙姫様」

房公「ヘーン、永らく龍宮の乙姫さまを聞きませなんだが、一體どこへ行つて御座つたのですか」

黒姫「龍宮の乙姫様の肉體は即ち黒姫だ。黒姫の靈は即ち龍宮の乙姫様だ。それが分らぬやうな事で、三五教の信者と言へますか」

芳公「私は又、龍宮の乙姫様はモット立派な御方で、其御神力の億萬分の一程黒

姫様に靈が憑つてゐるのだと思つてゐるのだが、黒姫様の靈が全部龍宮の乙姫と聞いては、最早乙姫様を尊敬する氣がなくなつて了つた。何だ阿呆らしい、こんな事なら、はるばる可愛い女房子を棄ててここ迄従いて來るのだなかつたになア。孫公はあんな目にあはされて、くたばるし、黒姫さまの箔はサツパリ剥げるし、岩窟の中から怪體な聲がするし、夜は追々と更けて來る。あゝ是程ガツカリした事があらうか、……なア房公、夜が明けたら、お前と二人孫公の坐つてる所へ往つて助け起し、三人は元の聖地へ歸らうぢやないか。本當に馬鹿らしい目にあつたものだ」

黒姫「コレコレ兩人、お前は此黒姫をまだ諒解してゐないのだなア。千變萬化、變幻出沒極まりなき龍宮の乙姫様の御神力を御存じないのだなア。抑も龍宮の乙姫様は一朝時を得れば、天地の間に蟠り、風雨雷電を起し、地震をゆらし、大國治立尊の御神業の片腕に御立ち遊ばすのだ。今日は乙姫殿の蟄伏時代だ。時到来すれば、蠓螋、蚯蚓と身を潛めて、所在天下の辛酸を嘗め、救世濟民の神業に奉仕してゐるのだよ」

芳公よしこう「ヘーン、高山彦たかやまひこのハズバンドをはるばる捜さがしに廻まはるのが、それが救世済民きうせいさいみんの御神業ごしんげふと申まをすのですか。何なんと妙めうな救世済民きうせいさいみんもあつたものですなア」
黒姫くろひめ「エ、喧やかましい。ホヤホヤ信者しんじやの身みを以もつて、宣傳使せんでんしの心中しんちゆうが分わかつて堪たまるものか。高山彦たかやまひこ様は因縁いんねんの身魂みたま、此身魂このみたまと夫婦揃ふうふうそろはねば、經たてと緯よことの仕組しぐみは成就じやうじゆしませぬぞや。それだから、黒姫くろひめがはるばると高山彦たかやまひこ様を探たづねて來たのだよ。男をとこ早ひでりもない世よの中に、高山彦たかやまひこさまの様な老人としよりを、戀こひや色いろで、どうして斯こんな所ところ迄探たづねて來る者ものがありませんか。何程色なにほどいろの黒い黒姫くろひめだとて、ヤツパリ女をんなは女をんなだ。捨すてる神かみもあれば拾ひろふ神かみもあるのだから、男をとこが欲ほしければ、高山たかやまさまだなくつても、澤山たくさんにありますぞや。人民じんみんと云いふ者は直すぐそんな所ところへ心こころを廻まはすから困こまつて了しまふ。チツとお前まへも凡夫心ぼんぶこころを捨すてなされ。大神様おほかみさまが笑わらつてゐらつしやいますよ。

君きみならで誰たれをか知しらぬ吾心わがこころ

高山彦たかやまひこの夫つまぞ志したはし……オツホ、

房公ふさこう「ヘーン、どないでも理屈りくつはつくものですか。イヤもう貴女あなたの能辨のうべんにはサツパリ寒珍かんちん仕かまつりました。イヒ、、、」
岩窟がんくつの中なかより、

「イ、、【い】や廣ひろき筑紫つくしの島しまを捜さがす共とも

高山彦たかやまひこの影かげだにもなし。

【う】ろろとそこら邊あたりをうろついで

しまひの果はてに糞ばつ掴つかむなり。

【あ】こがれてここ迄まで來きたる黒姫くろひめも

アフンと致いたして泡あわを吹ふくなり。

遠國ゑんごくを股またにかけたる黒姫くろひめも

詮方せんかたなさに涙なみだこぼしつ。

【オ】イスタリヤ龍宮島りゅうぐうじまに渡わたり來きて

玉たまも取とらずに歸かへる憐あはれさ。

【か】しましき高姫司たかひめつかさに従したがひて

竹生ちくぶの島しまに玉たまをさがしつ。

【來】て見みれば眞まつ暗くらやみの岩いはの前まへ

怪あやしき聲こゑの聞きえ來くる哉かな。

暗くらがりに何なにか知しらぬが物ものを云いふ

狐きつね狸たぬきと迷まよふ黒くろ姫ひめ。

【怪】しからぬ惡わるい心こころを發は揮つきして

孫まご公こうさまを見み殺ころしにする。

今こ夜んやこそ一ひとつ脂あぶらを取とつてやる

二ふたつの眼まなこ白しろ黒くろ姫ひめの顔かほ。

【さ】てもさても迷まよひ切きつたる黒くろ姫ひめの

戀こひの暗やみをば如い何かに晴はらさむ。

白しろ波なみを押おし分わけ來きたる四よ人にん連づれ

黒くろ姫ひめ司つかさの口くち車ぐるまにて。

【ス】タスタと此れの谷間を登り来る

黒姫の面青く見えけり。

瀬を早み岩にせかるる谷川の

別れて末にあはれぬとぞ思ふ。

空を行く雲を眺めて思ふかな

高山彦の峰はいかにと。

立替ぢや立直しぢやと其處ら中

立つて騒いだ黒姫の尻。

千早振神代も聞かず黒姫の

黒き心は顔に出にけり。

月照の神の命の鎮まりし

此岩穴の恐ろしきかな。

【手】に合はぬ黒姫なれど岩窟の

神の足には踏まれてぞ行く。

【ト】コトンの改心出来るそれ迄は

高山彦は姿見せまい。

何事もおのれの我では行かぬもの

高姫司の改心を見よ。

西東北や南と驅まはり

玉を搜した心愚かさ。

烏羽玉の暗より暗き黒姫が

心の空を照せたきもの。

【ね】んごろに月照彦が説きさとす

道を畏み守れ三人等。

【の】ど元を過ぎて熱さを忘るてふ

黒姫司の心果敢なさ。

春すぎて夏すぎ秋の夕間ぐれ

衣の袖に露ぞこぼるる。

【ひ】さかた たかあまはら 立出でて

つくしの島に何をさまよふ。

【フ】サの國北山村の館をば

後に眺めて黒姫の空。

黒姫が心の倉を打あけて

見れば大蛇がうごなはりゐる。

怪しからぬ變性女子の行ひを

何も知らずに吐く黒姫。

屁理屈を朝な夕なにまくし立て

人に嫌はれ國を立ち去る。

【ほ】れぼれ たかやまひこ 惚々と高山彦に目尻下げ

涎をくつた昔戀しき。

【ま】すかがみ見むと思へば黒姫の

心の塵を吹き拂へかし。

【身】はここに心は高山彦の前へ

朝な夕なに神を忘れて。

【む】つかしき其面付は何の事

高山彦に嫌はれぬよに。

【目】をあけて己が姿を省みよ

高山だとして愛想つかさむ。

【も】ろもろの心の罪を吐き出して

神の御前に宣り直しせよ

黒姫は稍景色ばみ乍ら、聲する方に向つて、

【や】やししい暗の中から聲出して

口騒がしく何吐くらむ。

【い】ろいろと人の缺點をば竝べ立て

それで氣のすむ奴は曲神。

うかうかと聞いてはならぬ房公よ

芳公腹の据ゑ所ぞや。

幽靈のやうに取りとめないことを

岩に隠れて吐く曲神。

【え】ら相に月照彦の眞似をして

轉る奴は孫公なるらむ。

【世】の中に恐ろしい者はない程に

おどしの利かぬ黒姫を知れ。

來年のこと言や鬼が笑へ共

吾行く末を見て居るがよい。

理屈計り吐く舌こそ達者でも

身の行ひのそはぬ孫公。

累卵の危き身とは知らずして

黒姫くろひめさまをなぶ黽なぶる身み知らず。

戀れん慕ぼした高山彦たかやまひこのこと計ばかり

意い地ぢくねわる悪い孫公まごこうが言いふ。

【ろ】くでない其託宣そのたくせんはやめてくれ

耳みみがいとなる腹はらが立たつぞよ

岩窟がんくつの中なかより、一層いつそう大きな聲こゑで、

【わ】からやっない奴やつは黒姫計くろひめばかりなり

暗やみに迷まよふも無む理りであるまい。

【み】つまでも戀こひの虜とりことなり果はてて

此處ここ迄まで來きたか可か哀はい相さうな婆ばば。

【う】つつにも夢ゆめにも高山たかやま々々たかやまと

吐はきく言葉ことばを聞きくぞうたてき。

【夏】ん切つた男の尻を追ひまはし

アフンとやせむアフリカの野で。

【を】に大蛇狼さやぐアフリカの

荒野さまよふ戀の虜が。

ウツフ、、イツヒ、、

是れからは月照彦も宿を替へ

火の都へと進みゆかなむ。

黒姫よ胸に手をあて思案せよ

高山彦は獨身でないぞよ。

房公よ早く心を改めて

黒姫さまを思ひ切るべし。

芳公よよしや天地は沈む共

黒姫司くろひめつかさに従ついちやならぬぞ。

孫公まごこうはモウ今頃いまごろは火ひの國くにの

高山彦たかやまひこの側そばにゐるだろ。

高山彦神たかやまひこかみの命みことは黒姫くろひめの

様な女房やうにようぼうは好すかれまいぞや。

淡雪あはゆきの若わかやる胸むねをそだたきて

玉手たまでさしまきいねます高山彦たかやまひこ。

黒姫くろひめがこな所ところを眺ながめたら

さぞや目玉めだまを白黒しろくろにせむ。

まなじりをつつけ上げあ口くちを尖とがらして

鼻息はないきあらく熱ねつを吹ふくらむ。

いざさらば月照彦つきてるひこもこれよりは

黒姫司くろひめつかさをみすててぞゆく。

小島別教司こじまわけをしへつかさの其昔そのむかし

あらはれましし岩窟戀しき。

古いにしへの建日たけひの別わけの御跡おんあとを

後あとにみすてて行くぞ悲かなしき。

孫公まごこうはさぞ今頃いまごろは面白おもしろく

可笑をかしき歌うたをうたひ居をるらむ。

アハ、、、、オホ、、、、と笑わらひこけ

エへ、、、、イヒ、、、、今いまここを去さる。

暗やみの夜よに鳴なかぬ鳥からすの聲こゑきけば

あはれぬ先さきの高山彦たかやまひこぞ戀こひしき。

黒姫くろひめがいかこころに心こがを焦こがす共とも

高根たかねの花はなよ手折たをられもせず。

今頃いまごろは高山彦たかやまひこは聖地せいちにて

伊勢屋いせやの娘むすめと酒さけを吞のむらむ。

如意寶珠にょいほうしゆ紫玉むすめは云いふも更さら

黄金の玉は愛想つかして。

黒姫に肱鐵砲をくはしつつ

自轉倒島にかくれましけり

と云つた限り、足音を忍ばせ、何處ともなく行きて了ひけり。

黒姫「コレ房、芳の兩人、今の歌を聞きましたか、怪しからぬ事を云ふぢやない

かい」

芳公「何だか知りませぬが、實に感心な歌でしたよ、あの神さまの云つた通りで

すもの。餘程黒姫さまも、神界迄ローマンスが話の種になつてるとみえますな、

アツハ、、、」

黒姫「オホ、、、」

(大正一一・九・一二 舊七・二一 松村眞澄録)

第五章 對歌（九四六）

房公ふさこうは今の歌うたに引出ひきだされ自分じぶんも歌心うたこころになつたと見え、
腰折こしをれを謠うたひ出だしたり。 黑白あやめも分わかぬ闇やみの中なかから

房公ふさこうがいざこれよりは歌うたをよむ

黒姫くろひめさまよ確しつりと聞きけ。

野のも山やまも青あをく茂しげれる筑紫野つくしのに

黒くろい女をんなが一人ひとり立たつなり。

如意寶珠玉にょいほうしゆたまの所在ありかを探たづねたる

高姫たかひめ司つかさは今いまやいづくぞ。

黄金わうごんの玉たまの所在ありかを探たづねたる

黒姫くろひめさまは今いまは男探をとこたづねつ。

高山たかやまの彦ひこの夫をとこにはじかれて

恥はぢも知らしずに探さがし來くるかな。

黒くろ姫ひめを龍りう宮ぐうさまの乙おと姫ひめと

思おもうて來きたが馬ば鹿からしきかな。

吾わが妻つまのお鐵てつは嘸さぞや今いま頃ころは

空そらを眺ながめて待まち侘わびるらむ。

吾わが妻つまよお鐵てつよしばし待まつてくれ

愛あいの土みやげ産もを持もちかへるまで。

黒くろ姫ひめが夫をを思おもふ眞ま心こころを

汝なれに移うつして喜よろこばせて見みむ。

房ふさ公こうも遙はる々ばる海うみを渡わたり來きて

妻つまのみ戀こひしくなりにけるかな。

ここんんなな事こと計ばかりい云いふのぢぢやなけれども

黒くろ姫ひめの御み魂たま憑うづりしためぞ。

神かみ様さまの道みちを忘わすれて妻つまばかり

思おもふ心こころの愚おろかしきかな。

村むら肝きもの心こころを妻つまに筑つくし紫しがた湯た

深ふかき心こころを不知しらぬ火ひの汝なれ。

如い何かにせむ海かい洋やう萬ばん里りの波なみの上うへ

翼つばさなき身みのもどかしきかな。

黒くろ姫ひめの甘あまき言こと葉はに乗のせられて

知しらぬ他た國こくで苦く勞らうするかな。

今いま頃ころは四よ尾つをの山やまも紅もみぢ葉ぢして

錦にしきの宮みやは榮さかえますらむ。

言こと依より別わけ神かみの命みことの御おん姿すがた

目めに見みる如ごとく思おもはるるかな。

空もく助すけの神かみの司つかさの御み姿すがたを

思おもひ出だしても心こころ勇いさみぬ。

黒くろ姫ひめのけげんな顔かほを見みるたびに

浮世は厭になりけるかな。

来て見れば眞暗がりの岩の前

怪しき神の聲ぞ聞ゆる。

黒姫が負けず劣らず腰折れの

歌よみし時ぞをかしかりけり。

芳公よ貴様も一つ歌を詠め

歌は心の闇を晴らすぞ。

闇々と闇の帳に包まれて

黒姫さまの黒顔も見えず。

アハ、、、、オホ、、ホツホ、ウフ、、、、

エへ、、、、イヒ、笑ひ置くなり」

芳公は負けぬ氣になつてまた駄句り出したり。

芳公よしこうが宣のる言こと靈たまをよつく聞きけ

玉たまをころばす様やうな音ね色いろを。

一條ひとすぢや二條ふたすぢ繩なはでゆかぬ奴やつ

三筋みすぢの絲いとで縛しばる黒姫くろひめ。

孫公まごこうは今いまはどうして居ゐるだらう

心こころにかかる闇やみの世よの中なか。

是程これほどの無情むじやうな女をんなと知しらずして

ついて來きたのを悔くやしくぞ思おもふ。

惟かむながら神かみの教をしへに離はなれたる

黒姫くろひめこそは曲神まがかみならむ。

曲神まがかみの醜しこの猛たけびを恐おそれつつ

間近まぢかの曲まがを知しらざりし吾われ。

三五あななひの誠まことの道みちを教をしへ行く

神かみの司つかさが船ふねを盗ぬすみつ。

此この船ふねは老朽おいちたれど高山彦たかやまひこの

神かみの命みことを乗のするなるらむ。

闇くらがりの臭くさい谷間たにまに包つつまれて

息いきはづまして暮くらす苦くるしさ。

是これよりは黒姫くろひめさまに暇ひまくれて

房公ふさこうと共に國くにへ歸かへらむ。

房公ふさこうよ思おもひ切きるのは今いまなるぞ

乙姫おとひめさまの現あらはれぬうち。

龍宮りうぐうの乙姫おとひめさまの生宮いきみやと

はしやがれては堪たまらざらまし。

さア早はやく黒姫くろひめさまに立別たちわかれ

立たち去さり行ゆかむ火ひの神國かみくにへ。

逸いちはや早くこれの谷間たにまを立たち出いでて

高山彦たかやまひこの注進ちうしんやせむ。

注進ちうしんを聞きいて高山たかやま驚おどろいて

姿すがたかくせば嘸さぞ面白おもしろからむ。

さうならば黒姫くろひめ如何いかに騒さわぐとも

後あとの祭まつりの詮術せんすべもなし。

アハ、ハ、ハ、オホ、ハ、ハ、ツホ、ウフ、ハ、ハ、

エ、イ、加減かげんに止やめて置おくなり」

黒姫くろひめは闇やみの中なかより聲こゑを張はり上あげて、

㊦ 房芳ふさよしの二人ふたりの奴等やつらよつく聞きけ

龍宮りゅうぐう様の神かみの教をしへを。

瘦犬やせいぬのやうな面つらしてつべこべと

嘖さへつる姿臍すがたへそをよるなり。

何事なにごとも知しらざる癖くせに黒姫くろひめの

小言こごと云いうとは怪けしからぬ奴やつ。

黒姫くろひめは誠まことの神かみの生宮いきみやぞ

思おもひ違ちがひをするな房芳ふさよし。

房芳ふさよしよ「よし」や天地てんちはかへるとも

高山たかやま彦ひこは黒姫くろひめの夫つま。

高山たかやまの吾背わがせの命みことに出遇であひなば

汝なれが無禮ぶれいを告つげて聞きかせむ。

獨身ひとりみの黒姫くろひめなりと侮あなどつて

後あとで後悔ごうくわいするな兩人りやうにん。

後悔ごうくわいは先さきに立たたぬと云いふことを

よくわきまへて口くちを慎つつしめ。

口計くちばかり千年せんねん先にさきに生うまれ來きて

吐ほく曲神まがみの愚おろかしきかな。

これ位くらゐ分わからぬ奴やつが世よにあるか

黒姫くろひめさへも愛想あいさうつかしぬ。

如何いか程ほどに侮辱ぶじよくされてもおとなしく

忍しのぶは神かみの道みち知しればこそ。

神かみの道みち捨すてた事ことなら黒姫くろひめは

赦ゆるしちや置おかぬ房芳ふさよしの奴やつ。

房芳ふさよしよ早はやく心こころを立て直なほし

誠まことの道みちに歩あゆみかへせよ。

黒姫くろひめの言葉ことばがお氣きに入いらぬなら

お前まへの勝手かつてにするがよからう。

待まて暫しばし今いま兩入りやうにんに逃にげられちや

此この黒姫くろひめも一寸ちよつと迷惑めいわく」

房公ふさこう「さうか否いな一寸ちよつと迷惑めいわくなさるかな

火の都では大の迷惑。

高山と黒姫司の争ひを

今見るやうに思はれにけり。

黒姫が死ぬの走るの暇くれと

悋氣の聲を聞くぞうたてき。

うたうたと闇の帳に包まれて

明りの立たぬ歌を詠むかな。

疑ひの雲霧晴れて黒姫の

心の空の光る時まつ。

松が枝に鶴の巢籠る悦びを

愛子の姫が先にせしめつ。

サア締めたもつと締めたと兩人が

四疊半にてしめりなきする。

此處黒姫さまが見付けたら

嘸さぞしめじめと濕しめるだらうに。

遙々はるはると探たづねて來きたのに夫つまの家いへは

入はいつちやならぬと戸とをしめの家うち。

面おも白しろいあゝをかしいと手てを拍うつて

笑わらふ時ときこそ待またれけるかな。

アハ、ウフ、オホ、

縁えんぎ起ぎでもない云いひ草くさぞ聞きく

芳公よしこうは又またもや闇くらがりから謠うたひ出だしたり。

□
ほのぼのと夜よは明あけ近ちかくなり

早はや立ち往ゆかむ火ひの國くに都みやこへ。

やがて又またからす鳥すずめや雀すずめが鳴なく

烏かひすばかりか泣なく人ひとがある。

まごまごと此處にかうしちや居られない

孫公さまは先にいただらう。

孫公の後おつけて進む身は

黒姫さまが邪魔になるなり。

顔ばかり黒姫さまと思うたに

心黒しと知らず居たりし。

何事も【よし】と呑み込む男達

【よし】や此身は朽果つるとも。

頼まれた事は後へは引かぬ俺

されど手をひく黒姫計りは。

手を引くといつてもこれの山坂を

手を曳くのではない黒姫婆さまよ。

手を曳いて登り度いとは思へども

生憎お瀧が居らぬ悲しさ。

お瀧殿たきどの嘸さぞ今頃いまごろは膝坊主ひざぼうず
かかへて此方こなたを眺めなが居をるらむらむ」

房公ふさこうは又またもや歌うたひ出だしたり。

「のろけないこりや芳公よしこうよあんまりだ

俺おれもお鐵てつが國くにに居をるぞよ。

色いろ白しろいお鐵てつのやうな妻つまなれば

のろけても【よし】ほめるのも芳よし。

さりながらお瀧たきのやうな蜥蜴面とかげづら

ちと心得こころえよ見みつともないぞよ」

芳公よしこう「何吐なにぬかす蜥蜴面とかげづらとは誰たれに云いうた

黝面いたむらした嬢かかを持ちつつ。

柿かきの木きに雨蛙あまかへるめ奴めが登のぼるよな

でかいお鐵てつを夢ゆめに樂たのしめ。

鐵てつのよな黒くろい顔かほした女房にようぼうを

【房ふさいく】なとは思おもはぬか惚ほれた弱よわみで

黒姫くろひめ 『矢釜やかましい雲雀ひばりのやうな二人共ふたりども

もう夜よが明あけた手水てうづつかへよ。

さア早はやく天津祝詞あまつのりとを奏上そうじやうし

朝餉あさげすまして出立しゅつたつをせよ。

無花果いちじゆくの木この實みはここにあるけれど

雲雀ひばりに食くはす無花果いちじゆくはなし。

惟神かむながらかみ神かみの御靈みたまの幸さちはひて

此この無花果いちじゆくは生命いのち助たすける。

麥むぎの穂ほがあれば雲雀ひばりもよからうが

實げに氣きの毒どくな次第しだいなりけり。

兵糧ひやうりやうさへ澤山たくさんあれば山坂やまさかを

越こえるも安やすし神かみの御惠みめぐみ。

御惠みめぐみに外はずれた二人ふたりのいぢらしさ

空腹ひもじかるらむ房ふさ芳よし憐あはれ。

憐あはれをば知しらぬ吾われにはあらねども

餘あまりの事ことに呆あきれ果はてけり。

高山たかやまの吾背わがせの君きみが待まつと聞きく

火ひの國都くにみやこへ急いそぐ樂たのしさ。

黒姫くろひめは兵糧ひやうりやうもたんと持もつて居ゐる

一宿いちじく二宿にじく三宿さんじくのため

房公ふさこう「これや婆さまばさま一つ俺おれにも分配ぶんぱいせ

餘あまり冥加みやうがが惡わるからうぞや。

桃太郎ももたらうが鬼ヶ島おにがしまへと往ゆく時ときも

團子だんご半はんぶんやつた事こと思おもへ」

黒姫くろひめ「犬いぬなれば半はん分ぶん位くらゐやるも知しれぬ

欲ほしくばワンワン鳴なくがよからう」

芳公よしこう「ワンワンと犬いぬの鳴なき眞ま似まねするよりも

雉きしの眞ま似まねしてケンケンと云いふ」

黒姫くろひめ 「ケンケンと吐ほきく雉きじにはやりはせぬ
猿まじひのやうにキヤツキヤツと鳴なけ」

房公ふさこう 「馬鹿ばかにすな婆ばばの癖くせして桃太郎ももたらうの
氣取きどりで居ゐるとは片腹痛かたはらいたい」

黒姫くろひめ 「片腹かたはらが痛いたいと云いふのは嘘うそだらう

兩腹りゅうはらす「いた」、喰く「いた」からうに。

痛々いたいたしその面付つらつきを見るみにつけ

無花果いちじゆくの皮かはでもやり度たくぞある」

芳公よしこう 『食物しょくもつは神かみの與あたへと聞きくからは

其その無花果いちじゆくは俺おれの物ものだよ。

黒姫くろひめが獨占どくせんしようとはそりや無理むりだ

天則違反てんそくゐはんの罪つみに問とふぞよ』

黒姫くろひめ 『先取權せんしゆけんこの黒姫くろひめにあるものを

掠奪りやくだつするならして見みるも芳よし。

掠奪りやくだつの罪つみを重かさねて天國てんごくの

きつき戒いましめ喰くらふ憐あはれさ』

房公ふさこう 『喰くらふのが憐あはれさと云いつた黒姫くろひめが

持もつた無花果いちじゆく喰くらふ嬉うれしさ』

黒姫くろひめ 房ふさ、芳よしの二ふたつの雲雀ひばりに暇ひまとられ

早はや日の神かみは昇のぼりましけり。

カアカアと鳴ないた鳥からすに與あたへよか

雲雀ひばりに喰くはすを惜をしく思おもへば。

さり乍ながら此この雲雀ひばりとて天地あめつちの

みたまと思おもへば捨すてて置おかれず。

さアやらう一ひとつ喰くらへと投なげ出だして

社しゃ會くわい奉ほう仕しの善ぜん業げふつまむ

房公ふさこう 有あり難がたう黒姫くろひめさまの奮ふん發ぱつで

いちじく二にじく三さんじくを喰くふ

芳公よしこう「味のよい無花果いちじゅくだけは黒姫くろひめが

喰くらうた後あとのかすをくれけり。

かすでさへ是程これほど甘い無花果いちじゅくは

上等物じやつじゆものはいかに甘うまからう」

黒姫くろひめ「オホ、、、」

房ふさ、芳一度よしいちどに、

「アハ、、、」

三人さんにんは無花果いちじゅくに機嫌きげんをなほし、筑紫つくしヶ嶽がたけを宣傳歌せんでんかを謠うたひながら登のぼり行ゆく。

(大正一一・九・一二 舊七・二一 加藤明子録)

第六章 蜂はちの巢す (九四七)

高山彦たかやまひこの後あとを追おひ
遙々はるばる來きたりし黒姫くろひめは

房公ふさこう、芳公よしこうを伴ともなひて
筑紫つくしヶ嶽がを登のぼり行ゆく

細ほそき谷道たにみち右左みぎひだり
水成岩すみせいがんの此處ここ彼處かしこ

頭あたまを擡もたげて居ゐる中なかを
足あしに力ちからを入いれ乍ながら

エイヤエイヤと聲こゑ揃そろへ
一歩ひと々々あし登のぼり行ゆく

ウンウンウンと呻うめきつつ
芳公よしこうは歌うたを謠うたひ出だす。

芳公よしこう「あゝ惟かむながらかむながら
御靈みたま幸さちはひましまして

此急坂このきふはんをやすやすと
登のぼらせ給たまへ純世すみよ姫ひめ

ウントコドツコイ息苦いきぐるし
ハアハアハアハア スウスウスウ

すべて山坂やまさか登のぼるときや
向むかふを眺ながめちやいかないぞ

一歩ひと々々あし俯向うつむいて
梯子はしごを登のぼる心地こころして

進すすめば何時いつしか絶頂ぜつちやうに
ウントコドツコイ着つくだらう

とは云ふもののきつい坂　お嬢の　に上るとは

チツとは骨がある様だ　足はモカモカして來だす

ハアハアドツコイ、ウントコナ　腰の邊りがドツコイシヨ

如何やらハアハア變挺に　フウスウフウスウ、ドツコイシヨ

なつて來たでは無いかいな　高山彦へ登るのは

餘程骨が折れるわい　ハアハアこれこれハアハア、ドツコイシヨ

黒姫さまよ聞きなされ　高山彦と云ふ峠

中々登り難いぞや　にくいといつてもお前さまは

ハアハアフウフウ可愛いかる　可愛い男にドツコイシヨ

ハアハアフウフウあふのだもの　お前は前途に楽しみが

ウントコドツコイぶら下る　私は汗がぶら下る

こんな峠と知つたなら　ウントコドツコイ初めから

私は來るのぢやなかつたに　胸突坂の嶮しさよ

水成岩や火成岩　片麻岩かは知らねども

本當ほんたうに堅かたい石道いしみちだ 皆みなさまドツコイ氣きをつけよ

ウツカリ滑すべつて向脛むかふすねを ウントコドツコイ擦すり剥むいちや

自轉倒島おのころじまにドツコイシヨ 殘のこして置おいた女房子にようぼうこに

あはせる顔かほが無ない程ほどに 房公ふさこうさまも氣きをつけよ

ウントコドツコイ、ハアハアフウ 芳公よしこうさまも氣きをつける

黒姫くろひめさまはドツコイシヨ 高山たかやまたつげ峠たけを登のぼるのだ

假令たとへむこずね 剥むいたところで得心とくしんだ

現在げんざい夫をの名なの様やうな 筑紫つくしヶ嶽がたけのドツコイシヨ

高山たかやまたつげ峠たけをフウフウフウ 這はうて居をるのぢや無ないかいな

何程なにほど戀こひしいドツコイシヨ 高山たかやまひこ彦ひこでも此この様やうな

きつい險さかしい心こころでは 黒姫くろひめさまも困こまるだらう

ウントコドツコイ氣きをつけよ そこには尖とがつた石いしがある

筑紫つくしの國くに迄までやつて來きて ドツコイ怪け我がしちや堪たまらない

朝日あさひは照てるとも曇くもるとも 月つきは盈みつとも虧かくるとも

假令^{たとへ}大地^{だいち}は沈^{しづ}むとも 此坂^{このさか}越^こえねばならぬのか

黒姫^{くろひめ}さまのドッコイシヨ ハアハアフウフウ フウスウスウ

戀^{こひ}の犠^ぎ牲^{せい}に使^{つか}はれて 踏^ふみも習^{なら}はぬ山坂^{やまさか}を

登^{のぼ}り行^ゆく身^みの馬鹿^{ばか}らしさ ホンに思^{おも}へば前^{さき}の世^よで

ウントコドッコイ汗^{あせ}が出^でる 如何^{いか}なる事^{こと}の罪^{つみ}せしか

因果^{いんぐわ}は廻^{めぐ}る小車^{をぐるま}の 小車^{をぐるま}ならぬ石車^{いしぐるま}

澤山^{たくさん}轉^{ころ}がつてドッコイシヨ 其處^{そこ}ら四邊^{あたり}に待^まつて居^ゐる

ウントコドッコイ暑^{あつ}い事^{こと}ぢや 汗^{あせ}と脂^{あぶら}を絞^{しぼ}り出^だし

蝉^{せみ}にはミンミン嘖^{さへつ}られ 頭^{あたま}はガンガン照^{てら}されて

ウントコドッコイ あゝ偉^{えら}い こんなつまらぬ事^{こと}は無^ない

あゝ惟^{かむながら}神^{かむながら}々々 叶^{かな}はぬ時^{とき}の神頼^{かみだの}み

國魂^{くにたま}神^{がみ}の純世^{すみよ}姫^{ひめ} 月照^{つきてる}彦^{ひこ}の神様^{かみさま}よ

何卒^{どうぞ}助^{たす}けて下^{くだ}さんせ 弱音^{よわね}を吹^ふくぢや無^なけれど

こんだけ辛^えらうては堪^{たま}らない どこぞ此處^{ここ}らの木蔭^{こかげ}をば

求^{もと}めて一^{いつぶく}服しようぢやないか ウントコドツコイ黒^{くろひめ}姫さま

も一^{ひと}つ無^{いちじゆくだ}花果出しとくれ 喉^{のど}がひつつきさうになつて來^きた

ハアハアフウフウ フウスウスウ こんな苦^{くちらう}勞をするのんも

元^{もと}を訊^{ただ}せばドツコイシヨ みんなお前^{まへ}の爲^ためぢやぞえ

皺^{しわくちやば}苦茶婆さまのドツコイシヨ 分^{ぶんざい}際^い忘^{わす}れて高^{たか}山^{やま}の

峠^{たうげ}に登^{のぼ}らうとする故^{ゆゑ}に 俺^{おれ}迄^{まで}迷^{めい}惑^{わく}するのんだ

ウントコドツコイ俺^{おれ}のみか 家^{うち}のお嬢^{かか}も困^{こま}つてる

皇^{すめ}大神^{おほかみ}の御^{おん}爲^ために 御^ご用^{よう}に立^たつならドツコイシヨ

どんな苦^{くちらう}勞も厭^{いと}やせぬ 思^{おも}へば思^{おも}へば馬^ば鹿^からしい

千^{せん}里^り二^に千^{せん}里^り三^{さん}千^{せん}里^り 荒^あ波^{らなみ}越^こえてドツコイシヨ

筑^{つく}紫^しの島^{しま}まで導^{みちび}かれ ハアハアフウフウ あゝ暑^{あつ}い

汗^{あせ}が滲^{にじ}んで目^めが見^みえぬ つまらぬ事^{こと}になつて來^きた

ウントコドツコイ黒^{くろひめ}姫さま 一^{ちよつと}寸^と一^{いつぶく}服しようぢやないか

何^{なに}程^{ほど}あせつて見^みた處^{ところ}が 二^ふ日^{つか}や三^み日^{つか}や十^と日^{をか}では

火の國都へ行かれない 叔母が死んでも食休み

ドッコイシヨードッコイシヨ 暑中休暇の流行る世に

休なしとは胸欲ぢや 私もどうやら屁古垂れた

何卒一服さして呉れ それそれ向ふの木の枝に

甘さうな果實がなつて居る あれ見てからは堪らない

もう一步も行けませぬ あゝ惟神々々

御靈幸はひましませよ オット危ない石車

スツテの事で向脛を 傷ひやぶる處だつた

これも矢張り神様の 深き尊き御守護

此處で休んで行きませう 御足の達者な御方等は

何卒お先へ行つてくれ 欲にも徳にも代へられぬ

生命あつての物種だ 行きつきバツタリ焼糞だ

ハアハアフウフウ フウスウスウ 如何やら呼吸がきれかけた

汗も膏も乾き果て もう一滴も出ない様に

カンピントンになりかけた ウントコドツコイ休まうか
云ひつつドスンと腰下し 青葉の上に横たはる
黒姫、房公兩人は 渡りに舟と喜んで
木蔭に立寄り息休め 流るる汗を拭ひける。

三人は汗を拭ひ乍ら、油蝉の鳴く木蔭に息を休めて居る。巨大な青蜂等が盛に襲撃する。フツと空を見上ぐれば大きな蜂の巣がぶら下つて居る。三人は「コリヤ大變！」と俄に立ち上り坂道さして逃げ出す。青蜂の群は敵の襲來と見誤つたと見え、兩方の羽翼に極力馬力を掛け、ブーンと唸りを立てて三人の頭を目撃して襲撃する。三人は幸ひ笠を被つて居たので蜂の剣を免れ、生命辛々二三丁許り思はず知らず坂道を驅登つて了つた。其處には高い山にも似ず美しい清水がチヨロチヨロと流れて居る。

芳公「ハアハアハアフウフウ……あゝ有難い。こんな結構な清水が此處に湧いて居るとは心づかなかつた。丸で夢に牡丹餅を貰つた様なものだ」

と云ひながら清水を両手に掬んで甘さうに何杯も何杯も飲み乾す。房公も次いで水を飲む。

房公「あゝ有難い、助け舟に遭うた様だ。瑞の御霊の純世姫様、生命の清水を與へて頂きました。之で瑞の御霊の御恩も適切に分らして頂きました。あゝ惟神靈幸倍坐世」

芳公「黒姫さま、貴女も一杯お飲みなさつては如何ですか、随分喉が乾いたでせう」

黒姫は苦りきつた顔をし乍ら、

黒姫「お前は本末自他公私の區別を知つて居ますか。天地轉倒したお前の行ひ、そんな水は假令渴しても飲みませぬワイ」

芳公「これは又妙な事を承はります。何がそれ程お氣に入らないのですか」

黒姫「長幼序あり、と云ふ事を忘れましたか。何故長者たる黒姫に先に水を勧めて其後を飲みなさらぬ。若い者が先へ飲んで其後を飲めとはチツと御無禮ではありませぬか」

房公ふさこう「なアんとむつかしい婆ばばんつだ喃のう。後あとから飲のんでも前さきから飲のんでも水の味あぢに
變かはりはあるまい。こんな處ところまで杓しゃく子し定規ぢやうぎをふりまはされて堪たまつたものぢやない。
黒くろ姫ひめさま、お前まへさまは部下ぶかを可愛かあいがると云いふ至み仁る至く愛こころの心こころに背そむいて居ゐますな。そ
んな事ことを仰あふせられると俺達おれたちの方ほうにも随ずい分ぶん言いひ分ぶんがありますよ。昔むかしシオン山ざんに戦たたかひ
のあつた時とき、言こと靈たま別命わけのみことの部ぶ下かに國治別くにいはるわけと云いふ大將たいしやうがあつた。其時そのとき數多あまたの部ぶ下かが敵てき
軍ぐんの爲ために重傷ぢやうしやうを負おひ喉のどが乾かわいて困こまつて居をつた。國治別くにいはるわけの大將たいしやうも同おなじく重傷ぢやうしやうを負お
ひ水みづを飲のみたがつて居ゐたが、手近てぢかに水みづが無ないので部ぶ下かの臣卒しんそつがやつとの事ことで谷川たにがは
に下くだり、帽子ぼうしに水みづを盛もつて國治別くにいはるわけの前まへへ持もつて來きた。其時そのときに澤山たくさんの部ぶ下かの臣卒しんそつは
其水そのみづを眺ながめて羨うらやましさうな顔色かほいろをして居ゐた。國治別神くにいはるわけのかみはそれを見みて自じ分ぶんの飲のみ度た
い水みづも飲のまず、部ぶ下かの臣卒しんそつに飲のましてやれといつて其場そのばに討死うちじにをなされたと云いふ
事ことだ。人ひとの頭かしらにならうと思おもへば其位そのくらゐな慈愛じあいの心こころが無なくては部ぶ下かは育そだちませぬよ。
お前まへさまは永ながらく法螺ほらを吹ふいて宣傳せんでんをして居ゐるが、眞味しんみの部ぶ下かが一人ひとりも出で來きぬの
で不思議ふしぎと思おもつて居ゐたが、矢張やつぱり精神せいしん上じやうの大缺陷だいけつかんがある。そんな利己われ主義よしで宣傳せんでんが
出で來きますか。神かみは愛あいだとか、人ひとを救すくふのが神かみだとか、何程なにほど立派りつぱに口先くちさきで喋しゃべり立た

ても事實が伴はねば駄目ですよ。お前さまは有言不實行だからそれで吾々も嫌になつて了ふのだ。水臭いと云ふのはお前さまの事だ。水の一杯位でゴテゴテ云ふのだから堪らないわ」

芳公「オイ房公、もうそんな水臭い話は【よし】にせい。下らぬ水掛喧譁になつちや瑞の御靈様に對して申譯がないからな。【みず】知らずの仲ぢやあるまいし、もうこんな争ひは綺麗薩張と水に流さうぢやないか」

黒姫「能うまあツベコベと揚足をとる男だなあ。妾が不用意の間に口が辻つたと云つて、それ程短兵急に攻めると云ふのはチツとお前さまも量見があまり良くはありますまい。人に叱言を言ふのなら先づ自分の身を省み、行ひを考へてからなさいませや」

と白い齒を出し頤を前にニユウと出し、二ツ三ツしやくつてみせた。

房公「あゝ、まだこれから此急坂を随分【てく】らねばなるまいから、喧譁は此處等できり上げておかうかい。さア御一同發足致しませう」

(大正一一・九・一二 舊七・二一 北村隆光録)

(昭和一〇・六・一〇 王仁校正)

第七章 無花果〔九四八〕

房公は坂を登りつつ又歌ひ出したり。

思へば昔其昔 日の出神や祝姫

面那藝彦の通りたる 筑紫ヶ嶽の山路を

黒姫さまの御蔭で スタスタ登る床しさよ

房公さまはドッコイシヨ 日の出神と云ふ格だ

芳公さまはドッコイシヨ 面那藝彦と云ふ役だ

黒姫さまの御爲に こんな山坂登らされ

ホんに誠に面の皮 晒した様なものだらう

黒姫さまは祝姫

神の命の宣傳使と

思おもうて見みてもドツコイシヨ

皺しわ苦く茶ちや婆ばアぢやはづまない

祝はの姫ひめのドツコイシヨ

やうな御お若わかい女をんななら

少せう々せう小言こごとを言いはれても

餘あまり苦くるしうはなけれ共ども

何なんぢや知しらぬが腹はらが立たつ

黒姫さまのウントコシヨ

方ほうから吹ふ來きる風かぜもいや

いやいや乍ながら従ついて來きた

ハアハアフウフウスウスウ

おれは何なんたる因いん果くわだる

こんな山やま坂さか登のぼるとこ

うちのお鐵てつが見みたならば

ウントコドツコイ悔くむだる

さぞや歎なげくである程ほどに

天道てんだうさまもドツコイシヨ

聞きえませぬと取とりついて

ウントコドツコイ泣なくだらう

思おもへば思おもへばいぢらしい

お鐵てつのことが苦くになつて

足あしも碌ろく々ろく進すすみやせぬ

あゝ惟かむ神な々ながら々かむ

神かみの御み靈たまの幸さちはひて

お鐵てつの體からだも恙つつなく

子こ供どもも丈ぢやう夫ぶでスクスクと

生立ちまして房公が

無事に凱旋するまでは

どうぞ守つて下さんせ

ハアハアスウスウ汗が出る

最前飲んだ清水奴が

頭の上まで上りつめ

薬罐頭がもり出した

汗が流れて目が痛い

ドッコイドッコイ膝坊主が

キヨクキヨク笑うて来よつたぞ

何が可笑して笑ふのだ

黒姫さまが一心に

高山峠を登るのが

ドッコイ可笑して笑ふのか

足の裏にはドッコイシヨ

痛いと思うたらウントコシヨ

大きな豆が出来たよだ

何程マメながよいとても

足の豆では眞平だ

黒姫さまに豆狸

守護致してこんな事

俺にさしたぢやあるまいか

こらこら芳公シツカリせ

お前の足は如何なつた

どうしても俺は歩けない

向ふに一つの樂みが

黒姫さまのドッコイシヨ

心の様にあるなれば

痛い足でも引摺つて 進み行く甲斐あるけれど

何の當途もなき涙 汗と脂を絞られて

これがどうして堪らうか ウントコドツコイドツコイシヨ

そこに尖つた石がある 氣を付けなされよ黒姫さま

もしや怪我でもしたなれば 高山さまにドツコイシヨ

會はすお顔があるまいぞ 怪我ない中に氣をつけて

ソロソロ登つて行かしゃんせ さはさり乍ら孫公は

どこにどうして居るだるか 猿の小便【き】にかかる

かかる處へ悠々と 現はれ来る五人連

三人の姿を一目見て コリヤ堪らぬと逃げ出す

怪しと跡を眺むれば 光つた物が落ちてゐる

矢庭に中をあけて見りや 黒姫さまが朝夕に

尋ね廻つたドツコイシヨ 黄金の玉が入れてある

それ計りか澤山の お金がチャラチャラなつてゐる

名さへ分らぬ甘さうな 果物迄も丁寧

ドッコイドッコイ三人のお方おあがりなされよと

言はぬ許りの顔してる 見るより三人は喜んで

先を争ひ驚掴み グツと呑み込む其甘さ

あゝあゝヤツパリ夢だつた 歩き乍らにこんな夢

見たるおかげでドッコイシヨ 喉から唾がわいて来た

あゝ惟神々々 夢でもよいから今一度

ドッコイドッコイこんな目に あはして下され頼みます

夢に夢見る心地して 行方も知れぬハズバンド

火の國都に御座るか 喉を鳴らして黒姫が

やつてゐたところドッコイシヨ 目算ガラリと相外れ

同名異人の人ならば それこそ夢がさめるだる

今見た夢は黒姫の 前途の箴をなしつるか

コリヤ斯うしては居られまい 黒姫さまえ如何なさる

夜食やしよくに外はづれた梟ふくろふの やうな六むつかしい顔かほをして
ケンケン當あたつて下くださるな 歩あるき乍ながらに見みた夢ゆめが
どうやらお前まへの前途ぜんとをば 知しらして呉くれた物ものらしい
ホんに怪けたい體たいな夢ゆめぢやなア あゝ惟かむながらかむながら神かみ々々
夢ゆめの浮世うきよと言いひ乍ながら こんな夢ゆめをば見みせずして
お慈悲じひに一度いちど黒姫くろひめを 高山彦たかやまひこにドッコイシヨ
會あはしてやつて下くださんせ これが私わたしの御願おねがひぢや
芳公よしこうとても其通そのとほり 黒姫くろひめさまを敵てきのよに
決けつして思おもうちや居をらうまい 惜をしそな惜をしそな顔かほをして
喰くらひ殘のこした無花果いちじゆくを 下くださるやうな御親切ごしんせつ
決けつして忘わすれちや居をらうまい 此房公このふさこうも黒姫くろひめに
先立さきだち水みづを飲のんだとて 小言こごとを言いはれた事こと丈だけは
水みづに流ながしたと言いひ乍ながら ヤツパリ覺おぼえて居をりまする
ウントコドッコイ水臭みづくさい 黒姫くろひめさまの御心底ごしんてい

あつく感謝し奉る　　ウントコドツコイドツコイシヨ

ハアハアハアハアフウスウスウ　　本當に嶮しい坂だなア

天津御空に雲の峰　　うすく黄色に光つてる

土中の熱さに蚯蚓奴が　　ピンピンはね出し日に焼かれ

カンピン丹になつてゐる　　命知らずの蚯蚓蟲

ウントコドツコイドツコイシヨ　　命知らずのウントコシヨ

蚯蚓計りぢやない程に　　ここにも一人や二人ある

又もや腹が空つて來た　　どこぞこらに果物が

なつては居ぬかと木々の枝　　ためつすかしつ眺むれど

喰へそな物は見當たらぬ　　困つたことが出來て來た

肝腎要な腹が空り　　どうして道中がなるものか

あゝ惟神々々　　御靈幸はひましまして

吾等三人の一行に　　おいしい果物下さんせ

命カラガラ願ひます　　ハアハアフウフウ、あゝえらい

二つの眼に汗にじみ　そこらが見えなくなつて来た

欲にも得にもかへられぬ　ここで一服致しませう

芳公お前も休まうか　黒姫さまとは事違ひ

前途に樂まない二人　如何して此上きばれうか

言ひつつコロリと横になる　あゝ惟神々々

御靈幸はひましませよ。

房公は道の傍にゴロンと横たはり乍ら、空行く雲を眺め、恨めし相な顔をして

黒姫を熟視してゐる。芳公も亦その傍に横たはり、足をピンピンさせ乍ら空行く

雲を愉快げに見つめて何事か小聲で囁き出した。

黒姫「皆々さま、モウ少し往つてから休んだら如何だなア。ツイ今清水のそばで

休んで来た所ぢやないか。こんなことしてゐると、山の中で日が暮れて了ひます

よ　房公「ヘン、今に限つて、皆々さま……と御丁寧にお出でなすつたな。其手は喰

へませぬワイ。吾々は最早機關の油が切れて了つたのだから、此上は運轉不可能だ。お前さまは心猿意馬といふ心の猿駒が火の國の都に望みをかけてゐるのだから、氣が急くだらう。夫程吾々兩人がまどろしくあるならば、どうぞお先へ、一足行つて下さい。命あつての物種だ。お前さまの戀の犠牲に貴重な命まで棒に振つては、一向計算が持てないから、まあ此處で一つゆるりと休養を致しますワ。へー誠に御都合が御悪う御座いませうが、成行だと諦めて、御勘辨下さいませ。何を云つても、龍宮の乙姫様の御肉體だから、大したものだ。私の様な足弱は、到底貴女と同様には行きませぬワイ。斯うして大地に背中を密着させて見ると、何ともなしに氣分が宜しい。……世の中に寝る程樂はなきものを、起きて働く馬鹿のたわけ……とか申しましてなア、命知らずの向う見ずに働く様な馬鹿は、アマア一人位なものでせうかい、アツハ、ウツフ、ウツフ、」

黒姫「コレコレ兩人、丁寧云へば、丁寧に言つて不足をいふなり、どうしたらお前さま、お氣に入るのだい。ホンにホンに度しがたき代物だなア」

芳公「シ口物でもク口物でも、到底つづきませぬ。第一、胃の腑の格納庫が空虚

になつて了つたのだから、施すべき手段がありません。お前さまの懐に持つてい
る其無花果を、せめて半ジユクでも良いから恵んで下さると、チツと許り機關が
運轉するのだがなア」

黒姫「エ、弱い男だなア。そんなら、之を一つあげるから、半分づつに割つて、
格納しなさい。そうすりや、チツと許り馬力が出るだらう」

房公「ハイ、どうせ婆アさまから貰ふのだから、バ力が出るは當然だ。併し乍ら
無花果を半ジユク頂いては、腹が下る虞があるから、せめて二三ジユク下さいな」

黒姫「エ、つけ上りのした男だなア。そんなら仕方がない、祕藏の無花果だけれ
ど、お前にあげませう。此峠を越す迄は果物がないと云ふ事だから、此重たいの
に【むし】つて來たのだ。お前達は注意が足らんから、こんな目に會ふのだよ。
それだから神様が食物を粗末に致すな、何でもまつておけ……と仰有るのだ。
こんな時になつて弱音を吹き、困らない様に大慈大悲の神様が、何時も御注意を
遊ばすのだから、これからは氣をつけたが宜しいぞや」
房公「イチジユク御尤もで御座います。貴方の御詞を是からは、一【イチジユク】

考致かういたしましてこんな破目はめに陥おちいらないやうに心得こころえます」

黒姫くろひめは二人ふたりの前まへに懐ふところから出だしては、一つづつポイポイと投なげてやる。二人ふたりは手て早く手てに受うけ乍ながら、

「一いちジユクニジユク……オツと三さんジユク、オツと四しジユク……」
と言いひつつ數かぞへ乍ながら受うけ取る。

黒姫くろひめ「ホンに行儀ぎやうぎの悪い男をとこだなア、丸まるきり四よつ足あしの容いれもの器ものみた様やうだ。せめて物食ものくふ時ときは起おき直なほり、チンとして頂いたきなさい」

房公ふさこう「ハイ、恐おそれ入いりました、御注ごちゆうい意あり有がた難がたう。……サア芳公よしこう、黒姫くろひめ様さまの御惠おめぐみを頂ちやうだい戴だいしようぢやないか」

芳公よしこう「黒姫くろひめさまのおかげで、一いちジユク、否いな一いち命ちめいが助たすかりました」
黒姫くろひめ「黒姫くろひめの尊たふといことが分わかつただらう」

芳公よしこう「流石さすがは黒姫くろひめさまですワイ。お年としを取とられた效かうで、何なにから何なにまで能ようお氣きが
つきますなア、オホ、、、」

と肩かたを上げ下げし乍ながら、飛とびつくやうにして、矢庭やにはに口くちの中なかへ掬ねぢこ込んで了しまつた。

黒姫は此姿を見て吹き出し、

黒姫「ホ、ホ、ホ、ホ」

と笑ひ乍ら腹を抱へる。

(大正一一・九・一二 舊七・二一 松村眞澄録)

第八章 暴風雨(一九四九)

房公、芳公の二人は、どうしたもののか、尻が大地に吸ひついたやうになつて、ビクとも動けなくなつて了つた。黒姫は「早く早く」と急ぎ立てる。されど二人の身體はビクとも實際動かなくなつてゐるのだ。黒姫はそんなこととは少しも氣がつかず、餘りのジレツたさに聲を尖らし、

黒姫「コレコレ兩人、お前はこんな所へ来て、此黒姫を困らす所存だな。あれ程事をわけて言ふのに、何故立たないのかい」

房公「黒姫さま、何と仰有つて下さつても、如何したもののか、チツとも足が立

ちませぬワ、……なア芳公、お前はどうかだ。チツと動けさうかなア」

芳公「おれも如何したもののか、チーツとも動けないよ。地の底から鼈でも居つて

吸ひつけるやうに、どうもがいたとて、動きがとれぬのだよ。あゝ困つたことが

出来た。……モシモシ黒姫さま、一つ鎮魂をして下さいな」

黒姫「ヘン、今迄あれ丈能く喋り、あれ丈無花果を食つておき乍ら、そんな元氣

な顔をして居つて、足が立たぬの、腰が動かぬのと、能う云へたものだ。動けな

動けぬで、私は先に失禮致します」

とピンと身體をふり、不足そうな顔をし乍ら、エチエチと登つて行く。瞬く中に

黒姫の姿は木の茂みに隠れて了つた。

芳公「オイ黒姫も餘程水臭い奴だないか……落ぶれて袖に涙のかかる時、人の心

の奥ぞ知らるる……と云ふ古歌があつたねえ、黒姫に依つて、此歌の意を實地に

味はふことが出来たぢやないか」

房公「オウさうだ……腰ぬけて涙に曇る山の路 黒姫さまの心知らるる……」

黒姫が何時もベラベラ口先で チヨロマカしたる尾は見えにけり……

だ。アハ、ハ、ハ、

芳公「此様に脛腰立たぬ身を以て 人の事共誹る所か……」

どうしても脛腰立たぬ其時は 野垂死より外はあるまい……」

房公「オイ、芳、そんな氣の弱いことを言ふものぢやないよ。神様が何かの御都

合で、吾々に少時休養を與へて下さつたのかも知れないよ。大方此向うあたりに、

大きな大蛇が居つて、俺たち一行を呑まうと待ち構へてをるのを、大慈大悲の神

様が助ける爲に、ワザとに足が立たないやうにして下さつたのか知れぬ。何事も

善意に解釋し、神直日大直日に見直し聞直し、何事が出来ても、神様の恵を感

謝し、災に會うても神を忘れず、喜びに會うても神を忘れぬ様に、誠一つを立て

ぬきさへすれば、神様が助けて下さるに違ひない、サア是から神言を奏上し、病

氣平癒の祈願をしようぢやないか」

芳公「それもさうだ。併し黒姫さまが、一人先へ行つたやうだが、其大蛇に呑ま

れるやうなことはあるまいかな。俺はそれが心配でならないワ。何程憎いことを

いふ婆アさまでも、ヤツパリ可哀相なからな」

房公「それが人間の眞心だよ。俺だつて、あゝ喧しく、黒姫さまを捉へてからか
つてはあるものの、はるばると夫の後を尋ねて、こんな所までやつて来る女と云
ふものは、滅多にあるものぢやない。實に女房としては尊い志だ。俺はモウ黒姫
のあの心に、實の所は感服してゐるのだ。どうぞ途中に災のない様、怪我のない
様に先づ第一に御祈願し、其次に自分たちの病氣の平癒を御祈りすることにしよ
うかい」

芳公「ヤツパリお前もさう思ふか、それは有難い、どうしても人間の性は善だな」
房公「そこが人間の萬物に靈長たる所以だ。神心だ。サア斯うして腰は立たない
が、其外は何ともないのだから、まだしも神様の御恵だ。先づ感謝の詞を捧げて、
次に祈願することにしよう」

と云ひ乍ら、二人は天津祝詞を奏上し了り、靜かに祈願をこらし始めた。

房公「あゝ天地を造り固め、萬物を愛育し玉うたる、宇宙の大元靈たる大國治立
大尊様を始め奉り、天津神、國津神、八百萬神々様、私はあなた方の尊き御威光

と、深きあつき御恵に依りまして、此尊い地の上に生れさして頂き、何不自由なく、尊き日を送らして頂きました。そうして知らず識らずに重々の罪科を重ね、人間としての天職を全う致さず、不都合なる吾々をも御咎め玉はず、いたはり助けて此世を安く楽しく送らせ玉ふ、廣きあつき御恩寵を有難く感謝致します。：此度三五教の宣傳使、黒姫様の御伴を致しまして、萬里の海洋を渡り、恙なく此筑紫の島に渡らして頂き、此處迄無事に神様の懐に抱かれて登つて参りました。乍併、如何なる神様の御攝理にや、吾々兩人は此木蔭に息を休めますると共に、不思議にも腰が立たなくなつて了ひました。これと云ふのも、全く吾々の重々の罪が酬うて來たので御座いませう。神様の廣大無邊の大御心を、吾々として計り知ることとは到底出來ませぬが、乍併、神様は吾々人間をどこ迄も愛し玉ふ尊き父母で御座いまする以上、何か吾々に對して手篤き御保護の爲に斯の如く吾が身を縛り下さつたことと有難く感謝致します。つきましては黒姫様は一足先に御立腹遊ばして、此坂路を登られました。何卒途中に於て、惱み災の起りませず、どうぞ恙なく火の國の都へお着きになりますやう、特別の御恩寵を與へ玉はむこと

を懇願致します。又吾々兩人は如何なる深き罪科が御座いませうとも、大慈大悲の御心に見直し聞直し、宣り直し下さいまして、何卒一時も早く、此身體に自由を御與へ下さいますやう、慎み敬ひ祈り上げ奉りまする、あゝ惟神靈幸倍坐世と合掌し、感謝の涙をハラハラと流してゐる。何程祈つても、如何したもののか、二人の身體はビクともせない。

日は追々と西山に傾き、一天俄に黒雲起り、礫のやうな雨パラパラとマバラに降り来る。雷鳴か暴風雨が將た地震の勃發か、何とも云へぬ凄慘の氣が四面を包むのであつた。

二人は撓まず屈せず、一生懸命に……三五教を守り玉ふ皇大神、吾等兩人を始め、黒姫の身邊を守らせ玉へ……と主一無適に祈願をこらしてゐる。山の老木も打倒れむ許りの強風、忽ち吹き來り、巨石を木の葉の如く四方に飛ばせ、木を倒し、枝を裂き其物音の凄じさ、何に譬へむものも泣く計りなりき。

此時何處よりともなく風のまにまに、宣傳歌が聞え來たりぬ。

玉治別たまはるわけ 神かみが表おもてに現あらはれて 善ぜんと悪あくとを立たて別わかける

此世このよを造つくりし神直日かむなほひ 心こころも廣ひろき大直日おほなほひ

只何事ただなにごとも人ひとの世よは 直日なほひに見直みなほせ聞直ききなほせ

身みの過あやまちは宣のり直なほせ 三五教あななひけうの宣傳使せんでんし

吾われは玉治別司たまはるわけのかみ 三五教あななひけうの黒姫くろひめが

筑紫つくしの島しまに渡わたりたる 高山彦たかやまひこを探たづねむと

棚たななし舟ぶねに身みを任まかせ 渡わたり來きますと聞ききしより

齋苑いその館やかたを立たち出いでて メソポタミヤを打うちわたり

ヨルダン河かはに棹さそさして フサの海うみをば横斷わうだんし

いよいよ此處ここに來きて見みれば 思おもひもよらぬ山嵐やまあらし

げに淒すさまじき光景くわつげいぞ さはさり乍ながら吾々われわれは

誠まことの道みちの宣傳使せんでんし 如何いかなる事ことも恐おそれむや

朝日あさひは照てる共曇ともくもる共とも 月つきは盈みつ共虧ともかくる共とも

假令たとへ大地だいちは沈しづむ共とも 岩石雨がんせきあめをふらす共とも

筑紫ヶ嶽はさくる共とも 神かみに任まかせし此この身體からだ

玉治別の眞心まごころに 如何いかなる風かせもおし鎮しづめ

天ヶ下なる人草ひとぐさの 百ももの災吹わざはひふき拂はらひ

助けてゆかむ吾心わがこころ あゝ惟かむながらかむながら神々々

神かみの御靈みたまの幸さちはひて 國くに靈神たまがみと現あれませる

純世すみよの姫ひめの神柱かむばしら 吾われに力ちからを添そへ玉たまへ

吾われは是これより火ひの國くにの 都みやこに出いでて黒くろ姫ひめが

暗路やみぢに迷まよふ戀雲こひぐもを 伊吹いぶき拂はらひに拂はらひのけ

誠まことの魂たまを光ひからせて 自轉おのころじま倒島ちうしんちの中心地

四尾よつをの山やまの山麓さんろくに 大宮柱おほみやばしら太知ふとしりて

鎮しづまりませる神かみの前まへ 導みちびき歸かへり助たすけなむ

神かみの御靈みたまの幸さちありて 此山嵐速このやまあらしみやかに

鎮しづめ玉たまへば玉治別たまはるわけの 教司をしへつかさは逸いち早はやく

三五教あななひけうの黒くろ姫ひめに 出會であひて神かみの御詞みことばを

ひとひ　　早く　つた
一日も早く傳へなむ
あゝ惟神々々

みたまさち
御靈幸はひましませよ

と歌ふ聲、二人の耳に響き來たりぬ。

房公「オイ芳公、あの宣傳歌を聞いたか、どうやら玉治別の宣傳使が間近く見えたらしいぞ、神様は有難いものだなア。黒姫様にすてられた吾々二人は、脛腰立たず、苦み悶えている矢先、レコード破りの暴風雨に出會し、神様の御守りは信じ乍らも、戦々競々として、如何なることか、今も吾が身を案じて居たが、神様の御恵といふものは實に尊いものだ。神徳高き玉治別命様にこんな所でお目にかからうとは、神ならぬ身の知らなかつた。あゝ有難い……神様、早速御神徳を吾々二人の目の前に下し賜はりました。何とも御禮の詞が御座いませぬ」

と涙と共に感謝する。芳公も「はな」を啜りしやくり泣きし乍ら、両手を合せ感謝の意を表してゐる。宣傳歌の聲がピタリと止まつたと思へば、今迄山嶽も吹き散れよと許り荒れ狂うて居た暴風雨も、拭ふが如く拂拭され、空には雲の綻びよ

青雲の肌をチラチラと現はすやうになつて来た。雲の帳をあけて、天津日は漸く二人の頭上を斜に照らし始めた。

芳公「神様、有難う御座います。重ね重ねの御恵み、どうぞ今の宣傳歌の主に目會はして下さいませ、御願ひで御座います」

と両手を合せ、又もや祈願に耽つてゐる。不思議や二人の腰は知らぬ間に、自由が利くやうになつてゐた。

房公「あゝ有難い、足が立つた、腰が直つた。オイ芳公、お前は如何だ。ちと立つて見よ、俺は此通りだ」

と四股ふみならし、嬉しげに踊り狂ふ。芳公も案じ案じソウと腰を上げてみた。芳公「ヤア俺もいつの間にか、神様に直して貰つた、あゝ有難し勿體なし、……

サア房公、是からあの宣傳歌の聲のした方を搜してみようぢやないか」

房公「どうも不思議だなア。つい間近に聞えた宣傳歌の聲、斯うして登つて来た坂路を遠く見はらしてみても、人らしい影は見えない。乍併あの聲は此坂の下から聞えて来た様だ。不思議なことがあるものだなア。確に吾れは玉治別司と歌は

れた様に聞えたがなア」

芳公「確かに俺もさう聞いた。ヒヨツとしたら、あの宣傳使が最前の蜂の巢の下で、休息され、あの猛烈な青蜂に目でもさされて、苦んで御座るのだあるまいかな」

房公「ヨモヤそんなへまなことはなさる氣遣ひもあるまい、又あれ丈神力のある宣傳使のことだから、蜂の布も大蛇のヒレも持つて御座るに違ない。そんな取越苦勞はせなくてもよからうぞよ」

芳公「そうだらうかなア。そんなら、これからボツボツ此坂を登ることとしよう。黒姫様も最前の暴風雨で、嘸お困りだらうから、一つ追つついて御慰問を申上げねばなるまいぞ。玉治別の宣傳使も、或は此坂の上に御座るのかも分らない。風の吹きまはしやら、木笏の反響で、下の方から聲がしたやうに聞えたのだらうも知れぬ。サア行かう」

と言ひ乍ら、兩人は金剛杖を力に急坂を又もや登り行く。惟神靈幸倍坐世。

(大正一一・九・一二 舊七・二一 松村眞澄録)

第二篇 有情無情

第九章 玉の黒點（九五〇）

筑紫ヶ嶽の山脈の中心、高山峠の頂上に四五人の男、車座になつて何事か囁き乍ら、白黒の石を砂の上に竝べ、烏鷺を争うてゐる。

甲「どうも斯うも此黒がしぶとうて、邪魔んなつて仕方がない。此奴一つ殺して了ふと後は大勝利になるんだがなア」

乙「馬鹿言へ、此世の中は苦勞（黒）が肝腎だ。苦勞なしに物事が成就すると思ふか」

甲「すべての汚濁や曇りや、塵芥を除き去つた純白の此石は、丸で神様の御靈の様なものだ。能く見よ、中迄水晶の様に透き通つてゐるぢやないか。俺の爺は昔日の出神様が火の國へ御出でになつた時、御案内申した御禮として、水晶玉を下

さつたが、今に俺ん所の家寶として、大切に保存してあるが、其水晶玉の前に行つて、何でも御尋ねすると、宇宙の森羅万象がスツカリ映るのだ。それに此頃は如何したものか、二三日前から水晶玉の一部に黒點が出來よつて、非常に見つともなくなり、九分九厘と云ふ所迄は何事も判然と分らして貰へるが、其一厘の黒點の爲に遺憾乍ら、十分の判断がつかなくなつて了つたのだ。それだから黒は面白くない、殺して了へと云ふのだよ。黒い奴に碌なものがあるかい、三五教の黒姫とかいふ眞黒けの婆アが、何でも此筑紫島へ渡つて來よつたに違ないのだ。さうでなければ、國玉とも譬ふべき水晶玉に黒點が現はれる筈がない。それで今此處でお前達と白黒の勝負を闘はしたのも、一つは水晶玉が如何なるか、黒姫が果して此國の邪魔をするか……と云ふ事をトなつたのだ。どうしても此黒い石が邪魔になつて仕方がないワイ」

丙 「此黒い石を殺すと云つたつて、元から鑛物だ。動植物と違つて、生命をとる譯にも行かず、斬り倒して枯らす譯にも行かぬぢやないか」

甲 「それよりも、建野ヶ原の神館の建能姫さまは、此頃立派な婿様が出來たぢや

ないか。何でも建國別と云ふ立派な宣傳使だと聞いたがなア」

丙「建能姫さまは建日の岩窟に館を構へて御座つた建日別命の一人娘で、永らく神様の道を宣傳してゐられたが、餘り男が澤山に參拜して酒に酔うた揚句、其美貌に現をぬかし、何だかだと言ひ寄つて、蒼蠅くて堪まらないから、獨身主義を執つて居られた建能姫さまも、到頭決心なさつて、建野ヶ原へ宿替へをなされたのだよ」

乙「貴様も建能姫に肱鐵を喰はされた一人だらう……否一人でなくて猥褻行爲犯人だらう、アハ、ハ、ハ」

丙「馬鹿を言ふない。建能姫さまは體中から何とも云へぬ水晶玉の様な光が絶えず放射してゐるのだから、到底吾々凡夫がお側へでも寄りつかうものなら、夫れこそ目が潰れて了ふワ。何でも色の黒い、鼻の曲がつた男が、水晶玉を懐に入れて行きよつてなア、建能姫さまに面會し……これは吾家に傳はる重寶で御座います、これを貴女に献上致します……としたり顔に差出した所、建能姫様は厭相な顔付し乍ら、ソツと手に受取り、クルクルと轉がして見て……八八一此水晶玉に

は戀慕と云ふ執着心の黒點が現はれてゐるから、折角乍ら御返し申します……と
無下につき返された馬鹿者があると云ふ事だ。それで其男は玉の黒點が氣になつ
て堪らず、何うぞして此黒點が除れたならば、建能姫様に獻り、歡心を買うて、
ソツと婿にならうと云ふ野心があるのだ。其野心が除れぬ間は、何程日の出神か
ら頂いた水晶玉でも其黒點は除れはせないよ」
と言ひ乍ら、稍冷笑氣味に甲の顔をグツと見上げる。甲は電氣にでも打たれた様
に胸を轟かせ乍ら、顔を赤らめて沈黙に入る。
丁「それで玉公が、黒姫がどうの斯うのと言つて居やがるのだな。白石が負けて
黒石が勝つた時、掌中の玉を取られた様な顔色をしようたと思つたら、そんな深
遠な計略があつたのか、アハ、ハ、ハ……忍ぶれど色に出にけり吾戀は、物や思
うと人の問ふ迄……とか云ふ百人一首の歌そつくりだな」
乙「オイ玉公、そんな曇りのある水晶玉は、貴様ん所の不吉だから、いい加減に
川へでも投げ込んで了つたら如何だ。災の来る前にはキット寶の表に黒い影がさ
すと云ふ事だ。人間の面體だつて、凶事の来る前は、どこともなしに、黒ずんだ

斑點はんでんが現あらはれるのだからなア」

甲かふは力ちから無なげに、

玉公たまこう「捨てよといった所で、爺おやぢの言いひ付つけ、どんな事ことがあつても、此玉このたまは吾家わがやを出だす事ことは出で来きぬ。それ共とも尊たふとき神様かみさまが現あらはれなさつたならば獻上けんじやうして良よいが、決けつして人ひとに賣うつたり譲ゆづつたり、捨すてちやならぬと、死しんだ爺おやぢの遺言ゆゑごんだから、俺おれの自由じゆうにはならないのだ。建能姫様たけのひめさまが御受取りおうけと下くださらねば、もう仕方しかたがない、此玉このたまの黒こく點てんが除とれる迄まで、御祈願ごきぐわんをこらして身みを憤つしむより、俺おれには方法ほうはふがないのだ。併しかし俺おれの考かんがへでは、如何どうしても此筑紫島このつくししまへ黒姫くろひめがやつて來たきに違ちがひない、本當ほんたうに困こまつた奴やつが來たきものだ。日ひの出神様でのかみさまのやうな方かたがお出いでになれば、此玉このたまは益々ますます光ひかり輝かがくのだが、黒點こくてんが次第しだい々々しだいに擴ひろがつて、此頃このころでは半透明はんとうめいに曇くもつて了しまつた。あの玉たまの黒こく點てんから考かんがへて見みると、どうしても黒姫くろひめと云いふ奴やつ、今日けふ此頃このころは此峠このたうげのあたりへ近付ちかづいて來くる象徴かたちが見みえる。それで實じつの所ところはお前達まへたちを無花果いちじやくと取りにかこつけて、ここ迄まで誘さそうて來たきのだ。其序そのついでに、白黒石しろくろいしの勝負しやうぶをやつて見みたのだ。こりや如何どうしても黒くろが障さはつてゐる。黒姫くろひめを……否いや黒石くろいしを叩たたき割わつて了しまはねば、此國このくにはサツパリ駄目だめ

だよ。水晶玉の筑紫の島がサツパリ泥水になつちや堪らない。國魂の神様は此世を水晶に御澄し遊ばす純世姫命だ。俺ん所の祕藏の水晶玉は、言はば純世姫様の國玉だ。どうかして黒と名のつく物は亡ぼして了はなくちや、國家の一大事だよ。丁「そんな小ぼけな水晶玉に、廣大無邊のアフリカの國魂神様が憑つて御座るとは、チと理屈が合ぬぢやないか」

玉公「馬鹿云ふな。伸縮自在の活動を遊ばすのが、所謂神様の御高德だ。至大無外、至小無内、無遠近、無廣狹、無明暗、過去、現在、未來を只一塊の水晶玉に集めて、俺達が掌で玉を轉がす様に、自由自在になさるのが神様だ。其神様の御靈があのように曇りかけたのだから、吾々筑紫島の人間はウカウカしては居られな

いのだ。お前達は直に建能姫様に俺が戀慕をして居る様に、妙な所へ凡夫心を發揮しよるが、そんな陽氣な事ぢやない。今に地異天變が何時突發するか分つたものぢやないぞ。最初の暴風雨だつて、茲二十年や三十年、聞いた事がない荒れ方ぢやないか。大きな岩が木の葉の如くドンドンと降つて來る、大木は根から倒れる、木の枝は裂ける、無花果の様な雨が降る。よく考へて見よ。こりや決して只

事ぢやないぞ」

斯く話す所へ、蓑笠草鞋脚絆に金剛杖の輕き扮装にて、コツンコツンと、坂路を叩き乍ら登つて來る一人の中婆アがあつた。此れは言はずと知れた三五教の黒姫である。

黒姫は漸く頂上に登り詰め、ヤツと一安心したものの如く、左の手に金剛杖を固く握り體をグツト支へ、右の手の拳を固めて、腰を三つ四つ打ち叩き、

「アアア」

と云ひ乍ら、グツと背伸びをした途端に、五人の男が車座になつて、何か囁いてゐるのに目がつき、黒姫は、

「モシモシそこに御座るお若い御方、一寸物をお尋ね致しますが、火の國には高山彦といふ尊い宣傳使が御見えになつてをると云ふことを、お聞きぢや御座いませぬか」

乙「何處の婆アか知らぬが、此山路を大膽至極にも一人旅とは如何したものだ。高山彦様の身の上を尋ねて、お前は何とする考へだ」

丙「オイ虎公、餘りぞんざいな物言ひをしちやならぬよ。高山彦様のお母アさま

かも知れないからなア」

虎公「モシモシ貴女は御子息の所在を尋ねて、はるばる此處迄、御出でになつた

のですか」

黒姫「イエエ私わたくしは高山彦たかやまひこの妻つまで御座ございます。夫をととの後あとを慕したうて此處迄ここまで参まゐりました。

高山彦たかやまひこさまは御無事ごぶじであらつしやいますかな」

虎公「御無事ごぶじも御無事ごぶじ、夫それは夫それは大變たいへんな勢いきほひだ。乍併しかしながら、お前まへさまが高山彦様たかやまひこさまの女によう

房ぼうとはチツと合點がてんのゆかぬ話はなしだ。愛子姫様あいこひめさまといふ立派りつぱな奥様おくさまが御座ござるのに、お前まへ

の様な腰こしの曲まがりかけた婆アばあさまを女房にようぼうにお持もちなさるとは、チツと可笑をかしいぢや

ないか、ソリヤ大方おほかたひとちがひ人違ちがひだらう。俺おらまた又またそんな年老としよりが男をとこの後あとを慕したうて來くると云いふ

事は、昔むかしから聞きいた事ことがない、息子むすこの間違まちがひぢやないかな」

黒姫「私も息子むすこがあつただのだけれど、若わかい時ときに世間せけんの外聞ぐわいぶんが悪わるいと云いつて、四辻よつ辻

に捨て、人ひとに拾ひろはしたのだ。其天罰そのてんばつで夫をととには別わかれる、吾子わがこの行方ゆくへは知れず、年としは

追々おひおひ寄よつてくる、自分じぶんの子こはなし、力ちからとするのは神様かみさまと高山彦たかやまひこの夫計をととばかりだ。其高そのたか

山彦さまに若い女房があるとは、嘘ぢや御座いますまいかなア

虎公「決して嘘は言ひませぬ。一言でも嘘を言はふものなら、國魂神様の罰が當

つて、忽ち口が歪んで了ひます。此熊襲の國の人間に口が歪んだ奴の多いのは、

皆嘘を言つて神罰を受けた奴計りですよ、なア新公

新公「オウそうともそうとも、恐ろしいて、嘘のウの字も言はれたものぢやない

黒姫「あゝそうですかなア。折角此處迄長の海山越え、やつて来た黒姫の心も知

らずに、高山さまとした事が、若い女を女房に有つとは、餘り没義道だ。チツと

は私の心も推量してくれても能かりさうなものだのに。あゝ如何しようかな。進

みもならず退きもならず、困つたことになつて来たワイ

と涙をハラハラと流し、立つた儘、歎きに沈んで居る。

玉公「コレコレお婆アさま、お前さまは今、黒姫だと言ひましたねえ

黒姫「ハイ、火の國の都にまします高山彦の宣傳使の眞の女房で御座います

玉公「ハテ困つた事が出来て来た。私は此黒姫を亡ぼしてやらねば、此國が泥海

になつて了ふと、水晶玉の知らせに依つて此處迄やつて来て待つてゐたのだが、

御神徳高き高山彦様の奥さまとあれば、如何することも出来ない。高山彦様は筑紫の島の生神様、親様と、國民全體が尊敬して居る立派な御方、其奥様を虐げる譯には行かない。さうすると黒姫さま、貴女は高山彦様の本當の奥様に間違ありませぬか」

黒姫「決して間違はありませぬ、愛子姫と云ふのは、つまり高山彦さまのお妾でせう。一夫一婦の掟の厳しい三五教の宣傳使が、二人も本妻を持つ道理は有りませぬか」

玉公「ハテ合點のゆかぬ事だ。あれ丈立派な高山彦様が、妾を御持ちなさるとは、何たる矛盾であらう。何程戀は思案の外といつても、コリヤ又餘りの脱線振だ。

……モシモシ黒姫さま、貴女は一旦離縁されたのぢやありませんか。斯う云うと失禮だが、あんな立派な宣傳使が、お前さまの様な黒い御方と夫婦にならつしやるのは、丁度月と鼈、鷺と烏が結婚した様なものだから、お前さま自轉倒島とやらで、三行半を貰はしやつたのぢやありませんか。さうでない、如何しても高山彦さまの神格に照らし、合點の行かぬ節が澤山あるのだ」

虎公「モシ黒姫さま、最前お前さまは一人の子を捨てたと仰有つたが、其子は今生て居つたら幾つ位になつてゐられますかな」

黒姫「ハイ、今から三十五年前の事、今居つたならば三十五歳の血氣盛りの立派な男になつて居るだろう。若い時は親の許さぬ男の子を拵へて、世間に外聞が悪いと思ひ、無残にも四辻へ捨てたのだが、今になつて考えて見れば實に残念なことを致しました」

と今更の如く涙をハラハラと流し憂ひに沈む。

虎公「建野ヶ原の神館の建能姫様の御養子に見えたのは、今年卅五歳、建國別といふ立派な宣傳使だ。其お方も話に依れば、赤兒の時に捨兒をしられ、今に兩親の行方が知れぬので、三五教の神様を信じ、一日も早く誠の父母に會はして下さいといつて、一心不亂に信仰を遊ばし、遂には尊い宣傳使にお成りなされたといふ事です。今から丁度一年前だつた。火の國の館の高山彦様が御媒酌で建能姫様の御養子婿になられ、夫婦睦まじく、御神徳は日に夜に高く、それはそれは大變な勢で御座いますよ。よもやお前さまの捨てた御子さまではあるまいかなア」

黒姫くろひめ「何なに、建國たけくに別の宣傳せんでん使しが捨兒すてこだつたとなア。さうして其そのお年としが卅五さんじふご歳さい、八テ合點がてんのゆかぬ事ことだなア」

(大正一一・九・一三 舊七・二二 松村眞澄録)

第一〇章 空縁からえん (九五)

建野たけのヶ原がはらの神館かむやかたは、風景ふうけいよき小丘せうきうの上うへに小薩張こざつぱりとして新あたしく建たてられて居ゐる。千年ちとせの老樹らうじゆ、鬱蒼うつさうとして境内けいだいを包つつみ、實じつに神々かうかうしき地點ちてんである。前まへは激潭げきたん飛沫ひまつを飛ばとす深谷ふかたに川がはが横よこぎつて居ゐる。朝あさから晩ばん迄まで信徒しんとの參集さんしふする者もの踵きびすを接せつし、神かみの神德しんとくは四方よもに輝かがやき渡わたつて居ゐた。

館やかたの奥おくの間まには建國たけくに別の宣傳せんでん使し脇息けふそくに凭もたれ乍ながら深ふかき吐息といきをついて居ゐる。襖ふすまをそつと引ひき開あけ、湯ゆを盆ぼんにもつて淑しとやかに入はいつて來きた絶世ぜつせいの美人びじんは建能姫たけのひめであつた。建能姫たけのひめ「吾夫わがつま様さま、お早はやう御座ございます。お湯ゆが沸わきました、どうぞ一ひとつ召めし上あり下くだ

さいませ』

と差出す。建能姫の聲にも氣がつかぬと見え、目を塞ぎ黙念として何か冥想に耽

つて居る。建能姫は少しく聲を高め、

建能姫「モシモシ吾夫様、お湯が沸きました、召し上り下さいませ」

此聲に「ハツ」と氣が付いたやうな面持にて、

建國別「ヤア其方は建能姫、お湯が沸きましたかな、有難う頂戴致しませう」

建能姫「吾夫様、貴方は妾の家にお越し下さいましてから、恰度今日で滿一年に

なります。然るに唯の一度も妾に對し御機嫌のよいお顔を見せて下さつた事は御

座いませぬ。妾も初の間は不束なもの故お氣に召さぬかと存じ色々と氣を揉みま

したが、貴方様はいつも妾を可愛がつて下さいますので合點が行かず、何か深い

祕密がお有りなさるのであらうと、常々に濟まぬ事ながら御様子伺つて居りま

した。然る處或夜のお寢言に……父上母上に一目遇ひ度……と仰有つた事が妾

の耳に今に残つて居ります。何卒女房の妾に何の遠慮もいりませぬから、「ハツ

キリ」と仰有つて下さいませ』

と恐る恐る問ひかけたるに、建國別は、

「女房の其方に隠して居つて誠に濟まなかつた。水臭い夫と恨んで下さいますな。貴女は由緒ある建日別命様の御息女、此建國別は父母兩親の所在も分らず、況して素性は如何なるものか些とも見當が取れませぬ。今は建日別命様の後をつぎ、建國別と云ふ立派な名を頂き、尊き神様にお仕へをして居りますが、私の幼時は金太郎と云つて姓も知れず、人に拾はれ他人の情によつて、漸く三十五の今日迄成人して來ました。私の父母はもう今頃は此世に生て居られるか、或は彼世の人になつて居られるか、何だか知らぬが、兩親に遇ひ度い遇ひ度いと云ふ執着心がムクムクと腹の底より起つて來て、いつも知らず識らず顔がふくれ、不機嫌な顔をお前に見せました。何卒氣を悪くして下さるな」

建能姫「勿體ない何を仰せられます。今日は夫の吾家に入らせられてより滿一年の吉日、何卒機嫌をお直し下さつて、夫婦揃うて神様にお禮を申し上げ、心祝ひに皆の役員信者に御神酒でも饗應申しませうか。神様のお蔭で貴方も御兩親にキツトお遇ひなさる事が何れは御座いませう。何卒その様に落膽せず、潔く暮して

下さいませ」

建國別「ハイ有難う、そんなら今日は機嫌よう神様にお禮を致しませう。さうして役員信者に御神酒を頂かしませう」

建能姫は嬉し氣に、いそいそとして酒宴の用意を役員の建彦に命ずべく此場を下つて仕舞つた。

後に建國別は雙手を組み、兩親の身の上及び建能姫の親切なる言葉に感謝の涙止め難く、教服の袖に時ならぬ夕立の雨を降らして居る。建能姫は襖を靜に開き

丁寧ていねいに兩手りやうてをつき、言葉靜ことばしづかに、

建能姫「吾夫様、建彦に今日の祝宴は一切命じて置きました。サア、妾わらはと二人ふたりこれから神前へお禮れいに上りませう」

建國別は建能姫のやさしき言葉に満足の面を照しながら神殿深く進み入り、感謝祈願の祝詞を奏上するのであつた。玉を轉す如き建能姫の聲、音吐朗々たる建國別の祝詞の聲と琴瑟相調和して、得も云はれぬ風韻が境内に隈なく響き渡り、神々しき光景が溢れてゐる。

建彦以下の幹部役員を初め、數多の老若男女は早朝より詰めかけ、今日の祝宴に列すべく和氣靄々として、境内の各所に三々五々群をなし、建國別夫婦の高徳を口々に讚歎して居る。上下一致相和樂して恰も天國淨土の趣が館の内外に十二分に溢れて居る。かかる處へ表門を叩いて入り来る男女二人の道者があつた。

女「モシモシ、一寸此門を開けて下さいませぬか。妾は自轉倒島より参りました。黒姫と申す者で御座います。火の國の高山彦の宣傳使が女房だと仰有つて下されば、建國別様はキツとお會ひ下さるでせうから……」

門番の幾公は高山彦の女房と云ふ聲に驚き慌てて表門をサツと開いた。數多の参詣者の出入する門は横の方にある。此門は唯建國別個人としての住宅の門であつた。黒姫は、

「御苦勞さま」

と云ひ乍ら此門内に慌しく進み入る。幾公は一人の男の顔を見て、幾公「ア、お前は玉さまぢやないか。どうして又このお方の御案内をして來たのだ」

玉公「チツと合點の行かぬ事があるのだ。ひよつとしたら建國別様の此方はお母アさまかも知れないよ。夫で兔も角も御案内申したのだ」

と、耳の邊に口を寄せ他聞を憚るやうな面持にて囁いて居る。

幾公「それや大變だ。今日は建國別様の起し遊ばしてから滿一年の祝宴が開かれてゐる處だ。こんな芽出度い場所へお母さまがお越になるとは益々もつて芽出度い事だ。オイ玉公お前何卒暫く俺に代つて門番をして居て呉れ。俺はこれから建國別様にこの吉報を注進して來るから……」

と云ひ捨て黒姫に追ひつき行く。

幾公「モシモシ建國別のお母さま、ボツボツ來て下さい。私が先に御主人に御注進申上げ、お迎へに参ります。何卒この中門の傍に御苦勞乍ら暫く立つて待つて居て下さいませ」

と早くも慌者の幾公は、建國別の母親と固く信じて仕舞ひ、不遠慮に奥の間さして慌ただしくかけ込んだ。

奥の間には建國別夫婦、向ひ合ひとなつて祝の酒を汲み交はして居る。

建能姫たけのひめ「吾夫様わがつまさま、今日位氣けふくらぬきの何なんとなく嬉しい時ときは御座ございませぬア。それについでも貴方あなたの御兩親様ごりやうしんさまが此席このせきにお出いでになり、親子夫婦おやこふうふが斯かうして睦むつまじう直會なほらひのお神み酒きを頂いたくのならば、何程なにほど嬉しい事ことで御座ございませう」

建國別たけくにわけ「あゝさうですなア。併しかし私わたくしは今神前いましんぜんに御祈願ごきぐわんの最中さいちゆう、フツと妙めうな考かんがへが起おこりました。私わたくしの兩親りやうしんはキット此世このよに生いきて居あて神様かみさまの爲ために立派りつぱな宣傳使せんでんしとなり、活動くわつどうして居をられるやうな感かんが致いたしました。そうして今日けふは何なんとなしに兩親りやうしんに會あふ手蔓てづるが出来るできやうな氣分きぶんが浮ういて來きて、酒さけの味あじも一層いっそうよくなりました」

建能姫たけのひめ「夫それは夫それは何なによりも嬉しい事ことで御座ございます。キット神様かみさまのお引ひき合あはせで誠まことさへ積つんで居をれば、御兩親様ごりやうしんさまに御對面ごたいめんが出來ませう。妾わらはも一昨いっさく年兩親ねんりやうしんに別わかれ力ちからと頼たのむは唯ただ吾背わがせの命みことばかり、そこへ御兩親様ごりやうしんさまがお見みえにならうものなら、どれ程ほど嬉しい事ことで御座ございませう。妾わらははキット生うみの父母ちちははと思おもひ、力ちから限り孝養かうやうを盡つくしますから何卒どうぞ御安心ごあんしん下くださいませ」

と涙なみだぐむ。建國別たけくにわけは、

「ハイ有難ありがたう」

と云つたきり感謝の涙に咽び、無言の儘俯向いて居る。

その處へ足音高く慌ただしく入り来るは門番の幾公であつた。ガラリと襖を無造作に引きあげ、片膝を立てたまま手をついて、ハアハアと息をはずませ、幾公「もしもし御主人様、大變な事が出来ました。天が地となり、地が天になるやうな突發事件で御座いますよ」

建國別は稍氣色ばみ、忽ち立膝となり、建國別「お前は門番の幾公、大變事が突發したとは何事だ。早く云つて呉れない

か」

幾公「ハイ、大變も大變地異天變、手の舞ひ足の踏む所を知らずと云ふ喜びが降つて来ました。お目出度う御座います。御夫婦様お喜びなさいませ。あゝ嬉しい嬉しい目出度い目出度いおめでたい」

と手を拍つて立ち上り、「キリ」キリと舞うて見せた。夫婦は合點ゆかず、チツと幾公の亂舞を見詰めて居る。

幾公「これはこれは御主人様、餘り嬉しうて肝腎の申上げる事を忘れました。目

出度い時には目出度事が重なるものですなア、貴方のお母さまが、建國別の館は此處か、一度會ひたいと仰有つて、今、村の玉公の案内でお見えになりました。中門の口に待つて居られますから、何卒御夫婦様機嫌よくお出迎へ下さいませ。嘸お母さまもお喜びで御座いませう」

建國別は、

「ハテナア」

と云つたきり雙手を組み又もや思案に沈む。幾公は焦慮さうに、

幾公「これはしたり御主人様、ハテナも何もあつたものですか。愚圖々々して居られますと、お母さまが怒つて歸られたら、それこそつまりませぬ。喜びも一緒に歸つて仕舞ひます。何卒早くお出迎ひなさつて下さいませ。中門の口に立つて居られますから……」

建能姫「御主人様、免も角も貴方は此處に居て下さいませ。妾が實否を調べて参ります」

建國別「御苦勞だが貴方往つて来て下さい、假令眞偽は分らなくとも御丁寧に奥

へお通し申しゆつくりと話を承はりませう。可成人の耳に入らないやうにして下

さい」

建能姫「ハイ承知致しました。それなら妾がお迎ひに参ります……これ幾公や、お前此事は眞偽の分る迄誰人にも云つてはなりませぬよ」

幾公は頭を掻きながら、

幾公「ハイ併し乍ら、あまり嬉しいので四五人の連中に喋つて了ひました。もう今頃は建彦の幹部にも耳に入り、やがてお祝にテクテク詰めかけるでせう。今更

口留する譯にもゆきませず、どうしませうかなア」

建能姫「何とまあ氣の早い男だなア、萬一人違ひで、眞實のお母さまで無かつた時はお前どうなさる積りかえ」

幾公「眞實でも嘘でもお母さまはお母さまですよ。此幾公だつてお母さまが無いのだもの、烏がカアカア云ふ聲を聞いても懐かしくなるのだから、嘘でも眞實でも構ひませぬ。お母さまと聞いてこれがどうしてチツとして居れませうか」

建國別「ハ、困つた男だなア。これ幾公、お湯を一つ汲んでおくれ」

幾公「お湯を汲んでお母さまに上げるのですか。餘り門口では失禮ぢやありませんか。折角探ねてお出になつたお母さまに、乞食か何ぞのやうに門口でお湯を上げるなんて些と失禮ぢや御座いませぬか」

建國別「分らぬ男だなア。お湯を私に汲んでくれと云ふのだよ」

幾公「一寸お待ちなさいませ。親より先へお湯を頂くと云ふ、そんな不道理な事がありますか。今までは御兩親の行方が分らないものだから、此家の大將で貴方が一番先にお湯なり御飯なりお食り遊ばしたのだが、もう今日となつては長上をさし置いて貴方が先へお茶を飲むと云ふ道理はありますまい。そんな事で三五教の宣傳使が勤まりますか」

建國別「ヤア、長々とお前のお説教で私も感心した。そんならお湯を頂く事だけは暫く見合して置かう」

幾公「遠は三五教の宣傳使建國別命様、物の道理がよく分ります哩。さうだから此幾公も貴方の抱擁力の偉大なるに平素から感服して、門番を甘んじて勤めて居るのです。これから御免蒙りまして、お母さまをお迎ひに參つて來ます……サア

建能姫様、早くお出でなさいませ。お母様が門の外で痺を切らして待つて被居いますよ。」

建能姫「左様ならば吾夫様、一寸お迎へに行つて來ます。幾公、あまり喋らないやうにして下さいや。」

幾公「ハイハイ委細承知致しました。サア参りませう。」

と建能姫をつき出すやうに捉しながら中門のそば迄やつて來た。幾公は中門を無造作にパツと開き、

幾公「お母さま、長らくお待ち致しました。サア何卒お入り下さいませ。これは建能姫と云ふ女房で御座います。何卒實の吾子のやうに可愛がつてやつて下さいませ。建能姫も一寸聞いて居ましたら、建國別様の御兩親が見えたら、生の父母のやうに思うて孝養を盡くすと云うてくれました。何卒氣兼は入らぬから吾子の家へ歸つたと思つて、氣樂にお入り下さいませ。」

建能姫「これこれ幾公、お前それは何を云ふのですか。」

幾公「ハイ、私は御主人の代りに参つたのですから、一寸代辨を致しました。こ

れ建能姫殿、早くお母さまに御挨拶をしやいのう』

建能姫「ホ、ホ、ホ、仕方のない男だなア……もしも旅のお方様、よう此破家をお訪ね下さいました。内密にお伺ひしたい事が御座いますから、何卒お入り下さいませ』

黒姫「ハイ有難う御座います。私も筑紫ヶ嶽の高山峠の頂きで、一寸此方の御主人の事を承はり、些し許り心に當る事が御座いまして、火の國の都に参ります途中、此村の玉公と云ふお方に案内されてお邪魔を致しました。左様なら遠慮なう通らして頂きますせう』

と建能姫に従つて奥に姿をかくす。

幾公「まア何と上流社會の挨拶と云ふものは七面倒臭いものだなア。俺だつたら出遇ひ頭に……ヤアお前は、ヤア、貴方は吾夫建能國別さまのお母さまであつたか、ヤアお前は嫁御であつたか、思はぬ所で遇ひました。お母さま、嫁女などと手取り早く名乗つて了ふのだがなア。まだこれから奥へいつて徳利に詰めた味噌を剔りだすやうな辛氣臭い掛合が初まるのであらう、繁文縟禮を忌み簡明を尊ぶ世

のなか中に、サテモサテモ上流じやうりゆうの家庭かていと云いふものはどこ迄までも舊套きうたうを脱だつし得えないものと見みえる哩わい」

(大正一一・九・一三 舊七・二二 加藤明子録)

第一章 富士咲〔九五二〕

一いっばう方は巍峨ぎがたる高山かうざんを控ひかへ、前まへには清流せいらい奔はる幽谷いうこく流れ、一いっばう方は大原野だいげんやを見晴みはらす絶勝ぜつしようの地ち點てんに建たてられた建日館たけひやかたの別殿べつでんに、主客しゅかく三人鼎坐さんていざしてヒソビソと話はなに耽ふけつて居ゐる。

建國別たけくにわけ「御老體ごらうたいの身みを以もつて、よくもお訪ねたつ下さいました。貴女あなたも矢張り御子息ごしそくの行方ゆくへを探たつねてお廻りまはりになつてゐると云いふ事ことですが、何卒どうぞ其事情そのじじやうをお差支さしつかへなくば簡かん單たんに御明おあかし下くださいませぬか」

黒姫くろひめ「ハイ、妾わたしは三五教あななひけうの黒姫くろひめと申まをす者もので御座ございます。只今ただいまは自轉倒島おのころじまの錦にしきの宮みや

に仕へて居りまする宣傳使で御座いますが、或る事情の爲に此筑紫の島に遙々と
三人の伴を連れ、夫の所在を探さむ爲に参つたもので御座います。さうした處、
高山峠の頂上で五人の若い男が、いろいろと話をして居るのを承はれば、建日の
館の建國別の宣傳使は本年三十五才、さうして兩親の行方が分らず非常に探し
になつてると云ふ事を聞きましたので、妾も何とはなしに心動き、妾の捨てた子
も本年三十五才、よもや其倅ではあるまいかと存じまして、御取込の中をも顧み
ず御邪魔を致しました」
建國別「貴女の夫と申すのは何と云ふお名で御座いますか」
黒姫「ハイ、高山彦と申します。此頃火の國の都に於て、三五教の宣傳をやつて
御座ると云ふ事を承はりました、其處へ探ねに行く道すがらで御座います。さう
した處、五人の男の話によつて、吾子の事を想い出し、よもや貴方が、若い時に
捨てた子ではないかと思ひ、失禮をも顧みずお尋ねした次第です」
建國別「え、何と仰られますか。高山彦様が貴女の御主人とは、合點のゆかぬ事
を承はります。高山彦様は實は私の御師匠様で御座いますが、神素盞鳴尊の御長

女愛子姫様をお娶り遊ばし、今では夫婦睦まじく御神業に奉仕され、神徳四方に輝き渡り、飛つ鳥も落す勢で御座います。如何して又高山彦様が貴女と云ふ正妻があるのに、奥さまを持たれたのでせうか。高山彦様は左様な天則違反的な行爲をなさる様なお方では御座いませぬが、何かの間違では御座いませぬか」

黒姫「自轉倒島の聖地に於て、一寸の事から夫婦喧譁を致しまして、夫れを機會に夫の高山彦は妾を振捨て、筑紫の島とかへ行くと云つて出たきり、今に何の便りも御座いませぬ。此島に驅け着いて人々の噂をきけば、貴方の仰せの通り、若い女房を持つて暮して居られるとの事、到底妾のやうな婆アが参りましても取あつて下さいませぬ。然し折角此處迄参つたのですから、一目なりと會ひ、言ひ度い事も言ひ、先方の出様によつては妾も神の道の宣傳使、あとに何も残らぬ様に離縁をして貰ふ考へで御座います。乍併途中に於て貴方の噂を聞き、若しや吾子ではあるまいかと思ふにつけ、氣の多い夫よりも自分の腹を痛めた倅に出會ひ、老後をお世話になり度いものだと思ひ、失禮を顧みず御伺ひを致しました。然し違ひますれば御許し下さいませ」

建國別たけくにわけ 其御子息そのごしそくには何か目印めじるしでも御座ございますかか」

黒姫くろひめ「はい、赤兒あかごの時ときで確しつり分わかりませぬが、確たしかに背中せなかの眞中まんなかに白しろい痣あざがあり、そ

れが富士ふじの山やまの形かたちに似にて居をりますので、これは大方おほかた富士ふじの山やまの木花このはな咲さく耶姫やひめ様さまの御おう

生まれ替がはりかもしれませぬと存ぞんじまして、富士ふじ咲さくと云いふ名なをつけ……この子供こどもは

一寸ちよつと様子やうすあつて此處ここに捨すてておきますから、何卒どうぞ何れの方かたなりとも慈愛じあい深ふかきお方かた

の手てにかかり育そだてて下くださいます様に……と言いつて少すこしのお金かね子を添そへ名なを書かいて

捨すてました。それつきり倅せがれは如何どうなつた事ことやら、若わかい時ときは倅せがれの事ことも何なにかに紛まぎれて

忘わすれて居ありましたが、斯こう年とし老よるとそこらが淋さびしくなり、捨すてた子こは如何どうなつたか

と明あけても暮くれても忘わすれた事ことは御座ございます。然しかし失禮しつれい乍なら貴方あなたはさういふ印しるしは

御座ございますかか」

建國別たけくにわけ「私わたくしも赤兒あかごの時ときに兩親りやうしんに捨すてられた者もので御座ございますが、自じ分ぶんの背中せなかは自じ分ぶん

で見みませぬから何なんとも存ぞんじませぬ」

建能姫たけのひめ「妾わたしが何いつ時つもお背せなを流ながしますが、本當ほんたうに美うつくしいお身からだ體だで、黒子ほくろ一つ無なく灸やいと

の痕かた一つありませぬ。況まして痣あざ等などは何處どこにも御座ございますかか」

黒姫「あゝさうですか。さうすると矢張り妾の尋ねる富士咲では御座いますまい」

建國別「何か其時の印に、物品でもお添へになつた事はありませぬか」

黒姫「別に何も添へた事は御座いませぬ。守袋に木花咲耶姫の御神號を入れ、富士咲と云ふ子供の名前を入れたばかりで御座います」

建國別「さうすると私は貴女の倅では御座いますまい。私が捨てられた時には、一つの守刀が添へてあり、其守刀に眞珠を以て十の字がハツキリと記して御座いました。その守刀は今に所持して居ります。さうして刀の根尻に「東」といふ字と「高」といふ字が幽かに現はれて居ります。之を證據に兩親を探ねむと、十六才の頃よりそこら中を駆け巡り、フサの國から自轉倒島へ渡り、遂には此筑紫島へ参りまして、高山彦様の弟子となり宣傳使に仕立上げられ、昨年の今日此館の養子となつたもので御座います」

黒姫は手を組み暫く思案に暮れて居る。

建國別「何か貴女にお心當りは御座いますまいかな」

黒姫「ハイ、眞珠で十の字を記した守刀、それに東に高の印、八テ合點のゆかぬ事があるもだなア」

建國別は疊みかけた様に、

「貴方は世界を宣傳してお歩きになつたさうですから、何か心當りは御座いませぬか。假令間違でも構ひませぬから、少しでも掛りがあれば仰有つて下さいませ。今日は如何しても吾兩親に由縁ある人が見える様な氣がしてならなかつたのです。そこへ貴女がお越しと聞き、ヒヨツとしたら吾戀しき母上ではないかと喜んで居ました、實に残念な事で御座います。乍併これも何かの御縁で御座いませう。若い夫婦の氣樂な家庭ですから何卒御遠慮なく何時迄も御逗留して下さいませ。何だか因縁ある方の様な氣がしてなりませぬから……」

黒姫「ハイ、有難う御座います。乍併如何しても一度は高山彦様にお目にかからなくてはなりませんから、又御縁がありますれば御世話になりませう。乍併少しばかり何だか心當りがある様な氣も致しますが、今俄に思ひ出せませぬから、ユツクリと考へ直して御返事を致しませう」

黒姫は或機會に高姫の昔の述懐談を聞いて居た。

その言葉の端に、

……自分も若い時、親の許さぬ男を持ち子を孕んでそれを捨兒にした……といふ様な事を聞いた様に思ふ。高姫さまは今迄十の字の印をつけて御座つたさうだが、三五教へ這入つてから十曜の神紋に變へられた。よもや高姫様の子ではあるまいか、いやいや、うつかりした事を口走つて迷惑を掛けてはならない、高姫さまは今は何處に御座るやら、根から消息は分らない。うつかりした事を云つて、行方分らぬ人を探ね、建國別様が苦勞をなさつて、折角會つた處で今の様に間違つて居る様な事では相濟まぬ、知らぬと云つた方がお互の爲に安全だらう……

と心に打諾き黒姫は言葉を改めて、

黒姫「どうも心懸りが御座いませぬ。乍併貴方様の御物語を聞きました上は十分氣をつけて考へておきませう。若し貴方の御兩親に相違ないと云ふ方に會ひましたら、直様にお知らせ致しませう」

建國別「はい、有難う御座います。何卒宜しく御願致します」

建能姫たけのひめ「何分御存じの通り、不運な夫で御座いますから、何卒黒姫様、御心當りがつきましたらお知らせ下さいませ。御願申上げます」

黒姫は身につまされて返す言葉も無くさし俯向いて居る。さうして心の裡に思ふ様、

「あゝ親子の情と云ふものは何處の國に行つても同じ事だなア。建國別様が兩親に憧憬れて、朝夕心を配り遊ばす様に、吾子も亦此世に生きて居るならば、定めし兩親を慕うて居るであらう。兩親のない子は其處に倒けて居つても、起してくれる者がないと云ふ事だ。あゝ思へば思へば若氣の至りとは云ひ乍ら罪な事をしたものだ。こんな罪の深い身を以て、三五教の宣傳使となり、黄金の玉の御用をしようなどとは實に思ひ違ひであつた。神様から玉を隠されたのも無理はない」と口には出さねど心の中に懺悔の波を漂はして居た。

かかる處へ建彦は數多の幹部を引連れドヤドヤと此場に現はれ來り、丁寧ていねいに兩手をつき、

建彦「大先生御夫婦様、今日は御目出度う御座います。何かからお喜び申して宜し

いやら、吾々初め館の者共は實に拵舞雀躍の態で御座います。今日は日頃お慕ひ遊ばす御母上がお見えになりましたさうで、こんな喜ばしい事は御座いませぬ。

一同に代つてお祝ひ申上げます

と云ひ乍ら、今度は黒姫の方に頭を轉じ、丁寧に再拜し、

建彦「貴女様は大先生の生みの御母上でありましたか。能うまあ御入來下さいました。

私等一同は大先生の御恩顧に日夜預つてる者で御座います。何卒御見捨て

なく末長く可愛がつて下さいませ

建國別「これ建彦、俺の母上が見えたのではない。黒姫様と云ふ三五教の宣傳使

がお見えになつたのだよ

建彦「え、何と仰有います。お隠しになつてはいけませぬ。確にお母上と云ふ事を

一同承知して居ります。もはや隠れもなき館内一同の者の喜びで御座いますか

ら、そんな意地の悪い事を仰有らずに、明かに仰有つて下さいませな

建國別「そんな事を誰に聞きましたか

建彦「はい、門番の幾公が確に相違ない、貴方のお話を聞いたと云つて、駄賃と

らずの郵便配達をやりましたので、やがて此村からもお祝ひに来るでせう」

建國別「これ建彦、そりや大變だ。全く間違ひだつたと云つて取消して下さい。

村人に澤山お祝に來られては迷惑だからなア」

建彦「もはや公然發表を致しまして、續々とお祝に見えますから、此際取消しな

んか出來ませぬ。神様の館から間違つた事を觸れ廻つたと云はれては、それこそ

信用に關はります。そんな事仰せられずに、間違つて居つてもいいから御母さま

にして置いて下さい。何れ誰かのお母さまでせうから……」

建國別「困つた奴だなア。幾公を一寸呼んでくれ」

幾公は大勢の中から屁垂つて居つた頭を又ツと上げ、

幾公「はい、幾は此處に居ります。幾久敷う御目出度う御座います。もし間違ひ

ましたら幾重にも御免し下さいませ。行方も知れぬ吾子の後を探ねて御入來遊ば

したお母さま、何卒大切に上げて下さいませ。何程お隠し遊ばされても、貴

方の御様子から考へて見ますれば、御親子の間柄に相違御座いませぬ」

建國別「ハテ困つた事が出來たわい。……黒姫様、如何致しませうかな」

黒姫「妾の様な者が突然参りましたとお館に御迷惑をかけ、何とも濟まぬ事で御座います……もしも幾公さまとやら、妾は黒姫と申す者で御座います。よくよく調べて見ますれば、妾の息子ではなかつたので、實の處互に顔を見合してガツカリして居た處ですよ。何卒お館の迷惑にならぬやう、直様お取消を願ひます」

幾公「何とまあ親子心を協して堅く締結したものだなア。何と仰有つても以心傳心、教外別傳、不立文字だ。御兩人の歡びの色が相互の顔にホノ見えて居りますぞえ。こんな目出度い時に、そんな惡戯をして吾々をじらすものぢやありません。……コレコレ建彦さま、何と仰有つても御親子だ。唇齒輔車の間柄だ。きつても絶れぬ親子の仲、堪へきれない歡びの色が、先生御夫婦の顔に、現はれて居るぢやありませんか」

建國別「本當に困つた事が出来たわい、なア建能姫、如何致しませうか、黒姫さま、妙な事になつて来たぢやありませんか」

黒姫「本當に間違へば間違ふものですか。これだから世間の噂と云ふものは「あて」にならないと云ふのですよ。……幽霊の正體見たり枯尾花……と云つて、道

聴途説と云ふものは「あて」にはなりません。一犬虚に吠へて萬犬實を傳ふとやら、實に人の噂と云ふものは恐ろしいものです。人の口に戸を閉られないとは此處のことですな」

幾公「何處迄も白々しい、さうじらすものぢやありません。あつさりとして下さいな。建彦さま、早く早くお祝の用意だよ。ここの先生は意地が悪いからな。あんな事云つて吾々をアフンととさす悪い洒落だよ」

斯かる處へ小間使のお種が慌しく走り來り、

お種「御主人様に申し上げます。只今三五教の宣傳使黒姫様のお伴だとか云つて二人の若い男が御入來になりました。如何致しませうか」

建國別「一時も早く此處へ御通し申せ！」

お種は「はい」と答へて引き下る。

(大正一一・九・一三 舊七・二二 北村隆光録)

第一二章 漆山（九五三）

高山峠の中腹に おき去られたる房、芳は

足の立つたを幸ひに 黒姫司の後を追ひ

火の國都へ進まむと 漸く絶頂にいざりつく

壁立つ坂を下りつつ 房公芳公兩人は

足の拍子を取り乍ら 岩の根木の根ふさくみ

房公ウントコドツコイ 芳公さま 氣をつけなされよ危ないぞ

壁を立てたよな坂路だ 石の車がゴロゴロと

人待顔にころげてる 油断は出来ない坂の路

オットドツコイ足迂る アイタ、タツタ躓いた

足の頭がうづき出す 芳公氣をつけシツカリせい

この又きつい坂路を 黒姫さまはドツコイシヨ

どうして降つて往ただるか　ホンに危ない坂路だ

それについても孫公は　どこに【マゴ】マゴしてるだろ

心に掛る旅の空　一天俄にかき曇り

レコード破りの暴風雨　岩石飛ばし木を倒し

げに凄じき光景に　縮み上がつて黒姫が

ドッコイドッコイドッコイシヨ　そこらに轉げていやせぬか

ウントコドッコイガラガラ　それ見よ芳公こけたぢやないか

足の爪先ドッコイシヨ　一足々々氣をつけて

尖つた石をよけ乍ら　キヨクキヨク笑ふ膝坊主

シツカリ灸をすゑ乍ら　此峻坂を下らねば

火の國都にや行かれない　さぞ今頃は黒姫さま

高山彦の襟首を　グツと掴んでドッコイシヨ

ヤイノヤイノの眞最中　愛子の姫の新妻も

さぞや心が揉めるだろ　人の事とは言ひ乍ら

俺は心配ドツコイシヨ
心に掛つて堪らない

高山彦が若やいで
綺麗な女房をドツコイシヨ

貰うて喜ぶ最中へ
お色の黒い皺だらけ

皺苦茶婆さまがやつて来て
私が本當の女房と

シラを切られちやドツコイシヨ
本當に迷惑なさるだろ

さはさり乍ら最前の
三五教の宣傳歌

玉治別のドツコイシヨ
歌うた聲は影もなく

雲を霞と消え失せた
此急坂を如何してか

玉治別の神司
如何して其様にドツコイシヨ

早く降つて行たのだろ
山の天狗がドツコイシヨ

運上取りに来るだらう
アイタタ ドツコイ又轉けた

會ひ度い見たいと黒姫が
戀路の暗に包まれて

鳥も通はぬ山坂を
登りつ下りつドツコイシヨ

夫の後を慕ひ行く
其猛烈な惚れ加減

呆あきれて物ものが云いはれない ドツコイ ドツコイ ドツコイシヨ

オツと向むかふに人ひとの影かげ 彼あいつ奴つは如何どうやら怪あやしいぞ

是これから腹はら帯おびしめ直なほし 天てん狗くの孫まごだと詐いつはつて

彼あいつ奴つが若もしもドツコイシヨ 泥どろ棒ぼうかせぎであつたなら

頭あたまのテツペから怒どなりつけ 一ひとつ荒あら肝ぎも取とつてやる

あゝ惟かむ神な々々ながらかむながら 御み靈たま幸さちはひましまして

高たか山やまた峠うげの急きふ坂はんを 苦くなく事ことなく速すみやかに

下くだらせ玉たまへ純すみ世よ姫ひめ 國くに魂たま神がみの御おん前まへに

慎つしみ敬つやひ願ねぎまつる オツトドツコイ又また迂すべる

何なんで是これ程ほど石いしコロが 澤たく山さんころげて居あるのだる

文ぶん明めい開かい花くわの今こん日にちは どのどこ迄まで道みちをあけ

如何いかなる嶮けしき山やま路みちも 三さん寸ずん四し寸すんの勾こう配ばいで

自じ動どう車しゃ人じん車しゃの通とほる様やうに 開かい鑿さくされてあるものを

コリヤ又またエライ野やばん蠻こく アイタタ アイタタ躓つまづいた

草鞋わらぢの先さきが切きれよつた
何程なにほど痛いたい石路いしみちも

跣足はだしで行ゆかねばならないか
困こまつた事ことが出來できて來きた

こんな事ことだと知しつたなら
草鞋わらぢの用意よういをドッコイシヨ

ドッコイドッコイドッコイシヨ
して來きて居をつたらよかつたに

黒姫くろひめさまはドッコイシヨ
年寄としより丈だけに氣きが付ついて

無花果いちじゆくまで迄までも用意よういして
吾々われわれ二人ふたりの饑渴きかつをば

ヤツと救すくうて下くださつた
黒姫くろひめさまが負おうてゐる

草鞋わらぢが一足いっそく貸かして欲ほしい
さうぢやと云いつて黒姫くろひめの

所在ありかはどこだか分わからない
ホこんに困こまつたドッコイシヨ

破目はめになつたぢやないかいな
黒姫くろひめさまがドッコイシヨ

いつも乍ながらに言いうただろ
お前まへは若わかい者ものだから

向意氣むこいき計ばかりが強つよすぎて
前まへと後うしろに氣きがつかぬ

旅たびをする時ときや如何どうしても
草鞋わらぢの用意よういが第一だいいちだ

馬鹿ばか口ぐち叩たたく其そのひまに
草鞋わらぢを作つくつておくがよい

途中で困る事あると

口角泡を飛ばしつつ

教へてくれた言の葉が

今日のあたり現はれて

後悔すれ共仕様がな

あゝ惟神々々

神の御靈の幸はひて

房公の足は少時の間

獅子狼の足となり

跣足で行かして下さんせ

そうして此坂下つたら

又もや元の人の足

造り直して下されや

房公御願申します

ウントコドツコイ ドツコイシヨ

緩勾配の坂道に

ヒソヒソささやく人の影

彼奴はテツキリ山賊だ

いよいよ是から大天狗

孫だと名乗つておどさうか

一筋縄ではゆくまいぞ

ウントコドツコイ ドツコイシヨ

と唄ひ乍ら下つて来る。

緩勾配の坂路に腰うちかけて雑談に耽つてゐる四人の男、

二人の姿を見て、

甲「オイ旅の衆、一寸一服しなさい。随分最前の暴風雨で、谷路が荒れて、エライ石コ口路になつたので、随分草臥れただろ。ヤアお前は跣足だなア、其奴ア堪るまい、如何だ、足に合ふか知らぬが、俺の草鞋を一足進ぜるから、之を履きなさい。こんな石の尖つた急坂を、麓まで下る迄にや、コンパスが破損して了ふからなア」

房公「ハイ有難う御座います。ヨウ御親切に仰有つて下さいました。あゝそんなら幾ら出しましたら頂けますかなア」

甲「俺は草鞋賣ではないぞ、餘り輕蔑してくれない。之でも武野村の虎公と云つて、チツとは名を賣つた男だ。お前の難儀を見るにつけ、氣の毒なと思つたから、與らうと云ふのだ」

房公「それでも見ず知らずの方に、無料で頂きましては、如何も心が濟みませぬ。どうぞ御遠慮なく代價を御取り下さいませ」

虎公「他人らしい水臭い事を言ふな。俺は三五教の信者だが、神さまの教には天が下には他人と云ふ事なきものぞ、誰も彼も、生きとし生ける者は、人間はおろ

か、禽獸蟲魚草木に至る迄、尊き神さまの御子だ、さうして宇宙一切は残らず兄弟姉妹だと仰有つたぞ。それだから俺はお前を本當の兄弟だと思ふてゐるのだから、遠慮せず履いてくれ」

房公「ハイ有難う御座います。神様の教は偉いものだなア。こんな野蠻國迄感化力が延びてると思へば、宣傳使も馬鹿にはならぬワイ。黒姫さまだつて、俺達は澤山相に何につけ、かにつけ、からかつて来たが、本當に勿體ない事をしたものだ。一時も早く黒姫さまにお目にかかつてお詫をしようぢやないか、なア芳公」

芳公は虎公に向ひ丁寧に會釋をし乍ら、

「見ず知らずの吾々に對し、御親切に恵んで下さいまして有難う御座います。此御恩は決して忘れませぬ。此房公も草鞋を切つて困つて居つた所、あなたの御恵に預り、實に生き返つたやうな、私迄が思ひを致します」

と虎公の親切にほだされて、涙ぐみつつ禮を云ふ。

虎公「エ、そんな涙つぽい事を言うてくれな、兄弟同志ぢやないか。俺が此草鞋をはいて行けと云つたら、お前の方から……ヨシ来た、はいてやる、貴様も中々

氣の利いた奴だ、それでこそ俺の兄弟分だ、今日から俺がお伴をさしてやるから
跟いて来い。火の國へ往つたら酒の一杯も奢つてやる……と斯う元氣よう云つて
くれ。男のくせにメソメソと、有難いの勿體ないのと言うてくれると小癩に障つ
て仕方がないワ」

房公「オイ虎の野郎、貴様は猛獸の様な名だが、割とは氣の弱い奴だ。俺が天狗
の孫だと思つて、お追従に一足よりない草鞋を放り出しよつたのだなア。貴様の
草鞋も大方破れてるぢやないか。俺が此草鞋をはいてやつたら貴様如何する積り

だ。譯の分らぬ馬鹿者だなア」

虎公「オツトお出でたな、天狗の孫どん……草鞋の一足位無くなつたつて、足の
片つ方位千切れたつて、こたへるやうな哥兄さまだと思つて居るのか。天狗の孫
でさへ草鞋が切れて吠面かはきやがった位だのに、此虎公は眞跣足で此坂を下る
のだから、天狗の孫よりも餘程偉いのだよ」
房公「アツハ、ハ、ハ、此奴ア面白い、是から俺の家來にしてやらう。チツと其代り
に辛いぞ」

虎公「何が辛い、俺達は神様の生宮だ。此世に辛い事も、怖い事も知らぬと云ふ
金剛不壞の如意寶珠見た様な肉體だからなア」

芳公「オイ虎、貴様に一つ問ひたい事があるが白状するか如何だ」

虎公「白状せいとは何の事だ。丸で俺を科人扱にして居やがるのだなア」

芳公「きまつた事よ、世界の人間は何奴も此奴も祖神さまの目から見れば科人計
りだ。碌な奴ア一匹だつて居るものぢやない。皆四つ足の容器計りぢやからなア。
貴様のやうに折角人間に生れ乍ら、四つ足の様な名をつけやがつてトラ何の事だ
い」

虎公「アハ、ハ、馬鹿にしやがるワイ。ヨシ氣に入つた。貴様こそ俺の特別の兄
弟分だ。大方貴様は婆の後を追ひかけて來たウルサイ代物だらう」

芳公「さうだ、其婆の所在を知つてゐるなら、包まずかくさず、一々芳公の前で
白状致せと云ふのだ。知らぬの何のと、薄情な事吐すと、鬼の蕨が貴様の横つ面
へ御見舞申すぞ」

虎公「アハ、ハ、一寸此奴、味をやりよるワイ。貴様一體どこの馬の骨だ」

芳公「俺かい、俺は自轉倒島の芳公と云つたら誰も知る者は知る、知らぬ者は一寸も知らぬ、天下無雙の豪傑だよ。摩利支天さまにさへ相撲とつて負けたことのない哥兄さまだからなア」

虎公「貴様、摩利支天とどこで相撲とつたのだ。何程法螺吹いても、其奴ア通用しないぞ、摩利支天に負けぬと云ふ奴が三千世界にあるものか。そんなウソいふと、貴様、死んだら目がつぶれ、物も言へぬやうになり、體が動けなくなつて了ふぞ」

芳公「俺は摩利支天の木像と相撲とつたのだ。一つ突いてやつたら、一遍に仰向けにこけるのだけれど、腕が折れたり指が取れたりすると面倒だからなア。それで恠へてやつたのだ」

虎公「アハ、大方そんな事だと思ふて居つたよ。併し芳公、貴様も小相撲のひとつも取れさうな體をしてゐるが、相撲とつたことがあるのか」

芳公「あらいでかい、相撲道の名人だ。自轉倒島の横綱芳野川と云つたら俺のとだ。貴様の耳は餘程遅手耳だなア」

房公「オイ虎公、此芳公はなア、随分口は達者だが、相撲にかけたら、随分惨めなものだよ。芳野川なんて、ソラ隣に住んで居つた相撲取のことだ。此奴ア鍋蓋と云ふ力士だ。取つたが最後、すぐに仰向くといふ代物だからなア」

虎公「オウ一つ鍋蓋、此虎ケ嶽と一勝負、此處でやらうぢやないか」

芳公「オウ面白からう。やらぬ事はないが、斯んな石原では面白くねえ、少し平地へ行つて、更めて取る事にしようかい。俺は今日から漆山と改名するから、俺に觸つたらすぐに負けるから、其覺悟で居つたがよいワイ」

虎公「うるさい漆山だなア」

房公「オイ虎ケ嶽、こんな漆山と相撲なんか取るものぢやない。貴様の沽券が下がるよ。此奴ア、相撲取つて、ついぞ勝つたことのない奴だからなア」

芳公「喧しう言ふない。俺ん所のお瀧が何時もなア……角力にや負けても怪我さへなけりや、晩にや私が負けて上げよ……と吐しやがるのだから、何と云つても色男だ。貴様なぞの燕雀の容喙すべき所ぢやない。弱い奴ア弱い奴らしくスツ込んでをれ」

房公ふさこう「オイ鍋蓋なべがた、貴様きさまは聖地せいちで宮相撲みやずもうのあつた時とき如何どうだつた。鬼ヶ嶽おにがだけと貴様きさまと取と

つた時とき、たしか二番勝負にばんしょうぶだつたなア」

虎公とらこう「ソラ面白いおもしろ、其時そのときの勝負しょうぶを聞きかしてくれ、どうだつた、キツと負まけたたら

う」

房公ふさこう「其時そのときは此鍋蓋奴このなべがため……」

と言いはうとする。あわてて口くちに手てを當あて、

芳公よしこう「コリヤ天機てんき洩もらす可べからずだ。言いはいでも分わかつてるワイ。互角ごかくの勝負しょうぶだつた

よ」

虎公とらこう「さうすると一番宛勝いちばんづつつたのだな」

芳公よしこう「初はじめの勝負しょうぶには都合つがふが悪わるうて、此鍋蓋このなべがたが鬼ヶ嶽おにがだけに負まけたのだ。次つきの勝負しょうぶには、

向むかうが勝かつたのだ。つまり先さきに俺おれが負まけて、此度こんどは先方むかふが勝かつたのだよ」

虎公とらこう「アハ、大方おほかたそんな事ことだと思おもつて居をつた」

房公ふさこう「餘あまり相撲すもうの話はなしで、黒姫くろひめの所在ありかを白状はくじやうさすのを忘わすれて居をつた。サア切り切きり

チヤツと申まをしあげぬか」

虎公とらこう「喧やかまし言いふない。俺おれの行ゆく所ところへ従ついて來きさへすれば分わかるのだ。何事なにごとも三五教あななひけうは不言實行ふげんじつかうだからなア。詞多ことばおほければ品少しなすくなし……と云いふことがある、黙だまつて従ついて來こい」

と云いひ乍ながら、虎公外三人とらこうほかさんにんは二人ふたりの先さきに立たち、急坂きふはんを下くだり、稍緩勾配ややくわんこうばいの曲まがり道みちになつた所ところより坂路さかみちを左ひだりに越こえ、小ちひさい山やまの尾をを二つ三つ廻まはつて建日たけひの館やかたへ指さして進すすみ行ゆくのであつた。

(大正一一・九・一三 舊七・二二 松村眞澄録)

第一三章 行進歌かうしんか〔九五四〕

房公ふさこう、芳公よしこうの二人ふたりは虎公外三人とらこうほかさんにんを伴ともなひ、建日たけひの館やかたをさして、道々みちみち無駄むだ口ぐちを叩たたきながら進すすみ行ゆく。

房公ふさこうは聲こゑを張はり上あげて謠うたひ出だしたり。

三あななひけう五せんでんし教ののせん宣でん傳し使ま 眞ま黒つ々くろくろのくろ黒ろ姫ひめが

夫をのあり所か在たをつ探ねねむむと 孫ま、房ふ、芳よのさん三にん人を

自お轉の倒ろ島じまからつ連れてき來て 建た日けのわ別けのき舊せ蹟せ地ち

岩い窟はのすこし手て前まにて 孫ま公ごさまがつ躓まいた

房ふ、芳よ二ふ人たりはぎ仰よう天てんし 水みよき氣つ付けとう狼ろ狽たへて

介か抱いするにもかかはらず 黒く姫ろさまはな何に故ゆか

ニわヤらリわニらリと笑わつてる 冷れ酷い非ひ道だうのお鬼に婆はと

心このう中ちにて憤ふん慨がいし オおツつトつコい危あないぞ

そこには尖とつた石いがある どいつも此こ奴いもき氣を付けよ

孫ま公ごのやうに躓ついて 怪け我がをい致たしちやた堪まらない

オおツつトつコい脇わ道みちへ 俺おのう歌た奴めがだ脱だ線せんし

分わらぬやうになつて來きた 黒く姫ろさまはな何に故ゆか

惡あく垂たれぐち 痛いさに苦くるしむ孫ま公ごを

見み向むきもやらずす捨すてて往ゆく 吾わ等れ二ふ人たりはぜ是ぜ非ひもなく

黒姫さまに隨うて 岩窟の前に往て見れば
闇の帳は忽ちに 引き下されて目も鼻も
口の所在も分らない 茲に一行三人は
天津祝詞を奏上し 憩ふ折しも岩窟の
中より響くドウラ聲 八テ何者の出現と
心を配る折もあれ 岩窟の中より黒姫を
悪垂婆アと呶鳴り出す 黒姫さまは腹をたて
何だかんだと争ひつ 腰折だらけの歌をよみ
やつとその場のごみ濁し 命からがらドツコイシヨ
夜明けを待つて逃げ出せば 胸つき坂の右左
草ぼうぼうと生え茂る 細谷道をハアハアと
息をはづませ來る中に 喉をかわかせ兩人が
苦しむ折しも傍に 滾々として湧き出づる
甘き清水に喉濕し 黒姫様にいろいと

小言八百竝べられ 湧いた水より劫わかし

横にごろりと長くなる どうしたものが兩人の

尻は大地に吸ひついて ビクともしない苦しさに

黒姫さまに誤解され 放ときぼりを喰はされた

吾等二人の腑甲斐なさ 黒姫さまは吾々を

後に見捨てて登り行く 二人は後を見送つて

悪垂婆アの黒姫と 咳く折しも忽ちに

レコード破りの暴風雨 巨石を飛ばし木を倒し

礫のやうな雨が降る こりや堪らぬと一心に

天地の神を祈る折 忽ち聞ゆる宣傳歌

玉治別の玉の聲 聞ゆる間もなく荒れ狂ふ

風雨は忽ち鎮静し 平和の雲は中天に

搖ぎ初めたる嬉しさよ それより吾等は黒姫の

後を追ひかけ来る折 高山峠の下り坂

岩石崎嶇たる峻坂に
ふと出遇した四人連れ

此奴はテツキリ泥棒と
早合點の兩人は

天狗の孫と偽つて
威してやらむと思ふ間

思ひもかけぬ虎公が
草鞋をやらうと吐す故

いやいやながら受け取つて
お氣に召さねどツコイシヨ

此處迄はいて來てやつた
芳公の瘦相撲漆山

鬼ヶ嶽との相撲話
面白をかしく喋り立て

茲に六人は兄弟の
氣取りとなつて火の國の

建日の館に出でて往く
嘸今頃は黒姫は

建國別に面會し
お前は吾子か母さまか

逢ひたかつた見たかつた
尊き神の引き合せ

こんな嬉しい事あるか
何は兔もあれ第一に

天津祝詞を奏上し
感謝祈願を申上げ

館の上下打揃ひ
ドツサリ祝ひを致さうと

嗚今頃は神館 上を下へと騒がしく

喜び勇む事だらう あゝ惟神々々

御靈幸はひましまして 黒姫さまも今迄の

我情我慢を改めて 誠の神の司とし

三五教の御光を 照らす眞人となさしめよ

と謡ひ乍ら、房公は虎公の後に隨いて往く。虎公は此歌に引出されてか又もや謡ひ出したり。

武野の村の玉公が どうしたものが此頃は

家の秘藏の水晶玉 黒點出來たと氣を焦ち

こいつア全く黒姫と 云ふ曲神が此島に

やつてうせたに違ひない 今から急ぎ山頂に

登つて待てば黒姫が 登つて來るに違ひない

オイ虎公よ俺のため 嶮しい坂ではあるけれど

どうぞ送つて呉れないか お前を男と見込んでの

俺の頼みぢやと吐す故 忙し中を繰合し

乾兒の奴を引き連れて 高山峠の絶頂で

三五教の黒姫が 登り来るをドッコイシヨ

今や遅しと待つ間に 玉公さまの發起にて

白と黒との石集め 勝負を初むる折柄に

待つ間程なく黒姫が 草鞋脚絆に身を固め

金剛杖に蓑笠の 軽き扮装スウスウと

息をはづまし登り来る 此奴アてつきり黒姫に

相違あるまいドッコイシヨ 皆々氣をつけ危ないぞ

一つ辻れば谷底ぢや 黒姫さまの物語り

耳を澄まして聞く中に 火の國都にかくれなき

高山彦の女房と 聞いて五人は吃驚し

合點がてんの往ゆかぬ事ことだなア
うつかり手て出しは出で来きないと

初はじめの勢いきほひどこへやら
勇いさみきつたる虎とらこ公こうも

忽たちまち猫ねこと早はや變がり
こらまア何なんと云いふ事ことだ

合が點てんのゆかぬ節ふしがある
それにモ一ひとつ不ふ思し議ぎなは

黒くろ姫ひめさまの若わかい時とき
捨すて子こをしたのが武たけ野の村むら

神かみの館やかたのドツコイシヨ
建たけ國くに別にではあるまいか

一ひとつ訪たつねて見みようかと
心こころありげに云いふ故ゆゑに

玉たま公こうさまは吞のみ込こんで
案あな内ないの役やくと早はや替がり

惡あく魔まと思おもうた黒くろ姫ひめの
唯ゆ一いつの力ちからとなり果はてて

神かみの館やかたへ導みちびいた
黒くろ姫ひめさまが云いふ事ことにや

房ふさ、芳よし二ふたり人の伴ともの奴やつ
後あとから來くるに違ちがひない

虎とら公こうさまよお前まへ達たち
此こ處こに待まち受うけ兩りやう人にんを

否いや應おう云いはさず捕とらまへて
建たけ日ひの館やかたへ連つれて來こい

キツと頼たのみ置おくぞよと
黒くろい顔かほして云いふた故ゆゑ

ウンと呑み込み男達

虎公さまもドッコイシヨ

一度人に頼まれて

後へは引けぬ此氣質

房公、芳公兩人の

力の弱い蛆蟲を

今か今かと待つ間に

房公さまが眞跣足

血潮を足から流しつつ

天狗の孫だと空威張り

坂道下るをかしさよ

そこで虎公が聲をかけ

尋ねて見れば黒姫の

お後を慕うて来た二人

社會奉仕の積りにて

草鞋一足放り出して

是を穿けよと云つたらば

二人の奴は喜んで

女子の腐つた奴のよに

べそべそ涙を流しつつ

ハイハイ頂戴致します

どこの誰人か知らねども

見知らぬ他人の此私

價も無しに頂くは

私の心が濟みませぬ

價を取つて下されと

遠律義の申分

こいつア矢張麻柱の

道みちを奉ほうずる信徒まめひとと 思おもうた故ゆゑに虎公とらこうは

元氣げんきをつけてやつたれば 忽たちまち變かはる空威張からいばり

肩かた肱ひぢ怒いからす面白おもしろさ 芳公よしこうさまが圖づに乗のつて

俺おれでも元もとは芳野川よしのがは 自轉倒島おのころじまにて名なをあげた

負まけた事ことなき相撲取すもうとり 鬼ヶ嶽おにがたけとドッコイシヨ

二番勝負にばんしょうぶをした時ときに 先さきには俺おれが負まけたれど

後あとは先方むこうが勝かちよつた 何なんの彼かんのと負惜まけをしみ

ドッコイドッコイドッコイシヨ 減へらず口くちをば叩たたきつつ

終しまひの果はてにや房公ふさこうに 薩張實狀さつぱりじつじやうあばかれて

芳野川よしのがはとはドッコイシヨ 隣となりに住すんだ相撲取すもうとり

禪持ぜんぢのドッコイシヨ 握にぎり飯めしをば喰くらふやつ

取とつたら仰あふむく鍋蓋なべぶたと 名乗なりを上あげた瘦相撲やせすもう

觸さはればまけるウントコシヨ 漆山うるしやまだと打ち名なのり

其場そのばのごみを濁にごしつつ 此處ここ迄までやつと従ついて來きた

芳公さまの罪のなさ

あゝ惟神々々

御靈幸倍坐しまして

建國別の宣傳使

黒姫さまの生みの子で

どうぞあつて欲しいもの

ドッコイドッコイさうなれば 黒姫さまも落ち付いて

爺の後を探ねまい 吾等が信ずる宣傳使

高山彦の御前で 何だかんだと癡話喧譁

ごてごて云はれちや堪らない 俺ばかりか愛子姫

其他數多の人々も 定めし迷惑するだらう

朝日は照るとも曇るとも 月は盈つとも虧くるとも

假令大地は沈むとも 黒姫さまが三五の

眞の道に猛進し 戀の妄執相晴らし

建國別の館にて 母子夫婦の睦み合ひ

いやとこしへに神の道 四方に照らして呉れるやう

純世の姫の御前に 武野の村の男達

虎公さまが眞心を こめてぞ祈り奉る
嗚呼惟神々々 御靈幸倍ましませよ

と歌ひ終るや、芳公は又虎公の歌に引かされて坂道を歩みながら駄句り初めたり。

あゝ惟神々々 神が表に現はれて

善と悪とを立て別ける 此世を造りし神直日

心も廣き大直日 直日のみたま幸はひて

黒姫さまが探ね來る 高山彦との關係を

事なく納めたまへかし ウントコドツコイ危ないぞ

どいつも此奴も氣をつけよ そこには深い谷がある

黒姫さまが又しても 高山さまに口答へ

金切聲を絞り上げ 嗚鳴り散らされドツコイシヨ

荒れ狂はれては堪らない 第一神の名を汚し

あななひけつ 三五教の面汚し
高山彦の面目は

ちや 茶ツ茶無茶苦になるだらう
俺はそいつが氣にかかる

なん 何とかドツコイ穩かに
納めて見たいと朝夕に

かみ 神に念じて居る哩の
さはさりながら此度は

つがふ 都合のよい事出来てきた
三十五年の其昔

あかえりすがた 赤襟姿の黒姫が
粹な男とドツコイシヨ

ひとめ 人目を忍んでこしらへた
ドツコイ ドツコイ ドツコイシヨ

あかこ 赤子が無残に四つ辻に
捨てた思案の後戻り

やうやう 此頃氣がついて
血道をあげてほれきつた

たかやま 高山さまよりドツコイシヨ
吾子の方が可愛なり

ひ 火の國行を後にして
建日の館に往たさうな

これ 是も尊き神様の
仁慈無限の引き合せ

ほんに ほんに目出度いお目出度い
さはさり乍らひよつとして

たけくにわけ 建國別の宣傳使
黒姫さまの子でなうて

ドッコイシヨウドッコイシヨウ
人の捨子であつた時ひと すてこ ととき

どうして心が納まるか
それ計りが氣にかかるいじゆん をまろ か ばつか き

ウントコドッコイドッコイシヨ
國魂神の純世姫くにたまがみ すみよひめ

金勝要の大神の
御守護を願ひ奉るきんかつかね おほかみ ごしゆご ねが たてまつ

あゝ惟神々々
御靈幸倍ましませよかむながらかむながら みたま さちはへ

と謠ひながら建日の館をさして進み行く。
うた たけひ やかた すす ゆ

(大正一・九・一三 舊七・二二 加藤明子録)

第一四章 落膽〔九五五〕

此處は建國別の神館の表門前、玉公は門番の幾公に臨時代理を頼まれ、ツクネ
ンとして門扉を閉ぢ、借つて來た狎の様におとなしく、門番部屋の縁側に腰をか
ここ たけくにわけ かむやかた おもてもんまへ たまこう もんばん いくこう りんじだいり たの えんがは こし

け、兩手を膝の上にチンと置いて、コクリコクリと居眠つて居る。

門の外から虎公の聲、

虎公「頼まう頼まう」

此聲に玉公は目を醒まし、

玉公「誰だい、大きな聲で吠鳴る奴ア。此處は建國別様の神館の表門だぞ。チツ

と謹慎の意を表せぬかい。何處の誰だか知らぬが戸をドンドンと叩きやがつて、

ド拍子の抜けた聲を出しやがるのだ」

と吠鳴り返した。

虎公「オイ、幾の門番、誰でも無い、虎公だ。摩利支天でも突き倒すと云ふ漆山

と云ふ大相撲取を連れて來たのだ。愚圖々々吐して門を開けぬと云ふと、漆山の

拳骨で叩き割つて這入つてやらうか」

玉公「其聲は侠客の虎公だないか。チツと靜にせぬかい。漆山なんて、そんな嫌

らしい名の相撲取を何の爲めに連れて來たのだ。此お館は少し大變なお目出度い

事が起つて、ヤツサモツサの最中だ。暫く其處邊に控へて居れ。御主人の方から

お許しが下つたら貴様の方が開けなくても此方から開けてやらア

虎公「さう言ふ聲は玉公ぢや無いか」

玉公「俺は幾公の門番に頼まれたので、臨時門番を勤めて居るのだ。此門を開閉

するのは玉公の権限にあるのだから、まア暫く其處に立つて待つて居らうよ」

虎公「黒姫さまのお伴の奴を、たつた二匹連れて來たのだから、待つと云ふ譯に

はゆかぬわい」

房公「オイ虎公、二匹とはチツとひどいぢやないか。あまり馬鹿にすない」

虎公「何馬鹿にするものか。男の中の男一匹と云ふ奴が、兩人來て居るぢやない

か。それだから二匹と云つたのだよ」

房公「アハ、ハ、ハ、うまい事宣り直しやがつたな。ヨシこれから俺達を一匹二匹と

呼んでくれ。本當に光榮だ。由縁を聞けば何となく有難いわ。然し乍ら執拗言ふ

と腹が立つと云ふ事があらう。あまり澤山一匹二匹と言つてくれなよ。時所位に

應じて云うてくれよ」

玉公は門内より此話を聞きはつり、

玉公「オイ虎公、虎が一匹来て居る事は分つて居るが、其外に猫でも連れて来たのか」

虎公「八釜しう云ふない。早く開けぬか」

玉公「エー、仕方ない奴だなア。そんならドツと張り込んで、今日丈は治外法權だ。開けてやらう」

と言ひ乍らサツと白木の門を左右に開いた。

玉公「ヤア虎公ばかりかと思へば、猫も牛も鼠も来て居るのだな。そして其處に居る奴は一體何だい、怪體な面をした奴だなア。アハ、ハ、ハ、丁度六匹だなア」

虎公「さうだ六匹だ。早く奥へ案内致せ。虎轉別様の御入りだ」

玉公「何を吐しやがるのだい。虎、轉と別が分らぬわい。大方黼貂別位のものだらう。アハ、ハ、ハ、」

と、腹を抱へ腰を揺つて見せる。

虎公「そのスタイルは何だ。みつともないぞ」

塀を隔てた次の屋敷所謂上館の廣庭には、數多の老若男女のワイワイと悦び騒

ぎ踊り狂ふ聲が聞えて来る。

虎公「オイ玉公、あの聲は一體何だ」

玉公「あれかい、ありや貴様、俺が送つて来た黒姫さまと親子の對面が出来たの

で、あゝワイワイ騒いで居るのだ。貴様らは皆の奴が酒を喰つて踊つて居るのを

神妙に聞いて居るのだよ。萬一彼奴等が喧嘩でもオツ初めよつたら、喧嘩の仲裁

をするのだ。此頃はあまり喧嘩が無いので、侠客として張合が脱けただらう。屹

度喧嘩があつた調子では突發するだらうから、貴様の賣出す時機が来たのだ」

虎公「そいつは面白い。早く喧嘩がオツ初まらぬかいなア」

房公「モシモシ門番さま、本當に親子の對面が出来たのですか」

玉公「サア、シツカリした事は分らないが、あの嬉し相な聲から聞くと屹度目出

度いに違ひない。テツキり最前来た黒姫と云ふ婆さまは、此處の大將のお母さま

らしいわい」

房公「ヤアそりや有難い。これで俺も肩の荷が下りたやうだ。ナア芳公、嬉しい

ぢやないか」

芳公「俺は何だか知らぬが、あんまり嬉しうないわ。も一つ何處やらに物足らぬ心持がしてならない。そう御注文通りうまく行つたか知らぬがなア」

房公「あゝそれでもあの通り嬉しさうに大勢が騒いで居るぢやないか」

芳公「さあ、それもさうだなア」

虎公「今日は建國別様が此お館へ御養子にお入來遊ばした満一周年のお祝だから、それで皆の奴が祝酒に喰ひ酔うて騒いで居るのだらうよ。そこへ黒姫さまが其大將の母親だつたら、それこそ大したものだ、地異天變の大騒動だ。否大祝だ。ナア玉公、お前は如何思ふか」

虎公は隔ての塀の小さき武者窓から背伸びをし乍ら、上館の庭前の酒宴の席を一寸眺め、

虎公「エー何奴も此奴も行儀の悪い奴ばかりだ。眞裸になつて酒に酔うて無禮講を遺憾なくやつて居やがる。俺も俄に何だか酒を飲みたくなつて來た。此處の奴は氣の利かぬ奴ばかりだな。虎公が來て御座るのに徳利一つ下げて來る奴は無いと見えるわい。ウン、此處に無花果が澤山になつて居る。之を【むし】つて

宴會えんくわいの席せきに放ほかしてやらう。随ずい分ぶん面おも白しろうなるだらう〇

と獨言ひとりごと云いひ乍ながら、三さん四し十じふ許ばかり「むし」つては高たか堀へい越ごしに投なげつける。數多あまたの泥よ醉ひど

者は垣かきの外そとから、虎とらこ公こうが斯こんな惡いたづ戯らをして居ゐるとは夢ゆめにも知しらずに、

甲かふ「ヤイコラ、馬ば鹿かにするない。俺おれの頭あたまに無いちじ花ゆく果くをカツつけやがったのは貴き様さまだ

らう〇

乙おつ「何を吐ぬかしやがるのだ。最前さいぜんから俺おれが黙だまつて居をれば俺おれの腦なうてん天てんへブツつけやがつ

て俺おれがあてたなんて、能ようそんな事ことが言いへたものだ。何なんと言いつても貴き様さまは俺おれに喧けん

譁くわを買かふ積つもりだなア。よし斯こう見みえても俺おれは虎とらこ公こうの一いちの乾こ兒ぶんだぞ。熊くまこ公こうの腕うでを見み

せてやらうか〇

と言いひ乍ながら、徳利とくりを振ふり上あげて縦横無盡じゅうわうむじんに振ふり廻まはす其その權幕けんまくに、一いち同どうの老若男女らうにやくなんによは

「キヤツキヤツ」と悲鳴ひめいをあげて前後左右ぜんごさいうに逃にげ廻まはる。熊くまこ公こうは酒さけの勢いきほひに乗じりて手てあ

當たり次第しだい、鉢はちを投なげる、徳利とくりを振ふり廻まはす、ガチヤンガチヤン ドタンバタンの亂らん

癡氣ちき騷さわぎが堀へいの外そと迄まで手てにとる如ごとく聞きえて來きた。虎とらこ公こうは自じ分ぶんの乾こ兒ぶんの熊くまこ公こうが亂暴らんぼうと

見みてとり、矢庭やにはに高たか堀へいに兩手りやうてを掛かけ、モンドリ打うつて園内えんないに飛とび込こみ、

虎公「こりやこりや、待て、熊公の奴、何亂暴をするか」

熊公はへべレケに酔うて、目も碌に見えなくなつて居た。

熊公「ナ、何だ。俺を誰だと思つて居るのだ。武野の村に隠れなき大俠客、

虎公さまを親分に持つ熊公だぞ。愚圖々々吐すと何方も此奴も生首引き抜いてや

らうかい。へん、馬鹿野郎奴、何を熊さまのする事に横鎗を入れやがるのだ。糞

面白くも無えや。ゲ、ゲ、ゲ、ガラガラガラ　ウワツプツプツ

虎公は矢庭に熊公の横面を、首も飛べよとばかり平手でピシャツと殴りつけた。

熊公は不意を喰つてヒヨロヒヨロと五歩六歩後に下つてドスンと仰向けに倒れて

了つた。

虎公「オイ熊、しつかりせぬかい。斯んな目出度い席上で何亂暴するのだい」

熊公「こりやアこりやア親方で御座いましたか、誠に濟みませぬ。こない暴れる

のぢや無かつたけれど、八公の奴、失禮な、熊さまの頭へ無花果をカツつけやが

つたものだから……俺の頭は虎公の息がかつた頭だ。貴様のやうな奴に殴られ

て黙つて居つては親分の面汚しだから、腹が立つて立つて腸が二、煮え繰返

つて、思はず知らず酩酊して斯んな亂暴をやりました。なア親方、右の様な次第でげえすから何卒爛酒に見直して下さい。ゲープーあゝえらいえらいひどい事、酒に惡酔ひして了つた。何しろ安價い酒を飲ましやがるものだから、薩張腸も何も臺無しにして了つた」

虎公「皆さま、何卒元のお席にお着き下さいませ。熊公の奴、酒に喰ひ酔ひ亂暴致しまして誠に濟みませぬ。私が代つてお詫致します」

此聲に一同はヤツと安心したものの如く元の座に着いた。虎公は熊公を引抱へ、上館の表門から迂回して門口へ連れて來た。此時婢女のお種と云ふ女、門口の騒がしさに不審を起し、慌しく襷の儘馳來り、

お種「まアまアこれは虎公さまで御座いますか。能う來て下さいました。何卒まア、お這入り下さいまし」

虎公「いえいえ、御主人のお許しある迄は此處に控へて居りませう。然し此處に黒姫さまと言ふ方が見えて居る筈だ。其黒姫さまのお伴の芳公、房公と云ふ二人の者が門口に待つて居ると云ふ事を、一寸奥へ知らして下さい」

お種「武野村の親分虎公さま、確に申し上げます。何卒待つて居て下さい」
と足輕に中門の中へ姿を隠して仕舞つた。

暫くすると黒姫は建國別、建能姫、建彦、幾公に送られ、中門をサツと開いて
此場に徐々とやつて來た。

虎公「ヤアこれはこれは建國別様、建能姫様、黒姫様を「いかい」お世話で御座
いましたらう。如何で御座いましたな、御因縁の解決がつかしましたか」

建國別「ア、貴方は虎公の親分さま、能う來て下さいました。さア何卒奥へお這
入り下さいませ。此處は門の前、今日は幸ひ私が此處に參つた一周年の祝、何卒
皆さま、何もありませんが酒なつと飲つて下さいませ」

虎公「ハイ有難う御座います。乍併此處に黒姫様のお伴をして參つた房、芳の兩
人が見えて居ります。そして黒姫様は貴方の御縁類の方ではありませんでしたか
な」

建國別「はい、全く違ひました」
虎公「それはそれは残念な事で御座います。オイ房公、芳公、薩張駄目だ、觀念

せい。もう斯うなりや仕方がないわ。矢張火の國都迄お伴して高山彦、黒姫の戦争を觀戰するより道はないわ」

房公「私は黒姫の從者房公、芳公と申す者で御座います。黒姫様が永らくお邪魔しましてお忙しい中を誠に濟みませぬ」

建國別「いえいえ如何致しまして……黒姫様が御親切に御訪問下さいまして吾々夫婦の者は感涙に咽んで居ります。何卒そんな事言はずに奥へお這入り下さつて、お酒でも一つお飲りなさつて下さいませ」

虎公「オイ房公、芳公あの通り親切に仰有るのだから、折角のお志だ、無にするのも濟まないから一杯よばれて來ようぢやないか」

房公「さうだ。一杯頂戴したいものだね……なア芳公、貴様もあまり下戸でもあるまい、一つ御馳走にならうか」

建能姫「何卒皆さま揃うて奥へお這入り下さいませ。差上げる物としては別に何も御座いませぬが、お酒が澤山に用意してありますから、早く此方へお這入り下さいませ。サア吾夫様、奥へ参りませう。黒姫様も餘りお急ぎでなくば、お伴の方

と一緒に奥の方へ引返して下さつたら如何でせうか」

黒姫「ハイ、御親切は有難う御座いますが、妾は何となく心が急きますから是で御免を蒙ります。御縁が御座いますれば又お目にかかりませう」

建國別「何卒、先生にお會ひになりましたら、吾々夫婦の者が宜しく申して居つたとお傳へ下さいませ。實の處を言へば、吾々夫婦は貴女を火の國迄お送り申上げるのが本意ですが、御存じの通り今日は斯様の次第ですから失禮を致します。

せめて二三日御逗留下さいませすれば、吾々夫婦の者が御送り申上げるのですが、餘り貴女がお急ぎ遊ばすから致方ありません。御無禮の段何卒御許し下さいませ

黒姫「ハイ有難う。永々御世話になりました。房公、芳公、二人はゆつくりお酒なつと頂戴して何處なつと行きなさい」

と稍捨鉢氣味になつて夫婦に目禮し、サツサと足早に門前の小徑を歸り行く。玉公外三人は館の番頭役たる建彦や幾公に勧められ、奥の間指して進んで行く。

後に残つた房公、芳公の兩人互に顔を見合せ舌を噛み稍首を傾けて呆れ顔……。房公「オイ芳公、如何しよう。酒も呑み度いが、黒姫さまのあの氣色では、目算

が外れ、落膽の餘り谷川へ身を投げて死ぬ様な勢だつたよ。愚圖々々しては居られない。サア之から後を追驅て黒姫さまの身の過ちの無い様に行かうぢや無いか
芳公「おい、さうだ。お前の言ふ通り愚圖々々しては居られない。サア行かう」
と兩人は挨拶巻をグツと締め、尻端折つて元來た道をトントンと地響きさせ乍ら、
黒姫の後を探ねて走り行く。

(大正一一・九・一三 舊七・二二 北村隆光録)

第一五章 手長猿〔九五六〕

建日の館を訪ねたる 三五教の黒姫は
建國別を眞實の 生みの吾子と思ひつめ
はるばる訪ねて來たものを 案に相違の悲しさに

早々館を立出でて 二人の従者を見捨てつつ

髪ふり紊し吹く風に 逆らひ乍ら坂路を

足に任せて降り行く たよりも力も抜け果てし

此黒姫の心根は 聞くも無残の次第なり

萬里の波濤を乗り越えて しがれ慕うたハズバンド

高山彦は火の國の 神の館にましまして

花を欺く愛子姫 二度目の女房に持ち給ひ

睦まじさうに日を送り 榮え玉ふと聞くよりも

黒姫心も何となく 面白からずなり果てて

行く足竝もトボトボと 力なげにぞ見えにける。

あゝ惟神々々 御靈幸はひましまして

火の國都にまします 高山彦に巡り會ひ

愛子の姫と睦まじく 心の底より打あけて

互に手を取り三五の 神の教を廣めさせ

救はせ玉へ惟神 純世の姫の御前に
願ひまつるゝと宣り乍ら 岩石崎嶇たる峻坂を
トントントンと降り行く あゝ惟神々々
御靈幸はひましませよ。

黒姫の驅出した姿を見失はじと、房公、芳公の兩人は、
ひ乍ら、足拍子を取つて唄ひ行く。 九十九曲りの山路を傳

芳公 ♪ ウントコドッコイドッコイシヨ 天が地となりウントコシヨ
地が天となるウントコシヨ 奇妙な事が出来て来た
高山彦の老爺さまが 年の三十も違ふよな
若い女房を貰ふやら 五十の尻を作つたる
皺苦茶婆さまの黒姫が 萬里の波を乗り越えて
ウントコドッコイ暑いのに 汗をタラタラ流しつつ

薄情爺はくじやうおやぢの後あとをつけ 心の丈こころ たけを口説くどかむと

ウントコドツコイヤつて來くる コリヤ又何またなんとしたことだ

愛子あいこの姫ひめもウントコシヨ 愛子あいこの姫ひめではないかいな

ウントコドツコイ棺桶くわんをけに 片足かたあしドツコイツつ込こんだ

此世このよに用ようのない爺おやぢ 藥罐頭やかんあたまの壽老面げほうづら

入日いりひの影かげかドツコイシヨ 物干棹ものほしざをかと云いふやうな

鱈どちやうの様やうな化物ばけものに 秋波しゅうはを送おくつて吾夫わがつまと

かしづき仕つかへる不思議ふしぎさよ 男をとこが不自由ふじゆうな世よの中なかと

どうして思おもうたか知しらないが あんな爺おやぢと添そふならば

モツト立派りっぱな人ひとがある 此この芳公よしこうはウントコシヨ

如何いかに汚きたない男をとこでも 年としは若わかいしドツコイシヨ

そこらあたりに艶つやがある 同おなじ男をとこを持もつなれば

木乃伊みらいの様やうに干ひすぼつた 骨ほねと皮かはとのがり坊子ばうしを

持もたいでも良よかりそなものぢやのに 私わたしは呆あきれてウントコシヨ

口が利けなくなつて來た
ウントコドツコイ危ないぞ

それそれそこに石がある
草鞋を切つては堪らない

ま一人虎公が居つたなら
草鞋を出して呉れようが

生憎虎公は酒の席
あゝ是からは黒姫が

火の國都へドツコイシヨ
乗込んだなら大變だ

決して無事にはウントコシヨ
治まるまいぞ、のう房公

俺は案じて仕様がな
サアサア早う行かうかい

女心の一筋に
悔し残念つきつめて

短氣を出して谷底へ
身投げをドツコイしられたら

聖地へ歸つて言譯が
どうして是が立つものか

黒姫さまも黒姫ぢや
おい等二人を振棄てて

走つて行くとは何事ぞ
孫公の奴はドツコイシヨ

どこへ隠れて居るだるか
此奴の事も氣にかかる

あちら此方に氣を取られ
頭の揉めた事ぢやワイ

ウントコドツコイ危あぶないぞ それそれそこにも石車いしぐるま

爪つま先さき用心ようじんして来こいよ 若もしも辻すべつて怪け我がしたら

お嬢かかのお鐵てつにドツコイシヨ どしても言い譯わけ立たないぞ

自轉倒島おのころじまを出でる時ときに 俺おれのお嬢かかのお瀧たき奴めが

もうしもうしこちの人ひと お前まへ一人ひとりのウントコシヨ

決けつして體からだぢやない程ほどに お前まへの體からだは私わしの物もの

私わたしの體からだはウントコシヨ ヤツパリお前まへの物ものぢやぞえ

自じ分ぶん一人ひとりと慢まん心しんし 私わたしを忘わすれて怪け我がしたら

私わたしは恨うらんで化ばけて出でる 假たと令へ死しんでもドツコイシヨ

高たか天あま原はらへは行ゆかぬと 抜ぬかした時ときの其その顔かほが

今いま目めの前まへにブラついで お嬢かかが戀こひしうなつて來きた

貴き様さまのお嬢かかも其その通とほり どの何いづこ處こへ行いつたとて

人にん情じやう許ばかりは變かはらない どうぞ用よう心じんして呉くれよ

お鐵てつに代かつて氣きをつける あゝ惟かむ神な々々ながらかむながら

御靈幸はひましませよ

と兩手を動かさせ、足を千鳥に踏み乍ら、一足々々拍子を取つて此急坂を降り行く。黒姫は漸くにして高山川の畔に着いた。ここには恰好な天然の腰掛岩が人待顔に竝んゐる。暫し息を休め、こし方行末の事を思ひ煩ひ、落涙に及んでゐる。そこには檜の大木が天を封じて一二本立つてゐる。黒姫は目を塞ぎ、思案に暮れてゐると、檜の木枝に數十匹の手長猿が此姿を見て、枝から一匹の猿が吊りおりる。次から互に次へと手をつなぎ、七八匹の奴が鎖の様になつて、蜘蛛が空からおりた様に「チウチウ」と黒姫の頭の上に降り來り、黒姫の笠をグイと引つたくり、ツルツルと次第々々に木の上へ持つてあがつて了つた。黒姫は宣傳使のレツテルとも云ふべき大切な冠り物を奪られ、樹上の手長猿の群を眺めて、目を怒らし、残念相に睨んでゐる。猿は凱歌を奏した様な心持になつて「キヤツキヤツ」と黒姫を冷笑的にかからかつてゐるやうな気分がする。黒姫は縁起の悪い、冠り物を四つ手にしてやられて、無念さやる方なく、あり合ふ石をひろつて、樹上

の猿の群に向つて投げつけた。猿は「キーキヤアキヤア」と聲をはりあげ、同類を四方八方から呼び集める。またたく間に「ぐみ」のなつた程、檜の木の上に猿が集まつて来た。さうして樹上から小便の雨を降らす、糞を垂れる、檜の實をむしつては、黒姫目がけて投げつける。黒姫は檜の實と小便の兩攻めに會つて、身動きもならず、怨めしげに立つてゐた。一足でも黒姫が動かうものなら、忽ち猿の群は寄つて集つて、かきむしり、如何な事をするか分らぬ形勢となつて来た。猿と云ふ奴は、弱身を見せたが最後、どこ迄も調子に乗つて追跡し、亂暴を働くのである。黒姫は其呼吸を幾分か悟つたと見えて、瘦我慢にも地から生えた木の様に身動きもせず、猿の群と睨めつくらをやつて居た。時々刻々に猿の群は集まり来る。又しても、頭の上へ猿の腕がおりて来て、今度は髪の毛をグツと手に巻き、引上げようとす。黒姫も堪らなくなつて、「一二三四五六七八九十百千萬！」と手を組んで鎮魂の姿勢を取る。手長猿の群は之を見て、各自に手を組み「キヤツキヤツ」と言ひ乍ら黒姫を一匹も残らず睨みつける。黒姫は股を擴げて、トンと飛び上り大地に大の字になつて見せた。手長猿の奴、又之に倣つて、木の

上をも省みず、一齊に飛び上り大の字になつた途端に、ステンドーと大地へ雪崩を打つて轉倒し、「キヤツキヤツ」と悲鳴をあげ、はうばうの體で逃げて行く、其可笑しさ。黒姫はやつと安心の胸を撫でおろし、手拭を懐から取出し、汗を拭いた。

猿の親玉ともいふべき五六匹の大きな奴、檜の木の上から、逃げもせず黒姫の様子を眺めてゐたが、黒姫が汗を拭いたのを見て、同じく兩の手で、懐から手拭を出す眞似をし乍ら、顔をツルリと撫でた。樹上の大猿は又もや檜の實を【むしつては黒姫目がけて、雨霰と投げつけ出した。黒姫は兩手を擴げ、一方の足をピンと上げ、左の足でトントントンと地搗きをして見せた。樹上の大猿は一齊に兩手を擴げ、一方の足をピンと上げて、木の上でトントントンと地搗の眞似をした途端にドスドスドスと一匹も残らず地上に墜落し「キヤツキヤツ」と悲鳴をあげ、轉けつ轉びつ、何處ともなく姿を隠して了つた。折柄サツと吹き來る可なり荒い風に黒姫の被つてゐた笠は音もなく、秋の初の桐の葉の落ちるが如く、フワリフワリと黒姫の前に落ちて來た。

黒姫は再生の思ひをなし、直に地上にうづくまり、拍手を打ち、天津祝詞を奏上し始めた。乍併、祝詞の聲はどこともなく、力なく震ひを帯びてゐた。

かかる所へ房公、芳公の兩人はドンドンと地響きさせ乍ら、息をはづませ、此場に追ひ付き來り、

房公「ハ―ハ―ハ―、ア、息が苦しいワイ。マアマア黒姫さま、よう此處に居て下さつた。どれ丈心配したことが分りませぬよ」

芳公「黒姫さま、おつむりの髪が大變に亂れてゐるぢやありませんか」

黒姫「よい所へ來て下さつた。今の今迄、手長猿の奴、何百とも知れずやつて來よつて、此通り髪の毛迄、ワヤにしてうたのだ。乍併神様のお蔭で、一匹も残らず退散したから、マア安心して下さい。お前さま、エロウ早かつたぢやないか、お酒を頂く間がありましたかなア」

房公「滅相な、そんなこと所ですか、黒姫さまが血相變へてお歸りになつたものだから、氣が氣でなく、もしもの事があつてはならないと、吾々兩人が宙を飛んで此處まで驅つて來たのです」

黒姫「ア、それは濟まないことでしたなア。さうして虎公さまや、玉公は如何して御座るかなア」

芳公「今頃は甘い酒に酔つぶれて、管でも巻いてをりませうかい。斯うなると親方のない者は氣樂ですワイ」

黒姫「そんな氣兼ねは入らないのだから、ゆつくりと御酒でも頂いて來なされると

よかつたに、それはそれは惜い酒外れをなされましたワイ」

房公「ハイ、おかげ様で、酒外れを致しまして有難う御座います。併し黒姫さま、

お前さまも、サツパリ、目的が逆外れになりましたなア。大將がサカ外れに會う

てゐるのに、伴の吾々が外れないと云ふ譯はありませぬからなア、アツハ、、、

本當に誠に、御互様に御氣の毒の至りで御座いますワイ、ホツホ、、、」

とおチヨボ口をし乍ら、肩をゆすつてチヨクツて見せた。黒姫は、

「エ、又そんな洒落をなさるのか、エ、辛氣臭い代物だなア」

と口汚く罵り乍ら、矢庭に笠を引つかぶり、金剛杖をつき、足を早めて、二人に

構はずスタスタと驅出した。房公は大聲を張り上げて、

房公「モシモシ黒姫さま、一寸待つて下さいな、さうしたものでござありませぬぞや」

黒姫「エ、お前達は若いから、足が達者だ、ゆつくり休んでお出で、此黒姫は年が老つて、足が重いから、ボツボツ先へ行きます。後から追ひ付いておくれよ」
芳公「モシモシ黒姫さま、我を出して一人旅をなさると、又猿の奴が襲撃しますぞや。暫く待つて下さいな、私はお前さまの身の上を案じて忠告するのだよ」
黒姫は耳にもかけず、後ふり向きもせず、尻をプリンプリン振り乍ら、杖を力に雨に洗ひさらされた石だらけの坂路を、コツリコツリと杖に音させつつ、火の國の都を指して急ぎ行く。

（大正一一・九・一三 舊七・二二 松村眞澄録）

第一六章 樂天主義（九五七）

黒姫くろひめの慌あわただしく驅か出した後あとの二人ふたりは、黒姫くろひめの坐すわつてゐた天然てんねんの岩いは椅子いすに腰こしを打うち掛かけ乍ながら、一服いっぷく休やすみの雑談ざつたんに耽ふけつてゐる。

房公ふさこう「人間にんげんと云いふ者は考かんがへて見みれば約つまらぬ者ものぢやないか。此世このよへ生うまれて來きて何なに一ひとつ是これといふ功名こうみやうも殘のこらず、一日いちにち々々いちにちとウツカリしてゐる間に墓場はかばへ近寄ちかよつて行くのだ。俺おれだとて、今は此様このやうに頭あたまの頂邊てつぺんが禿はげて來きて見みすばらしくなつたが、若わかい時は随分ずぶん欸もてたものだよ。つい一二年いちにねん前の事ことのやうに思おもうてゐるが、指折ゆびをり數かぞへて見みれば、早はや二三十年にじふねんも經たつてゐる。本當ほんたうに夢ゆめのやうだ。此短このみじかいやうな永ながい月日つきひに何をなにやつて來きたかと思おもへば、此れこと云いふ目星めぼしい仕事しごとは一つも殘のこつてゐない。食くつては垂たれ食くつては垂たれ、寢ねたり起おきたり、女をんなが美うつくしいの汚きたないの、若わかいの年とし老よりぢやのと、言いつて暮くらしたのも、本當ほんたうに夢ゆめの間まだつた。俺おれの顔かほに皺しわのよつたのと、嬢かかあの髪かみの毛けに艶つやがなくなつたのと、餓鬼がきが一人ひとり殖ふえたのが、此世このよへ生うまれて來きた俺おれの半はん生せいの事業じげふだと思おもへば、本當ほんたうに悲かなしくなつて來きた。神様かみさまの御造おつくり遊あそばした此寂光淨このじやくくわうじや土うどに生うまれて來きながら、時々じじこく刻く々に老おいぼれて行くと思おもへば、人生じんせいも本當ほんたうに果敢はかなくなつて來きたよ。黒姫くろひめさまだつて、さうぢやないか、お道みちの爲ためだとか、世よの爲ためだと

か云つて、一生懸命に世界を股にかけて苦勞をやつて御座るが、年が老つてから世話にならうと云ふ子供は一人もなし、若い時に澤山に思うて、子供は何時でも、男と女とさへ居れば出来るやうに思ひ、捨てた子は生きて居るか死んで居るか分りもせず、假令此世に生て居つた所で、生みの親より育ての親とか云つて、餘り大きな顔して、子の世話になる譯にも行くまいし、本當に黒姫さまの事を思うても可哀相になつて來た。なア芳公、お前と俺はまだしも、女房や子供があるのだから、黒姫さまの事を思へば、結構な神様の御恵みに預つて居るのだよ」

芳公「さうだなア、それを思へば、俺達も餘り不足は云へぬワイ。乍併人間は老少不定だから、かうして筑紫の島へ渡つてゐる不在の間に、女房が病氣になつて死んでゐるやら、吾子が死になつて居るやら分つたものぢやない。本當に苦みの世の中ぢや、家鴨の様に玉子を生みつ放しにして、外の鳥に育てさした様な黒姫さまで、ヤツパリ老の年波で此世の中が何となく淋しくなつたと見え、高山彦さまよりも捨てた子の方が戀しうなつた様だから、本當に人生と云ふものは、思へば思へば淋しいものだ。あゝ惟神靈幸倍坐世」

房公「オイもう斯んな事は打切りにしようかい。何だか神様に對して、不平を云つてゐる様に聞えて恐れ多い。何事も人間の考へで此世は行くものぢやない。何うならうと斯うならうと、神様のなさる儘だ」

房公「時に房公、俺は一つ合點のゆかぬ事があるのだ。どう考へても腑に落ちぬがなア」

房公「俺も一つあるのだ。お前の合點がゆかぬと云ふのは、昨日の宣傳歌の主だらう」

房公「オウさうだ。確かに玉治別命様のお聲だつた。それに聲は聞いたが、時鳥の様に、皆目御姿が見えないとは、是も不思議の一つだ」

房公「天地の間は凡て不思議ばかりで包まれてゐるのだからなア……「怪しきをあらじと云ふは世の中の、怪しき知らぬ癡れ心かも」……「怪しきは是の天地うべなうべな、神代は殊に怪しきものを」……とか云つて、今から三十萬年未來の十九世紀と云ふ世の中に生れた本居宣長と云ふ國學者が云ふ様に、本當に此世の中は怪しいものだ……「知ると云ふは誰のしれ者天地の、怪しき御業神ならずし

天然椅子てんねんいすに腰こしかけて

何なんぢや彼かんぢやと神かみさま様の

噂うわさばか計りして御座ござる

ホンに可を笑かしい鬼おにぢやなア

ドッコイドッコイドッコイシヨ！

と言いひ乍ながら、スツと二人ふたりの前まへを通とほり、影かげもなく煙けぶりの如やうに消きえて了しまつた。

房公ふさこう「オイ益ます々ます怪あやしうなつて來きたぢやないか。あんな小ちつぼけな人間にんげんが七しち八はち人も手てをつないで、忽こつぜん然ぜんと現あらはれ、俺おれたちを鬼おにだとか、曲まがつ津つだと云いひよつたぢやないか。

ありや一體いつたい何なんだらうなア」

房公ふさこう「何なんでもない、神かみさま様にかみさまきまつてゐるワイ。俺おれたちの心こころに未まだ惡あく魔まが潜ひそんでゐるから、天てん教けう山ざんの木この花はな咲さく耶や姫ひめ様さまが童どうじ子じと顯けん現げんして御ご注ちう意い下くださつたのだらうよ」

房公ふさこう「そうかも知しれないなア。ヤアもう結けつ構こうな天てん地ちの間あひだに生せいを享うけ乍ながら、最さい前ぜんの様やうな悲ひく觀わん的てきの詞ことばを洩もらしちや濟すまない。神かみさま様の教をは樂らく天てん主しゆ義ぎだ。悲ひく觀わんする心こころにな

るのは、ヤツパリ心の中に鬼が巣くうてゐるのだ。オイ一つここで宣傳歌でも唄つて、悲觀の雲を晴らさうぢやないか」
芳公「先づお前から唄つてくれ、悲觀論者の發頭人だからなア」

房公「神が表に現はれて 善と惡とを立別ける

人の身として天地の どうして眞理が分らうか

此世を造りし神直日 心も廣き大直日

皆神様の胸の裡 おいらの知つた事でない

只何事も人の世は 直日に見直せ聞直せ

身の過ちは宣り直せ 悲觀は轉じて忽ちに

樂天主教に早替り 娑婆即寂光淨土の

眞理を悟つた今の吾れ あゝ惟神々々

神の尊き懷に 朝な夕なに抱かれて

不足を言つて濟むものか 悲觀の鬼が巣を組んで

心の空をかき紊し
根底の國へやりかけた

げに恐ろしい世の中だ
いやいや決してそうでない

げに恐ろしい吾が心
心の鬼が身を責める

神も佛も胸の内
鬼も大蛇も吾胸に

潜んで居るの知らなんだ
今現はれた神様は

吾等の迷ひを晴らさむと
天教山より現はれて

生命と安息と歡喜を
與へ玉ひしものならむ

あゝ惟神々々
神の心に身を任せ

只何事も愼んで
神の御爲世の爲に

力限りのベストをば
盡して行くより途はない

國治立の神様よ
豊國姫の神様よ

其外百の神々の
あつき恵に抱かれて

此世に生れ來りしを
何とも思はず徒に

悲觀しました吾罪を
幾重におわび致します

あゝ惟神々々かむながらかむながら

御靈幸はひましませよ』みたまさち

と唄うたひ乍ながら、二人ふたりはいそいそとして黒姫くろひめの後あとを追おつて行く。

(大正一一・九・一三 舊七・二二 松村眞澄録)

第三篇 峠たうげの達引たてひき

第一七章 向日峠むかふたうげ〔九五八〕

向日むかふたうげ峠たうげの山麓さんろく、樟樹しやうじゆ鬱蒼うつさうとして空そらを封ふうじた森もりの下したに數十人すうじふにんの荒男あらをとこ、二人ふたりの女をんなを荒繩あらなはにて縛しばり上げ、何事なにごとか聲高こはだかに罵ののしつてゐる。其中そのなかの大將たいしやうと覺おぼしき男をとこは大蛇をろちの三さん

公と云つて、此界限での無頼漢である。さうして兼公、與三公の二人は三公の股肱と頼む手下の悪者である。三公は森の下の巨大なる岩の上に跨つて冷やかに二人の女を見おろしてゐる。

兼公「オイ女、モウ斯うなつては、何程藻掻いても叶ふまい。サア茲でウンと首を縦に振るか。すつた揉んだと何時迄も屁理屈を吐しや、モウ了見はならぬ。此兼公が親分に成り代り、叩き殺して了ふが、それでも良いか」

女「えゝ汚らはしい、假令三公に叩き殺されても、女の操は何處迄も外しませぬ。一層のこと、早く一思ひに殺しなさいよ」

與三「コレコレお愛さま、よく考へて見なさい。命あつての物種だ。そんな事は、はずに、ウンと色好い返事をしなかつた方が、お前の將來の爲だ。火の國に驍名隠れなき大蛇の三公さまと云つたら、名を聞いても獅子狼虎までが、尾を巻いて細くなつて逃げると云ふ威勢の高い、白浪男だ。何程お前さまが、虎公さまに操立てをした所で、あんな氣の弱い三五教にトチ呆けて居る様な腰拔男が何になるものか。チツと胸に手を當て、利害得失を考へて見なさい。三公の奥さまになれ

ば、それこそ立派な者だ。俺達も姉貴々と敬つて、どんなことでも御用を聞きます。ここが思案の決め所だ。お前は今逆上して居るから、是非善惡の判断が付こまいが、能く胸に手を當てて考へなさい」

お愛「イエイエ何と言つて下さつても、一旦虎公さまと約束を結んだ以上は、そんな事が如何して出来ませうか。假令殺されても操を破つたと云はれては、先祖の名折れ、子孫代々に至るまで、恥を晒さねばなりません。世間の人には不貞くされ女だと罵られ、恥をかかねばなりません。最早今日となつては、私の決心は如何なる權威も金力も動かすことは出来ませぬ。どうぞそんな事を云はずに、私を殺して下さい」

與三「ハテさて悪い御了見だ。お前の大切に思ふ虎公は、建日の村の玉公とやらに連れられて、無花果を取りに行くとか、水晶玉が曇つて黒姫が如何だとか、譯の分らぬことを吐ぎきやつて、高山峠の絶頂へ行きよつた。それを嗅ぎつけ、三公親分の手下が五六十人、後追つかけて、虎公の生命を取ると云つて往つたのだから、もう今頃は氣の毒乍ら、冥途の旅をしてゐる時分だ。何程お愛さま、○

○が肝腎だと云つても、生命のない男を夫に持った所が、仕方がねえぢやないか。人は諦めが大切だ。男は決して虎公計りぢやない。お前の身の出世になることだから、私が斯うして忠告をするのだ』

お愛『エ、何と、三公の乾兒共があゝの虎公さまを殺しに行つたとは、ソラ本當で御座いますか。エ、残念や、口惜い、假令女の細腕なりとて、仇をうたいでよくものか、コレ三公、女の一念思ひ知つたがよからう』

と身を藻がけ共、がんじがらみに縛られた其體、何うすることも出来ないのに、無念の齒を喰ひしほり、恨み涙をタラタラと落とし乍ら、三公の顔を睨めつけてゐる。

三公は冷やかに笑ひ乍ら、

三公『アハ、ハ、ハ、テもいぢらしいものだなア、オイお愛、よつく聞け。貴様は何時ぞやの夕べ、俺が貴様に出會つて、此方の女房になる氣はないかと云つた時、何と云ひよつた……不束かな此私、それ程までに思つて下さいますか、女冥加につきます。乍併、私には兩親が御座いますから、トツクリと相談を致しまして

御返辭をする迄待つて下さい……と吐したぢやないか。其とき厭應言はさず手ごめにするのは、いと易い事だつたが、お前の人格を重んじて、俺も一旦言ひ出した男の顔を下げるとは知り乍ら、辛抱して待つてゐたのだ。さうした所が、一年経つても二年経つても何とか彼とか云つて、此方をチヨロまかし、到頭虎公の野郎が所へ嫁入をしやがつた。憎き代物だ。モウ斯うならば俺も男だ。貴様が虎公の奴へ行つてから、最早三年にもなるだらう。俺が貴様に懸想してから、今年で早五年、未だ獨身生活をしてをるのも、何の爲だと思ふ。チツとは俺の心も推量したら如何だ、片意地張る計りが女の能ではあるまいぞ』

お愛「エー、アタ厭らしい。大蛇の如うな無頼漢の三公に、誰が、女が相手になる者がありますか。至る所でゲチゲチのやうに嫌はれ、女房になる者がないので、止むを得ず獨身生活をしてゐる癖に、ようマアそんな事が、白々しい、言はれたものだ。假令此身は殺されて、此肉體を烏にコツかしても、三公の様な嫌ひな男に、指一本觸へさしてなるものか。いい加減に諦めて、舌でも咬んで死んだが宜からう。エ、お前の方から出て來る風迄、氣分の悪い香がする』

と捨鉢氣味の生命知らずに、思ひ切つて喋り立てる。三公は怒髪天をつき、岩を下り来り、お愛の前に立ちはだかり、蠓螺の様な拳骨をグツと固めて目の前に突出し、三つ四つクルリクルリと上下に廻轉させ乍ら、
三公「オイお愛、是は何だと思つてゐるか、中まで骨だぞ。鐵よりも固い此鬼の蕨が貴様の脳天へ、一つ御見舞申すが最後、脆くも寂滅爲樂、死出の旅だ。いい加減に覺悟を定めて、好い返辭をしたら如何だ。俺だとして萬更木石でもない、暖い血もあれば涙もある。そちらの出やうに依つちや、何とも知れない親切な男だ。そんな我を出さずに、暫く試みに俺の言ひ状について見よ。忽ち貴様は相好を崩し、……世の諺にも曰ふ通り、人は見かけによらぬものだ、あれ程恐ろしい嫌いな男と思ひ込んでゐた此の三公は何とした親切な男だらう、虎公に比ぶれば、どこともなしに男振も好いなり、親切も深い、氣甲斐性もある。こんな立派な男を何故あの様に、瘦馬が荷を覆す様に、嫌うたのだらう三公さま誠に濟みませなんだ、どうぞ末永う、幾久しく可愛がつて下さい……と云つて、嬉し涙にかきくれ、俺が一足外へ出るのも、氣に病んで放さない様になつて來るのは、火を睹る様な

明かな事實だ。なアお愛、ここは一つ胸に手を當てて考へて見たら如何だ
とソロソロ怖い顔を、何時の間にやら柔けて了つてゐる。

お愛「ホツホ、何とマア腰拔男だらう。團栗眼を柳の葉のやうに細くして、涎
まで垂らして、見つともない、そんな屁古垂男に猫だつて、黽だつて、心中立
する者があつて堪りませうか。サア早う殺して下さい。冥途に御座る虎公と、手
に手を取つて死出の山路三途の川、お前のデレ加減を嘲り乍ら、極樂參りをする
程に、サア早く殺しやいのう」

三公「ハテさて能くも惚けたものだなア。虎公の様なしみつたれ男の、どこが氣
に容つたのか、合點のゆかぬ事もあればあるものだなア」

お愛「ホツホ、何とマア偉い惚け方だこと、何程お前が惚けしやんしても、合
縁奇縁、私は如何しても蟲が好きませぬわいな。乍併此廣い世の中、蓼喰ふ蟲も
好き好きとやら、苦い煙草にも喜んで喰ひつく蟲があるのだから、お前も嫌はれ
た女に、何時迄も未練たらしい、秋波を送るよりも、澤山の乾兒を持つて御座る
のだから、目つかちなつと、跛なつと、鼻曲りなつと探し出して、女房に持たし

やんせ、オホ、お氣の毒様……」

三公「コリヤお愛、黙つて聞いて居れば、餘りの過言でないか。貴様は善言美詞の言靈を使へと教ふる、無抵抗主義の三五教の信者ぢやないか。そんな暴言を吐いてても、天則違反にはならないのか」

お愛「ヘン天則違反が聞いて呆れますワイ。大蛇の三公と云ふ蛆蟲こそ、天則違反の張本人だ。あゝあ、氣味が悪い、どうぞ、そつちへよつて下さい。吐げさうになつて來ました」

兼公「コリヤ女ツちよ、柔かく出ればつけ上がり、何と云ふ劫託を吐ざくのだ。それ程殺して欲しければ、殺してやらぬことはない。乍併、かやうなナイスを無残々々殺すのも勿體ねえ。ここは一つ思案を仕直して、犠牲になる積りでウンと云つたら如何だ。冥途へ行つて虎公に會ふなんて、そんな雲を掴む様な望みを起すな」

お愛「コレ兼、お前の出る幕ぢやない、スツ込んで居なさい。すつ込んでゐるのが氣に入らねば、目なと噛んで死んだが宜からう。お前達が此世に居るものだから」

ら、米が高うなる計りだ」

兼公「あゝあ、サツパリ駄目だ。乍併、こんなシヤンに、假令悪口でも詞をかけ

て貰うたと思へば、俺も光榮だ、アハ、ハ、ハ、」

お愛「オホ、ハ、ハ、お前はヤツパリ私の生命を取るのが惜しいと見える。甲斐性の

ない男だなア。何程おどしても嫌しても、瘦てもこけても、侠客の妻、こんな事

で屁古たれて、如何して夫の顔が立つものか。これでも内へ歸れば、澤山の乾兒

に、かしづかれ、姉貴々と敬はれる姐御さまだ。お前の様な瘦犬に吠えつかれ

て、ビクつくやうな事で、侠客の女房にはなれませぬぞや、オホ、ハ、ハ、ハ。あの兼

公の青い顔わいのう」

兼公「何と剛情な姐貴だなア。これ丈身動きもならぬ様に縛められ、活殺自在の

權を握られた敵の前で、これ丈の劫託を竝べるとは、太え度胸だ。姐貴、俺も感

心した。虎公が惚れたのも無理ではあるまい。俺も今日から姐貴の乾兒になるワ」

與三「オイ兼公、ソリヤ貴様、何を云ふのだ。親分の前ぢやないか。そんなこと

吐すと、貴様も一緒に殺んでやらうか」

兼公「ヘン、何を吐すのだい、早く殺んで欲しいワイ。こんな美しいシヤンと一
緒に心中するのなら、大光榮だ。早う俺達を叩き殺して了へ、其代りに一つ頼ん
でおくことがある。同じ穴に向ひ合せにして埋けてくれ。それ丈が俺の頼みだ」
お愛「ホツホ、好かんたらしい。誰がお前等と一緒に埋けられて堪りますか
い。冥途へ往つて迄、つきまとはれては、夫の虎公にどんなに怒られるか知れま
せぬわいな。お前は勝手に殺されなされ。私にチツとも關係はありませぬから：

…」

兼公「エ、口の悪い女だなア。人には添うて見い、馬には乗つて見いだ。今お前
が此兼公をゲチゲチの様に嫌つてゐるが、冥途へ行つて死出の道伴れをするやう
になつてから思ひ當るだらう。人は見かけによらぬものだ、こんな男と冥途の旅
をするのなら、假令地獄の釜のドン底まで…と云つて、くつついて離れない様
になりますぞや」

お愛「オツホ、三公の受賣をしても、流行りませぬぞや。エ、汚らはしい、
其方へ行つて下さい。氣持ちの悪い匂のする男だなア」

三公「オイ與三、モウ斯うなつちや仕方がない。お愛も一人で冥途の旅は淋しからうから、妹のお梅も一緒にバラしてやれ。序に兼公の裏返り者も、以後の見せしめに血祭りにして了へ。そうなくちや三公の顔が立たねえ。可哀相なものだが、こうなつちや、引くに引かれぬ場合だ、ア、惜い者だなア」

與三公は矢庭に懷から細紐を取出し、兼公の背後より首に引っかけ、二三間引摺つた。兼公は顚をかけられたまま、手足をもがきつつ苦んでゐる。寄つてかかつて大勢の乾兒は、兼公の體をがんじ搦みに巻いて了つた。

今年十五才になつた、お愛の義妹のお梅は最前から目を塞ぎ、素知らぬ顔をして、大勢の目を盗み乍ら、自分の綱をスツカリほどき、依然として縛られた様な風を装うてゐた。三公始め一同の奴は、お愛の方に氣を取られて、お梅が何時とはなしに斯んなことをしてゐるのに氣がつかかなかつたのである。

日は漸く暮れかけた。三公は以前の岩の上に腰打かけ、三人を冷やかに見下し乍ら、

三公「ソラ討て、やつつけろ！」

と下知してゐる。與三公始め大勢の乾兒は三人を目がけてバタバタと驅より、打つ、蹴る、擲る、忽ち修羅場が現出した。斯かる處へ森の笏を響かして、宣傳歌が聞えて來た。

(大正一一・九・一四 舊七・二三 松村眞澄録)

第一八章 三人塚 (九五九)

孫公まじこう 神が表かみおもてに現あらはれて 善ぜんと惡あくとを立て別たわける

醜女しこめ探女さぐめや鬼大蛇おにをろち 虎狼とあほかみの吠ほえ猛たけり

勢猛いきほだけく攻めせくとも 弱よわきを助たすけ強つよきをば 敷島しきしまの

誠まことの道みちの神司かむつかき 弱よわきを助たすけ強つよきをば

言向ことむけ和やはす神業かむわざに 仕つかふる身みこそ樂たのしけれ

此世を造りし神直日

心も廣き大直日

唯何事も人の世は

直日に見直し聞直し

宣り直し行く其時は

天が下なるもろもろは

残らず吾の味方のみ

仇も曲津も忽ちに

旭に露と消えて行く

三千世界の梅の花

一度に開く神の道

此世を救ふ生神は

國治立大神や

神素盞鳴大御神

筑紫の島を守ります

國魂神の純世姫

神の御稜威の現はれて

常世の泥もすみ渡る

朝日は照るとも曇るとも

月は盈つとも虧くるとも

曲津は如何に猛るとも

誠の力は世を救ふ

黒姫さまの一行は

今はいづこにさまよふか

聞かま欲しやと来て見れば

片方の森に人の聲

唯事ならぬ氣配なり

あゝ惟神々々

御靈幸倍ましまして

此世の中の人々は

互に誠を盡しあひ

愛し愛され末長く

神の作りし神の世に

常世の春を楽しみて

榮えと光と喜びの

雨に浴させたまへかし

あゝ惟神々々

御靈幸はひましませよ

かく宣傳歌を謠ひながら、怪しき人聲を聞きつけて、唯事ならじと驅けて來たのは孫公であつた。孫公は、大蛇の三公の手下共數十人集まつて二人の男女を縛り上げ、打つ、蹴る、擲るの大慘状を見るより早く、夕暮を幸ひ木蔭に佇んで大音聲、

孫公「ヤアヤア、此方は火の國都の高山彦命であるぞ。此森林に若き女を連れ來り、亂暴を致す曲者、今高山彦が神力によつて打ち亡ぼし呉れむ。どうだ、改心致してそれなる男女を助け、此場を立ち去らばよし、聞かぬに於ては、神變不思議の神力によつて、其方共一人も残さず冥途の旅立ちをなさしめむ。どうだ返答

を聞かせ！」

此時樟の樹上より、五六人の聲、

「ヤイ何處の奴かは知らね共、高山彦とは眞赤な偽りだらう。面を上げい！」

と唝鳴りつけた。此聲と共に孫公はフト樹上を見上げる一刹那、孫公の兩眼めが

けて木の上より砂を掴んで投げつけた。孫公は兩眼に砂をかけられ「アツ」と一

聲其場に踏み目を擦つて居る。其隙をねらつて、與三公は矢庭に首に繩を引きか

け、二三間ばかり引ずり出した。孫公は餘りの不意打ちに肝をつぶし手足を藻掻

いてゐる。そこへ數多の手下はバラバラと寄り集り、孫公を高手小手に縛めて仕

舞つた。

日は漸く地平線下に没し四邊は烏羽玉の闇に包まれて仕舞つた。お梅は闇に紛

れて辛うじて此場を逃げ出し、いづくともなく姿を隠して仕舞つた。

三公「アハ、、、いらざる邪魔立を致して此醜態は何の事だ。火の國都の高山

彦とはそれや何を吐す。此方を何と心得て居るか。大蛇の三公と云つたら火の國

に鳴り渡る侠客の大親分だ。いらぬ構ひ立を致し、飛んで火に入る夏の蟲、實に

憐れな者だなア……オイ與三公、此奴をたたんで仕舞へ！」

與三「ハイ、斯うやつて縛めて置けば逃げる氣遣ひはありませぬから、マア悠くりと鬪殺しにしてやりませうかい。それよりも第一お愛の奴、もう一談判して、親分の言ひ條につくやうにしてはどうですか」

三公「こんな事は俺から直接に云ふのも些と氣が利かねえから、能辨のお前に任す。旨くやつて呉れ。其代り褒美は幾何でも遣はすから……」

與三「ヘイ承知致しました。何と云うても「ウン」と云はせて見ます。併しかう暗くてなつては顔も碌に見えませぬから……オイ勘州、燈火をつけい……親分安心して下さいませ」

と云ひ乍ら、お愛の傍へ探り探り近寄つた。勘州は森の枯木を集め、火を切り出して「パツ」とつけた。四邊は忽ち晝の如くなつて來た。澤山の乾兒が枯枝や木の葉を掻き集めて山のやうに積んだ。火は益々燃え上り、四邊は晝の如くなつて仕舞つた。

與三「これこれお愛さま、どうだな。もう思案が付きましたかなア。よもやこれ

だけ威勢の強い三公さまを夫にもつのを嫌とは云ひますまいねえ」

お愛「エ、汚らはしい又しても又してもそんな事を云うてお呉れるな。誰が此様な悪人に靡くものがありますかい。些と三公の面と御相談なさいませ。假令乾兒は眇うても、武野村の侠客虎公さまと云つたら、界限に名の響いた、善を勧め悪

を誡め、弱きを助け強きを挫く侠客だ。此お愛は瘦てもこけても虎公さまの女房だ……否やと云ふのにお前は諄い、一度いやなら何時もいや……と云ふ都々逸の

文句ぢやないが脇まで染み込んだこの嫌いが、どうして洗ひさらはるものか。そんな事いつ迄も掛け合つて居るよりも早く殺しなさい。牛糞に火のついたやうに、

「クスクス」と埒の明かぬ野郎だなア」

與三「オイお愛の姐貴、ほんとに太い度胸だなア。俺もすっかり感服して仕舞つた。こんな姐貴を親分にもつた乾兒共は幸福な事だらう。俺も同じ事ならこんな

親分が持ちてえワ」

三公「これやこれや與三、それや何を云ふのだ」

與三「へい、うつかりと心を空しうして居たものだから、兼公の生靈奴、與三公

の肉體へ入りやがつて、こんな事を吐しやがるのです。イヤもう困つた野郎で
すわい」

三公「是から些と氣をつけないと、惡魔に憑依されて忽ち兼公のやうに心機一轉
し、こんな目に遇はなければならぬぞ」

與三「ハイ承知致しました。今後はキツと注意を致します。時に親分、此處へ來
よつた高山彦と云ふ餓鬼ア一體どこの奴でせう」

三公「どこの奴でも構やしねえ。叩き伸ばして埋めて仕舞へばいいのだ。兼公も
序に埋めてやれ」

與三「モシ親分、兼公文や許してやつて下さいな。彼奴も中々親分の爲には蔭に
なり日向になり、力を盡した奴ですからなア。親分がこれだけ顔が賣れたのも、
兼公の幹旋預つて大に力ありと云つても宜しい」

兼公は此問答を聞き、手足を縛られた儘聲をかけ、
「モシ親分、此繩を解いて下さい。最前は大變にお腹を立てさせましたが、あれ
や俺が云つたのぢやない、虎公の生靈奴がフイと憑りやがつて、俺の口を借り、

あんな事云つたのですよ。俺は眞實に迷惑でげす」

與三「兼公、氣がついたか。ア、結構々々。確りせないと又、虎公の靈に憑かれ
るぞ。なア親分さま、兼公の繩を解いてやりませうか」

三公「マア待て待て、さう慌るにや及ばない。それよりも、早くお愛に結局の話
を極めさせて呉れ、それが第一の目的だから……」

兼公「オイ與三公、貴様一人ぢや覺束ないぞ。俺も加勢をしてやるから、早く此
繩を解けい」

三公「オイ與三、俺の命令が下る迄決して解いちやならぬぞ。此奴はどうしても
二心だから、些つとも油斷は出來やしねえ」

與三「オイ兼公、貴様の聞く通りだ、親分の云ふ通りだ、俺も此通りだ。仕方が
ねえや、まア暫く其處に辛抱するがよい」

三公「オイ與三公、お梅の阿魔ツちよが居らぬぢやねえか。彼奴に逃げられちや
大變だぞ」

與三「ヤア如何にもお梅の奴、いつの間に風を喰つて逃げよつたのかな。何と機

敏しこいやつだなア。彼あいつ奴こが此この事ことを虎とら公こうにでも報ほう告こくしようものなら夫それこそ大たい變へんだ。才

イ乾こぶん兒やつらの奴やつら等ら、早はやくお梅うめの後あとを追おつかけて探さがして來こい」

勘かん公こう「鼻はなを摘つままれても分わからねえやうな、眞しんの闇やみに探さがしに往いつたつて分わかりませうか。

此こ處こには燈ひがあるから足あしもと許もとが見みえるが、一いつ町ちやう先さきは眞ま闇くらがりだ。明あ朝すの事ことにしたら

どうでげせうな」

與よ三さ「それもさうだ。仕しか方たがねえなア。もし親おや分ぶんさま、明あ朝す悠ゆうくり探さがす事ことにしま

せうか。虎とら公こうの野や郎らうも、六ろくがあれだけの手て下したを連つれて行いつたのだから、もう今いま頃ころ

は寂じゃく滅めつ爲ため樂らくになつて居ゐるのは鏡かがみにかけて見みるやうなものでげせう。虎とら公こうなんぞに

氣き遣ひはいりますまい」

三さん公こう「いやいや、彼あいつ奴こも中なか々なかの強しれ者ものだ。さう闇やみ々やみと斃くたばりもしよまい。餘あまり樂らく觀くわん

は出で來きまいぞ。併しかし乍ながら此この暗やみ夜よでは仕しか方たが無ない。まアまア明あ朝すの事ことにしたがよか

らう」

お愛あい「コラ三さん公こう、與よ三さ公こう、何なにを愚ぐ圖づ々づして居ゐるのだ。早はやく此このお愛あいを片か付たけな

か。辛しん氣き臭くさいワイ。其その代かはりに今いま其その處こへ見みえた高たか山やま彦ひこさまとやらを助たすけてやつて呉く

れ。些つとも關係ない人だから氣の毒で堪らねえから……」

與三「エイ、お愛さま、他人の事ども云ふ所ぢやあるまいぞ。お汝さま生死の境

に立つて居て、そんな氣樂の事を云つて居れるものかい」

お愛「ホ、ホ、ホ、これ與三何を呆けた事を云ふのだい。生死一如だ此肉體は假令

虎狼の餌食にならうとも、肝腎要のお愛さまの御魂は、萬劫末代生通した。早く

殺しなさい。その代り幽冥界へ行つたら數多の亡者を手下に使ひ餓鬼も人數の中、

澤山の乾兒を引き連れてお前さまの生首を貰ひに来るから、それを樂しみに早く

お愛をやつつけて仕舞ひなさい」

與三「もし親分、どうにもかうにも取りつく島がありません。命を捨ててかか

つとる女に何程脅喝文句を竝べても豆腐に鎚糠に釘だ。どうしませうかなア」

三公「可愛さうなものだが仕方がない。思ひ切つて殺つけて仕舞へ」

お愛「これ三公、置いて下さい。可愛さうなものだなんて、何とした弱音を吹く

のだい。此お愛はお前のやうな惡垂男に、可愛さうだなんてそんな汚らはしい事

を云はれると、小癩に觸つてならないのだよ。虎公さまがいつもいつも可愛い女

だと、連發的に云つて下さるのだから、ヘン、そんな馬鹿口はやめて下さい。それよりも侠客で立つてゆかうと思へば、もつと氣を強く持たねえと駄目だよ。悪なら悪で徹底的に悪をやつたが好い。改心をして善に立ち歸るのなら善一筋を行ひなさい。それが男たるものの本分だ。氣骨もなければ度胸もない空威張りの贗侠客が、こんな大それた謀反を起すとはちつと柄に合ふめえよ」

三公「云はして置けばどこ迄も圖に乗る惡垂女奴！」

と云ひながら、拳骨を固めて滅多矢鱈に打ち据ゑる。お愛は打たれたまま痛いとも痒いとも云はず黙言つて緋切れて仕舞つた。

與三「もし親分、とうとう斃つて仕舞ひましたよ。惜しい事をしたものですな」

三公「何惜しくても仕方がない。他人の花と眺めるよりも、三公嵐が吹いて無残に散らした方が、未練が残らなくていいわ。オイ愚圖々々して居ると何が飛び出すか知れやしなないぞ。序に今來た奴も兼公も、息の根を止めて穴でも掘つて埋けて仕舞へ」

與三公はお愛の體を撫でて見て、

與三「ヤアまだ温がある。何と好い肌だな。まるで搗きたての餅のやうだ。虎公が惚れやがったのも無理はない。親分一寸来て見なさい。此世の名残にお愛の肌を一つ撫でて見たらどうですか。餘り悪い氣持もしませぬぞ」

三公「馬鹿云ふな早く兼と旅の奴とを埋けて仕舞へ。オイ皆の乾兒共此處に穴を掘れ」

と下知する。勘州を始め數多の乾兒共は、携へて來た色々の得物をもつて土を掘り三人の縛つた體を穴の中へ放り込み、上から土をきせ、寄つて集つて足でどんどんと地固めをし、其上に澤山の石を拾つて來て積み重ねて仕舞つた。

三公「アハ、、とうとう三人とも果敢ない事になつて仕舞つた。オイ皆の奴、水でも手向けてやれ。水が無ければ貴様の爛徳利から小便でも出して手向けるのだな。アハ、、」

と豪傑笑ひをして見せる。數多の乾兒は各自に裾を引きまくり、寄つて集つて小便を垂れかける。

三公「これでまアお愛も成佛するだらう。オイお愛、貴様も殘念だらうが、かう

なるも前世からの因縁だと諦めてくれい。冥途へ往つて虎公に遇つたら……大蛇の三公は御壯健で燥いで御座る……と傳言をしてくれえ。一人旅は氣の毒だと思つて、俺の乾兒の兼公と風來の旅人をお前の途連れにつけてやる。これがせめても俺がお前に對する好意だ。きつと冥途に往つて三公を恨んではならないぞ。南無お愛頓生菩提、モウかうなつては誰だつて何の法蓮華經だ。オイ與三公、歸えらうぢやないか」

と先に立ち、闇に紛れて乾兒を引き連れ、心地よげに此場を立ち去つて仕舞つた。最前から闇に隠れて慄ひ慄ひ此様子を見て居たお梅は、四邊に人なきを見濟まし、怖々此場に近よつて來た。まだ薪は燃えて居る。その爲め三人を埋めた塚はハツキリと分る。お梅は一生懸命に石を掻き分けて救ひ出さうとすれども、荒男が四五人もよつて擔いで來た重い石、押せどもつけども「ビク」とも動かばこそ、遂には力盡き脆くも其場に泣き倒れて仕舞つた。

(大正一一・九・一四 舊七・二三 加藤明子録)

第十九章 生命の親（九六〇）

黒姫は石塊だらけの谷道を火の國都へと急ぎつつ進み行く。途中の深谷川に危
い一本の丸木橋が架つて居る。黒姫は石橋でも叩いて見て渡ると云ふ注意深い人
間になつて居た。建日の館の建國別の宣傳使を、輕率にも吾子では無いかと訪問
して失敗したのに懲りたからである。黒姫は一本橋の裏を窺き込むと、幾年かの
風雨に晒された一本橋は、橋の詰の方が七八分ばかり朽ちて居る。これや如何し
たら宜からうかと、橋詰に佇んで吐息を洩らして居る。折しも忽然として現はれ
た三尺ばかりの一人の童子黒姫の顔を見上げてニヤリと笑ひ、

「吾戀は深谷川の丸木橋

渡るにこはし渡らねば

思ふ方には會はれない」

と謠つたきりポツと白煙と共に消えて了つた。黒姫は此奇怪な現象にうたれて不安の雲に包まれ乍ら、
「惟神靈幸倍坐世」と一生懸命に祈願を籠めて居る。

此處は向日峠の手前であつた。火の國の都へ行くのには、火の國崎を通るのが順路である。されど黒姫は左に廣き火の國街道のある事に氣づかず、思はず右へ右へとやつて来て、此山道に迷ひ込んで来たのであつた。此時又もや忽然として七八人の小さき童子、橋の袂に現はれ互に手をつなぎ乍ら、

童子「それ出た、やれ出た、現はれた

向日峠の山麓の、楠の木蔭に鬼が出た

鬼かと思へば恐ろしい

大蛇の三公が現はれて

お愛の方を縛りつけ

高山彦と言ふ男

兼公迄もフン縛り

穴あなを穿うがつて埋いけよつた
大きな岩いはが乗のつてある〝

と言いつたきり、又またもやプスと童子どうじの姿すがたは消きえ、後あとには白煙しろけぶりが幽かすかに揺ゆいで居ゐる。

黒姫くろひめは兩手りやうてを組くみ頭かづべを傾かたむけ、

黒姫くろひめ「はてな、合點がつてんのゆかぬ事ことだな。今いま現あらはれた童子どうじは魔まか神かみか、何なにかは知しらぬ

が、何なんとはなしに氣きがかりな事ことを云いつた様やうだ。高山彦たかやまひこと云いふ男をとこがフン縛しばられて埋う

められたとか、お愛あいの方が埋うづめられたとか言いつた様やうだ。若もしや戀こひしい夫をつとの高山彦たかやまひこ

様さまの事ことではあるまいか。お愛あいの方かたと云いつたのは、大方おほかた愛子姫あいこひめの事ことだらう。向日峠むかふたうげ

の山麓さんろくと云いへば、まだ之これから何程なにほどの里程りていがあるか知しらぬが、何なには兔ともあれ、チツ

としては居をれなくなつた。あゝ如何どうしたら宜よからうかな。……妾位因果わたしけいゐんぐわの者ものが世よ

にあらうか。勿體もつたいない、若氣わかげの至いたりで、折角せつかく神様かみさまから貰もらうた男をとこの兒こを捨すてた天罰てんばつ

が酬むくうて來きて、する事こと爲なす事こと、何なにもかも此この様に鶉いすかの嘴はし程ほど喰くひ違ちがふのであらう。思おも

へば思おもへば罪つみの深ふかい此身このみぢやなあ〝

と獨言ちつつ力なげに落涙と共に垂頂れて居る。此の時何處ともなく宣傳歌が聞え來たる。

☞ 朝日は照るとも曇るとも 月は盈つとも虧くるとも

假令大地は沈むとも 如何なる災難來るとも

神に任した宣傳使 誠一つを立て貫けよ

神は汝と俱にあり 汝の誠現はれて

汝を救ふ神の道 此世を救ふ生神は

天教のお山のみでない 至る所に神坐ます

神の恵みを諾ひて 飽迄行けよ三五の

黒姫司の宣傳使 深谷川の丸木橋

如何に危く見えつれど 汝の心に信仰の

誠の花の咲くならば 易く渡らむ神の橋

進めよ進め早渡れ 吾は玉治別司

汝なんぢの身魂みたまにつき添そひて

汝なれが行末ゆくすゑを守りつつ

此處ここ迄進すすみ來りけり

あゝ惟ただ神々々

御靈幸みたまさちはひましませよ

と云いつたきり、宣傳歌せんでんかの聲こゑはピタリと止とまつて了しまつた。黒姫くろひめは此この宣傳歌せんでんかの近ちかく聞き

えたのに力ちからを得え、玉治別たまはるわけが此この近ちかくに來きて居ゐる事ことを心強こころつよく思おもひ、萎しほれきつたる心こころを

取直とりなほし心待こころまちに待まつて居ゐる。されども玉治別たまはるわけの姿すがたどころか、獸けもの一匹姿いっぴきすがたを見みせぬ。

黒姫くろひめは思おもひきつて此丸木橋このまるきばしをチヨコチヨコ渡わたりに、向むかふに渡わたり胸むねを撫なで下おろし乍ながら、

黒姫くろひめ「あゝ危あやふい事ことだつた。ようまア斯こんな朽果くちはてた橋はしが無ぶ事に渡わたれた事ことだ。之これと

云いふも矢張やつぱり神様かみさまの御恵みめぐみだ、まだ天道様てんだうさまも黒姫くろひめを捨すて玉たまはざる證しるしであらう。あゝ

有ありがた難ありがたい有ありがた難ありがたい勿體もつたいなや

と兩手りやうてを合あせ、涙なみだと共に感謝祈願かんしゃきぐわんの祝詞のりとを奏上そうじやうして居ゐる。

そこに力ちからなげにチヨコチヨコと現あらはれ來きた十四五才じふしごさいの女をんながある。見みれば目めを腫は

らし、色青いろあをざめ、髮振亂かみふりみだし、着物きものの裾すそには土つちが一いっぱい着ついて居ゐる。黒姫くろひめは此この少女せうぢよ

を見るより言葉を掛け、
黒姫「これこれお前は小さい女の身分として、斯んな恐ろしい山道へ何しに來たのだい。見れば目が腫れて居る。髪も亂れ、顔の色は青くなり、着物の裾には赤い土が一ぱい着いて居るぢやないか。之には何か様子のある事であらう。差支なくば此をばさまに云つて下さい。妾は三五教の宣傳使だ。妾の力の及ぶ丈けはお前の助けになりませう」
と親切に勞はり問へば、少女は腰を屈め慇懃に禮を述べ乍ら、
少女「をば様、有難う御座います。何卒助けて下さいませ。妾はお梅と申す女で御座います。お愛と云ふ姉さまが、悪者の爲めに捕へられ、殺されて土の中に埋められて了ひました。さうして二人の男の方と一所に……」
と此處迄言つてワツとばかり聲を放つて泣きくづれる。少女は今迄張りきつて居た精神が、黒姫の情ある言葉に絆されヤツと安心した途端に氣が弛んで、力無げに倒れたのである。黒姫は深谷川へ辛うじて下り水筒に水を盛り來り、少女の口に含ませ面部に吹きかけなどして甲斐々々しく介抱をして居る。黒姫が熱心なる

介抱かいほうの效空かうむなしからず、少女せうぢよは息いきを吹ふき返かへし、苦しくるげに胸むねを撫なで乍ながら、

お梅うめ「あゝ恐こはい恐こはい、をばさま、何卒どうぞ助たすけて下くださいまし。お願ねがひで御座ございます」

黒姫くろひめ「お前まへ、最前さいぜんの言葉ことばに姉ねえさまのお愛あいさまとやらが悪者わるものに殺ころされ、土中どちうに埋うづめ

られたと云いひましたな」

お梅うめ「はい、高たか手小こ手に縛いましめて、森もりの下したの土中どちうに埋うづめて了しまひました。さうして高たか

山彦やまひこと言いふお方かたと、兼公かねこうと云いふ無頼漢ならずものと一いつ所に、深ふかい穴あなへ埋うづめられ、大おほきな石いしを

其上そのうへに幾いくつも幾いくつも乗のせて歸かへつて了しまひました」

黒姫くろひめは高山彦たかやまひこと聞きくより、顔かほを蒼白まつさをにし口くちを尖とがらせ、

黒姫くろひめ「エ、何なんと云いひなさる。高山彦たかやまひこと云いふ人ひとが如何どうなつたと云いふのだい」

お梅うめ「ハイ、姉ねえさまのお愛あいさまと妾わたしが縛しばられて、大蛇をろちの三公さんこうと云いふ悪者わるものに嘖さいなまれ

て居ゐる所ところへ三五教あななひけうの宣傳歌せんでんかを謠うたひ、助たすけに來きて下くださいましたお方かたで御座ございます。

其方そのかたに目潰めつぶしをかけて引倒ひっこかし、荒繩あらなはで縛しばり、姉ねえさまと一いつ所に埋うづめて了しまひました。

ウワーツ……………」

と又また泣なき伏ふす。黒姫くろひめはあわてふためき乍ながら、

黒姫「これこれお梅さま、シツカリして下され。高山彦さまは何處に埋めてあるか。さあ早く行つて助けねばなるまい。お愛さまと云ふのは火の國都の愛子姫ではありませぬか。さあ行きませう」
と促せば少女は、

「ハイ、あまり恐かつたので氣が遠くなり、をばさまの仰しやる事がハツキり分りませぬが、案内しますから、何卒助けてやつて下さいませ」

黒姫「あゝさうだらうとも、無理もない。可憐さうに、怖いのも尤もだ。それにしてもようまアお前は免れて來られたものだ。サア一時も愚圖々々しては居られませぬ。息が絶ては取返しがつきませぬからな」

お梅「をばさま、妾が案内致します。何卒跟いて來て下さい」

と先に立つ。されどお梅は夜前の騒動に氣を脱かれ、其上積み重ねられた石を取除け様として力一杯氣張つた結果、身體は非常に疲れて了ひ、足許さへもヒヨロヒヨロである。それ故思はしく足も運ばず、餘りのもどかしさに黒姫は氣が急いで堪らず、

黒姫「お梅さまとやら、此をばが負うてやりませう。お前は妾の背中から案内して下さい。一刻も猶豫はなりませぬから……」

と云ひ乍ら、お梅をグツと背に負ひ、杖を力に雑草生ひ茂る山道を、我を忘れて進み行く。殆ど十丁ばかりも来たと思ふ時、お梅は背中より細い聲にて、

「をばさま、あそこの楠の根元に、澤山な石が積んで御座いませう。あそこに姉さまや、二人の方が埋められて居られます。ワーンワーン」

と又もや泣き出す。黒姫は泣き叫ぶお梅を勞はり乍ら、慌しく塚の前に馳寄り、背中よりお梅を下し、一生懸命の金剛力を出して、口に神號を稱へ乍ら巨大な石に手をかけ、押せども突けどもビクとも動かぬのに落膽し、涙をタラタラと流し乍ら、一生懸命に天津祝詞を奏上し初めた。

此時丸木橋の袂に現はれた三尺ばかりの八人の童子、何處ともなく出で來り、巨大なる石を毬を投げる様に輕さうにポイポイと取り除け、四五間先へ投げつけて了つた。さうして又もや白煙となつて童子の姿は見えなくなつた。黒姫は感謝の涙に咽びつつ一生懸命に土を掻き分け汗みどろになつて掘りだした。見れば三

人の男女が一緒に枕を並べて埋められて居る。黒姫は心の裡にて神助を祈り乍ら、三人の身體を掘り上げ青草の上に寝かせ、手早く縛の繩を一々解き、天の數歌を歌ひ上げ、三人の蘇生を祈つた。

お梅は其の間に黒姫の水筒を取り谷水を汲み來り、三人の口に含ませた。お愛は「ウン」と一聲叫ぶと共にムツクリと起き上り、お梅の姿を見て嬉し氣に、
「ア、お前は妹のお梅であつたか。ようまあ無事で居て下さつた」

と飛びつく様にする。お梅は嬉しげに、

「姉さま、嬉しいわ、三五教の「をば」さまが助けて下さつたのですよ。お禮を申しなさい」

黒姫は二人の男の顔を見較べ、高山彦には非ざるかと一生懸命に調べて居たが、
「ヤア、之は孫公ぢやつた。まア如何したら良からう」

と身體に手を觸れて見た。まだ何處ともなしに温味がある。黒姫はお愛の感謝の言葉を耳にもかけずに、二人の男に一生懸命に鎮魂をなし、天の數歌を謠ひ上げて居る。二人は漸く「ウン」と呻いて起き上り四邊をキヨロキヨロ見廻して居

る。

孫公「やあ、黒姫さまか。ようまあ助けて下さいました」

と云つたきり涙をタラタラと流し、大地に頭を下げ、感謝して居る。兼公は四邊

をキヨロキヨロ見廻し、

「ヤア、お愛様、誠に危い事で御座いました」

お愛「兼公、三五教の宣傳使様が、妾達一同の生命を助けて下さったのですよ。

お禮を申しなさい」

兼公「之は之は、誰方が存じませぬが、能くもまあ生命を拾つて下さいました。

悪者の爲めにこんな處に、生埋めにされて居りました。モ少し貴女のお出でが遅

かつたら、生命は助かりませぬでした。私は矢方の村の兼公と申して、あまり良

くない人物で御座います。斯うなつたのも全く天罰で御座いませう。何卒神様に

お詫をして下さいませ」

黒姫「まあ、何よりも結構で御座いました。妾も結構なお神徳を頂きました、斯

んな氣持の良い事は御座いませぬ。さうお禮を云つて貰ひましては、妾の折角の

善行が煙となつて消えて了ひます。何事も皆神様が助けて下さつたのです。大きな岩石で壓へつけてあつた此塚は婆アの力に及ばず、苦しみ悶えて居る矢先、木花咲耶姫様の御化身が現はれて、岩を取除けて下さいました。其お蔭で皆さまをお助けする事が出来ましたので、何卒神様にお禮を申上げて下さい」

孫公初めお愛、兼公、お梅の四人は黒姫の後に端坐し、天津祝詞を奏上し救命謝恩の祝詞を終つて一行五人はもと來し道へ引返し、向日峠の山道指して辿り行く。

あゝ惟神靈幸倍坐世。

(大正一一・九・一四 舊七・二三 北村隆光録)

第二〇章 玉卜〔一九六一〕

建日の館の奥の間には主の建國別、妻の建能姫は差向ひとなつて、ヒソビソと

話に耽つてゐる。

建能姫「御主人様、今日は意外なお客さままでございましたが、あの黒姫様といふお方も随分御苦勞を遊ばした様で御座いますなア。どこともなしに面やつれをなさつてゐられた所を見れば、餘程息子さまの事に就て、お氣をもませられたと見えまするなア」

建國別「さうですなア、併し乍ら親と云ふものは有難いものです。私が若しや自分の子ではあるまいかとワザワザ寄つて下さつた其お志は、本當に清い美しい慈愛が籠つて居ります。私も兩親が此世に達者でゐられたならば、あの黒姫様の様な慈愛の心を以て、搜してゐらつしやるでせう。此れを思へば神様や親の恩が有難くて涙がこぼれます。あゝ私の兩親はどこに如何して御座るやら、私も兩親に會ひたい計りで、神様を信じ、今日は此様な結構な宣傳使に仕上げて頂きました。もしも私に歴乎とした兩親があり、幼少から親の膝元に育てられて居つたならば、安逸に流れて、到底結構な神様の道を開く事は出来ずまい。之を思へば兩親の行方が知れぬのも、却て私の身の幸福、神様の深き廣き思召で御座いませう」

建能姫「さうで御座いませう。神様は遠近廣狹大小明暗の區別なく、御見すかし遊ばしてゐられますから、御兩親の所在もキツと御分りになつて居るに違ひ御座いませぬ。され共何時の神懸りにも、兩親の所在をいくら尋ねても、口をつぐんで、一言半句の宣示もして下さらぬのは、要するに吾々夫婦を憐み玉ひ、立派な神司に仕立て上げてやらうとの、情の鞭で御座いませう。神様の御目より御覽になつて、モウあれは大丈夫だ、誠が貫徹したと思召したらキツと所在を知らして下さいませう。又何かの都合で、御兩親様を居乍ら、ここへ引よせて下さるかも知れませぬ。どうぞ取越苦勞をせない様にして下さいませ」

建國別「さうですなア。モウ兩親の事は今日限り思ひますまい。何程氣をいらつても、人間として如何する事も出来ませぬから、それよりも神様の爲、世人の爲に宣傳使たるの最善の努力を盡すのが何よりで御座いませう」

建能姫「あゝよく言つて下さいました。何事も今後は大神様の御心に任し、妾がこんな事申してはすみませぬが、御兩親様の事は、神様がよき様にお守り下さるでせうから思ひ切つて下さいませ。決して妾があなたの御兩親を袖に思つて申す

のでは御座いませぬ。あなたの幸福の爲、御兩親の爲に申上げるので御座いますから……」

建國別「私が何時も兩親の事を思うてむつかしい顔をしてみましたのを、貴女は餘程不快に思へたでせうなア」

建能姫「ハイ、別に不快には思ひませぬが、御主人様の御憂苦の色が何時とはなしに御顔に表はれますので、御體に障りはせないかと、夫れ計り心配を致しました。どうぞ只今限り、麗しいお顔を見せて下さいませや」

建國別「本當に心配をかけて濟みませなんだ。今日限り神様に任して、兩親の事は心配致しますまい。今後は只一言たりとも、悔み言は申しませぬから安心して下さい。言ひ納めに一口あなたに話したいのは、あの黒姫さまの詞尻、何とはなしに縁由ありげに感じましたが、貴女は如何御考へですか」

建能姫「ハイ妾も黒姫様は何か心に當る事がお有りなさる様に存じました。併し乍ら黒姫様は妾とは違ひ、お年を老つてゐられますから、世の中の酸いも甘いもよく御存じの筈、それ故今心當りがあると言つては、折角の修業が破れはせぬか

と、深い思召を以て仰有つて下さらなかつたのでせう。併し吾々夫婦の眞心が通りさへすれば、黒姫様も知らして下さるでせう。モウ一つ念を押してお尋ねしたいのは山々で御座いましたが、何を云つても神様に仕へる身の上のあなた様、神様の道を次にして、吾身勝手な兩親の事計りを熱心に尋ねると思はれては、第一主人の名折れ……と存じまして、控へて居りました。どうやら此世に御座るのに間違はない様に存じます」

建國別「あゝ貴女もそう感じられましたか、私もそうだらうと存じて居ります。何だか黒姫様にお目にかかつてから、心強くなつて來ました。確かな手掛りが出來たやうな心持が致します。併し建能姫殿、これ限り、モウ兩親の事は惟神に任して、申しますまい」

建能姫「有難う御座います、妾も安心致しました」

斯かる所へ虎公、玉公の兩人は三人の乾兒と共に、恐る恐る現はれ來り、襖の外より、

虎公「御主人様、大先生様、突然參りまして、偉い御馳走に預りました。これで

お暇を致します。又更めて御禮に参りますから、御夫婦共御壯健に御暮し下さいませ」

と云ふのは虎公の聲であつた。

建能姫は襖を靜かに開き、

建能姫「これはこれは武野の村の親分さま、サアどうぞ御遠慮なしに此方へ御通り下さいませ」

虎公「イヤどうも偉い御馳走になりました、餘り酩酊を致して居りますので、失禮で御座いますから、此處で御免を蒙りませう」

建國別「虎公さま、どうぞゆつくりして下さい。今日は私の祝日で御座いますから、十分に酔うて頂かねばなりません。餘りお早いぢや御座いませぬか。どうぞ

今晚はゆつくりとお泊り下さいまして、面白い話でも聞かせて下さいませ」

虎公「ハイ、御親切は有難う御座いますが、今ここに参つて居ります玉公の所持致して居る、日の出神様から賜はつたと云ふ水晶玉に變異が現はれまして、どうも氣がかりでなりません。玉に映つた曇りより判断して見ますれば、私の不在

宅たくに、何なんだか變かはつた事ことが出來できたやうで御座ございますから、私わたくしも何なんだか氣きがイライラしてなりませぬから、今日けふはこれでお暇いとまを致いたします」

建國別たけくにわけ「それは御心配ごしんぱいで御座ございます。コレ玉公たまこう、大たいした事は御座ございます。ア」

玉公たまこう「ハイ、私わたくしの經驗けいけんに依よれば、親分おやぶんの宅うちに大變たいへんな事ことが起おこつてゐる樣やうに感かんじます。併しかし乍ながら結局けつぎよくは何なんともないと云いふ象かたちが表あらはれて居をりますが、グツグツして居をつては、事件じけんが益々ますます大おほきく、むつかしくなる虞おそれが御座ございますから、是これで御暇おいとまを致いたしま

す」
建國別たけくにわけ「そう仰有おつしやれば是非ぜひは御座ございます。お留守宅るすたくに何事なにことも無ない樣やうに、是これから吾々夫婦われわれふうふが、神前しんぜんに御祈願ごきぐわんを致いたしておきますから、安心あんしんして御歸り下くださいませ」

虎公とらこう「ハイ有難ありがたう御座ございます」
と涙なみだを流ながし乍ながら、再拜さいはいして一同いちどうも共ともに此場このばを立去たちさり、イソイソと出いでて行ゆく。

虎公とらこうの一行いっかうは表門おもてもん迄までやつて來きた。門番もんばんの幾公いくこうは祝酒いはひざけに醉よひつづね、まはらぬ舌したにて、

幾公いくこう「オイ虎公とらこうの親分おやぶん、チツと早いはやぢやないか。モツとゆつくり俺おいらと一杯いっぱいやらうぢやないか。何程なにほど急いそいだとて、日ひの暮くれる時ときにやヤツパリ暮くれるのだからなア」

虎公とらこう「ウン有難ありがたう。併しかし今日けふは何なんとはなしに、胸騒むなさわぎがしてならぬから、一先ひとまづ歸かへる事ことにする、又更またあらためて遊あそびに來くるワ。貴様きさまも御主人ごしゆじん様に、一日いちにちのお暇ひまを頂いただいて遊あそびに來こい、酒さけは幾いくらでも用意よういがしてあるからな」

幾公いくこう「イクともイクとも、イク度たびとなくイクぞよ。モウお前まへの様な酒さけ喰くらひは懲こり懲こりだ……などとイク地ぢのない事ことを云いはぬ様に頼たのむぞよ」

虎公とらこう「アハ、ハ、ハ、瘦やせてもこけても、武野村たけのむらの虎公とらこうだ。貴様きさまが幾いくら酒さけを飲のんだつて、そんな事ことに尾をを卷まくやうな、吝けちくせえ兄貴あにきぢやねえワ」

幾公いくこう「それでも今親分いまおやぶん、胸騒むなさわぎがすると云いつたぢやないか。餘あまりガブガブと酒さけを飲のまれると、胸むねさわぎするからなア。俺おいらも何なんだかハートに動悸どうきが打うちやがつて、胸騒むなさわぎがして仕様しやうがないワ」

虎公とらこう「アハ、ハ、ハ、そりや貴様きさまは意地汚いぢきたなく、無理むりに酒さけを喰くらふから、動悸どうきがうつのだ。いゝ加減かげんに心得こころえて、酒さけを吞のむのはよいが、酒さけに吞のまれぬ様にしたがよからうぞ」

幾公いくこう「ヤツパリ吝けちくさい事を言いふ親分おやぶんだなア。オイ親分おやぶん一寸待まちて、ここに一升徳いっしょうどく

利くりが盗ぬすんで來きてあるワ。是これでもグツと一口吞ひとくちのんで歸かへつて呉くれ」

虎公とらこう「ヤア其奴そいつア有難ありがたい、この儘預ままあづかつて行く」

と云いひ乍ながら、幾公いくこうの手てより一升徳利いっしょうどくりを引ひつたくり、

虎公とらこう「玉公たまこう、來きたれ！」

と尻端折しりはしをつて、門前もんぜんの小徑こみちを一生懸命いっしょうけんめい驅出かけだした。

虎公とらこうは走はしり乍ながら足拍子あしびやうしを取とつて唄うたひ出だした。

虎公とらこう「ウントコドツコイドツコイシヨ 建國別たけくにわけの御館おやかたで

一周年いっしゅうねんの祝宴しゅくえんに ドツサリよばれてウントコシヨ

ドツコイドツコイづぶ六ろくに 酔ようて了しまつた虎公とらこうが

其足竝そのあしなみは千鳥足ちどりあし そこらの道みちが二筋も

三筋も四筋も見みえて來きた 玉公たまこうの顔かほまで色々いろと

細ほそくなつたりドツコイシヨ 丸まるくなつたり三みつつ四よつ

同じ顔が並び出す どうしてこんなウントコシヨ

怪體な事になつただる 玉公が持つてる水晶の

玉のト筮伺へば 何だか知らぬが俺の宅

變つた事が出来てゐる ドツコイドツコイ皆の奴

足元用心するがよい 大方宅のお愛奴が

俺が出たのをドツコイシヨ 女の小さい心から

外に女子があるやうに 思ひひがめて九寸五分

スラリと抜いて喉元へ あてて居るのぢやあるまいか

何とはなしに氣にかかる ウントコドツコイ危ないぞ

こらこら玉公シツカリせい そこら邊りが石車

宅のお嬢は生れつき 世間の女と事變はり

よつ程氣丈な奴だから めつたな事はあるまいと

心は許して居るものの 天地の事は何もかも

鏡の様によく映る 水晶玉の暗點が

ウントコドツコイき氣になつて 胸むねの警鐘けいしようなりひびく

此こいつ奴ア ヤツパリ尋常ただごと事で ウントコドツコイあるまいぞ

一時いちじも早くはや吾家わがいえに 飛鳥ひてうの如ごとくかけ歸りかへ

實否じつびを探さぐらにやならうまい ウントコドツコイ又また迂すべる

ホあぶンに危あぶない坂路さかみちだ 俺おれに翼つばさがあつたなら

宙空ちうくう翔かけつて一ひと走り 家うちの様やう子は忽たちまちに

手てに取とる如ごとく知しれるだろ なぜからすに烏からすにドツコイシヨ

俺おれは生うまれて來こなんだか 今いまとなつてはおほぞら大空おほぞらを

自由じいうじざい自在じざいに翔かけり行ゆく 烏からすの奴やつが羨うらやましい

ウントコドツコイ又また迂すべる 皆みなの奴やつ共やつども氣きをつけよ

オたまイオたまイ玉たま公こう水すい晶じやうの 其その寶ほう玉ぎよくを大たい切せつに

ギにぎユにぎツと握にぎつておとすなよ お前まへの家うちの寶物たからもの

ウントコドツコイ ドツコイシヨ 神かみが表おもてに現あらはれて

善ぜんと惡あくとを立たて別わける 虎公とらこう吾家わがやに現あらはれて

善^{ぜん}か悪^{あく}かを考^{かんが}へて　　ウントコドツコイ其^{その}上^{うへ}で
何^{なん}とか思^し案^{あん}をせにやならぬ　　お愛^{あい}の奴^{やつ}は今^{いま}頃^{ごろ}は
俺^{おれ}の歸^{かへ}るを缺^{あく}伸^{しん}して　　待^まつて居^ゐるかも分^{わか}らない
何^{なに}が何^{なん}だかウントコシヨ　　サツパリ譯^{わけ}が分^{わか}らない
お愛^{あい}の奴^{やつ}が悋^{りん}氣^きして　　刃^は物^{もの}三^{さん}昧^{まい}ウントコシヨ
やつて居^ゐるのぢやあるまいか　　イヤイヤ　ヤツパリさうぢやない
大^を蛇^{ろち}の三^{さん}公^{こう}がやつて來^きて　　俺^{おい}らの不^ふ在^{ざい}をつ^つけ込^こんで
無^む體^{たい}の戀^{れん}慕^ぼをウントコシヨ　　遂^す行^かせむとつめ寄^よつて
お愛^{あい}を困^{こま}らせ居^ゐるのだろ　　そん^{こと}な事^{こと}でもあつたなら
お愛^{あい}の奴^{やつ}はウントコシヨ　　負^まぬ氣^き強^{つよ}い女^{をんな}故^{ゆゑ}
中^{なか}々^{なか}ウンとは申^{まを}すまい　　揚^あ句^{げく}の果^はは雙^{さう}方^{ほう}から
切^きりつ　　はつりつウントコシヨ　　血^ちの雨^{あめ}降^ふらすに違^{ちが}ひない
之^{これ}を思^{おも}へば一^い時^{とき}も　　早^{はや}く吾^{わが}家^やへ歸^{かへ}りたい
今^け日^ふに限^{かぎ}つて此^{この}道^{みち}は　　ウントコドツコイ是^{これ}程^{ほど}に

際限もなく延びよつて いつもの道より遠くなる

やうな心地がしてならぬ ホンに氣のせく事ぢやワイ

ウントコシヨウ ドッコイシヨ 三五教の神様よ

私の不在の家の内 どうぞ何事も無い様に

お守りなさつて下さんせ 假令三公が来る共

お愛の體にドッコイシヨ 指一本も觸へぬよに

どうぞ守つて下さんせ 武野の村の男達

虎公サンと名を賣つた 男の顔に泥が付く

これが第一ウントコシヨ 私は辛うてたまらない

男と男の意地づくで 命の取合するとても

決して厭ひはいたさない 男の顔に泥ぬられ

ウントコシヨウ ウントコシヨウ 萬劫未代拭はれぬ

恥をのこすがわしやつらい あゝ惟神々々

御靈幸はひましませよ

と足拍子を取り乍ら、急坂を上り下りつ、玉公外三人の乾兒と共に、息をはづませ歸り行く。

(大正一一・九・一四 舊七・二三 松村眞澄録)

第二章 神護(九六二)

虎公は、玉公、新公、久公、八公の一行と共に火の國街道に漸く立ち現はれた。此處は檜の木の大木が太陽の光線を包んで遮つて居る、天然椅子の岩のある場所で、黒姫が手長猿に悩まされた處であつた。大蛇の三公の乾兒六公は數十人の手下を引き連れ、檜の木の下に虎公の行方を求めつつ待つて居た。

虎公は道々歌を謠ひながら何氣なくここ迄來て見れば、喧譁装束で身をかためた六公の一行、棍棒匕首を携へながら谷道に立ち塞がり、六公「オイ、虎の野郎、昨日から貴様の所在を探して居たのだ。高山峠の絶頂に

行きよつたと確に知つた故、後追ひかけて往つてみれば貴様は早くも風を喰つて、卑怯未練にも姿を隠しやがつた。俺は歸つて親分に申譯が無いから、大方貴様が建日の館へ行きよつたのだと思つて此山口に待つて居たのだ。サアこうなつては最早叶ふまい。ここで綺麗薩張と、お愛の縁を切り、親分さまの女房に奉る、と約束を致せばよし、四の五の吐して聞かないと、胴と首とを二つにしてやるがどうだ。性念を据ゑて確り返答をせい。何程貴様が焦つたところで、お愛は最早親分の手に入つて居るのだから駄目だぞ。それより柔しく三公の乾兒になつたらどうだ。命を取られるが好いか、乾兒になるのが好いか、二つに一つの返答をしる。虎公「鳥のおどしのやうな態をしやがつて、身の程知らずの蠅蟲め。何劫託を吐きやがるのだ。貴様こそ首と胴とを二つにしてやらア、覺悟せい」

玉公「これこれ虎公さま、大事の前の小事だから、今怒つてはいけません。これ見なさい。だんだん水晶玉が曇つて來ました」

虎公「ヤアもう斯うなつては破れかぶれた。男の意地でどこ迄もやれるだけやつて見にや蟲が納まらねえや。玉公、貴様は俺が今暴れ放題暴れて見るから足手纏

ひになつては俺の活動の邪魔になる。オイ、新公、久公、八公も共にどつかへ逃げて了へ

と云ひながら、虎公は其處に落ちてあつた一間許りの節だらけの、雨に曝された木片を拾ふより早く、四五十人の群に向つて振り廻しつづ暴れ込んだ。六公は此元氣に肝を潰し散々ばらばらとなつて逃げ失せて仕舞つた。

虎公「アハ、ハ、ハ、何と弱い奴計り寄つたものだなあ。大蛇の三公もこれだけ穀潰しを抱へて居ては大抵ぢやあるまい。オイ玉公、新、久、八、もう大丈夫だ、出て来い」

この聲に四人は顔一面蜘蛛の巣だらけになつて、眞青の顔をしながら足もわなわな虎公の傍に寄つて来た。

新公「何と虎公さま、偉い馬力が出たものだなあ」

虎公「今日に限つて何故あれ程肝玉が据わり、力が出たのだらう。自分ながらに

合點がゆかないのだ」

玉公「俺が木の茂みへ隠れて見て居たら、お前と同じ姿をした荒武者が七八十人

どこからともなく現はれて、大きな材木を振り廻したものだから、六の野郎を初め、どいつもこいつもあの通り悲惨な態で逃げよつたのだ。本當に合點のゆかぬ不思議の事だつた」

虎公はこれを聞いて涙を流し大地に端坐し、拍手を打ち天津祝詞を奏上し終り、虎公「神素盞鳴大神様、よくもお助け下さいました、有難う御座います。就きましては此様子では、お愛の身の上案じられてなりませぬから、どうぞも一度、私をお助け下さいましたやうに、お愛の身の上をお助け下さいませ。お願い申し上げます」

と感謝の涙ハラハラと、大地に頭を下げ祈つて居る。虎公は、玉公其他の乾兒と共に又もや坂道を足拍子を取り、謠ひながら吾家の方をさして走り出した。

「あゝ惟神々々 神が表に現はれて

善と惡とを立別ける 朝な夕なに大神の

御前みまへに額ぬかづき村肝むらぎもの心こころを盡つくし身みを盡つくし

仕つかへまつりし甲斐かひありて大蛇をろちの三公さんこうが乾兒こぶんなる

六公ろくこうの手下てしたにウントコシヨ取り圍かこまれし其時そのときに

仁慈じんじ無限むげんの瑞御靈みづみたま神素盞鳴大神かむすさのをのおほかみが

嚴いづのみたまをわけたまひ數多あまたの神かみを現あらはして

たつた一人ひとりの虎公とらこうに加勢かせいをさして下くださつた

實げに有あり難がたき神かみの恩おん三五あななひけう教よは世すくを救すくふ

誠まこと一つの神かみの道みち今更いまさらのごとドツコイシヨ

尊たふとくなつて参まゐりましたかく神德しんとくの現あらはれた

ウントコドツコイ其上そのうへは假令たとへ大蛇をろちの三公さんこうが

虎公とらこうさまの留守宅るすたくへ數多あまたの手下てしたを引ひきつれて

如何いかに嚴きびしく攻せむるとも決けつして恐おそるる事ことはない

利きかぬ氣者きものの女房にようぼうが嘸さぞ今頃いまころは素盞鳴すさのをの

神かみの命みことの神德しんとくで寄せ來よる敵てきを悉ことごとく

嵐あらしに花はなの散ちる如ごとく
ウントコドツコイ追おひ散ちらし

勝鬨かちどきあげて虎公とらこうが
ウントコドツコイ機嫌きげんよく

歸かへつて來くるのを待まつために
お酒さけの爛かんをばドツコイシヨ

用意ようい致いたしてウントコシヨ
待まつて居ゐるのに違ちがひない

朝日あさひは照てるとも曇くもるとも
月つきは盈みつとも虧かくるとも

假令たとへ大地だいちは沈しづむとも
誠まこと一つの三五あななひの

神かみの教をしへに身みを任まかせ
朝あさな夕ゆふなに眞心まごころを

盡つくして此世このよを渡わたるなら
勢いきほひ猛だけき獅子しし熊くまも

虎狼とらおほかみも何なんのその
況ましてや大蛇をろちの三公さんこうや

手て下したの弱よわい面々めんめんが
假令たとへ幾いく百ひゃく來きたるとも

片かたつ端ぱしから蹶けり散ちらし
改心かいしんさせるは目まのあたり

あゝ惟かむながら神々かむながら
御靈みたま幸さちはひましまして

三五あななひ教けつの御道おんみちを
此世このよの惡魔あくまと謠うたはれし

大蛇をろちの三公さんこう初はじめとし
其外そのほか手て下したの者もの共どもの

心を照らして惟神

誠の道に救ひませ

一重に願ひ奉る

ウントコドツコイ ドツコイシヨ

それにつけても黒姫や

房芳二人は今頃は

無事に都へドツコイシヨ

着いたであらうかうントコセ

俄にそれが氣にかかる

あゝ惟神々々

國魂神の純世姫

月照彦の神様よ

どうぞ三人が行末を

安く守らせたまへかし

ウントコドツコイ虎公は

是から吾家へ立ち歸り

家の騒動を片づけて

火の國都へ立ち向ひ

黒姫さまの後追うて

尊き神の御教を

聞かして貰はうドツコイシヨ

それが何より楽しみだ

ウントコドツコイ ドツコイシヨ こいつはしまつた何時の間に

道取り違ひドツコイシヨ

向日峠の谷道に

思はず知らず迷ひ込んだ

これやマアどうした事だらう

其處そこは危あぶない丸木橋まるきばし

渡わたるにや怖こわし渡わたらねば

どしても吾家わがやにや歸かへれない

ここから後あとへ引ひき返かへし

元來もとときし道みちを取とるならば

吾家わがやへ歸かへるは易やすけれど

そんな事ことをばして居ゐたら

時じ間かんが遅おくれて仕し様やうがない

向日むかふたうげ峠たうげを踏ふみ越こえて

吾家わがやをさして歸かへる方ほが

半時はんときばかり早はやからう

あゝ惟かむな神がら々々かむな

これも何なにかのお仕組しくみで

此處ここへ迷まようて來きたのだらう

唯何事ただなにことも人ひとの世よは

直日なほひに見直みなほし聞きき直なほし

身みの過あやまちは宣のり直なほせ

三五あななひけう教おんをしへの御教

今更いまさら思おもひ知しられける

廣大くわうだい無限むげんの神かみ様さまの

深ふかき智ち慧ゑには叶かなはない

心こころ拗ねぢけた吾々われわれが

どうして尊たふとい天地あめつちの

神かみの心こころが分わからうか

神かみのまにまに任まかすより

外そとに行ゆくべき道みちはない

何程なにほど危あやふき橋はしぢやとて

ウントコドツコイ躑ちうちよ躑ちよする

暇いとまがどうしてあるものか

地獄ぢごくの釜かまのドッコイシヨ

一足いっそくと飛びをするやうな

荒肝あらぎもほ放り出しウントコシヨ

渡わたつて見みようか玉公たまこうよ

新しん、久きつ、八はちの三人さんにんよ

この虎公とらこうに續つづけよや

一ひい二ふう三みつみと言いひながら

矢やを射いる如ごとく丸木橋まるきばし

兩手りやうてを擴ひろげ身みを輕かるめ

一いち目散もくさんに渡わたり行ゆく

かかるところところへ向むかふより

黒姫司くろひめつかさを初はじめとし

妻つまのお愛あいやお梅うめ迄まで

二人ふたりの男をとこに送おくられて

森もりの茂しげみを押おしわけて

現あらはれ來きたる訝いぶかしさ

あゝ惟かむながらかむながら神々かむながら

御靈幸みたまさちはへましませよ。

(大正一一・九・一四 舊七・二三 加藤明子録)

第二章 蛙の口〔九六三〕

矢方の村の大蛇の三公が館には、何となく物騒がしき聲が聞えて居る。夜前の一件に就て、三公は兄弟分や乾兒に對し慰勞會を催して居たのであつた。數多の

乾兒は久し振りにうまい酒に酔うて、口々に四邊構はず喋り出した。

甲「オイ、皆の奴、何と甘え酒で無えか。俺ア今日で丁度二ヶ月ばかり斯んな甘

え酒を飲んだ事はないわ。時々斯んな事があれば宜えけどな」

乙「こりや、徳、貴様はこんな水臭い酒を甘えと吐しやがったが、餘程下司口だ

な。こんな酒を飲む位なら泥水でも飲んだ方が、何程氣持がいいか分りやしない

よ」

徳は泣聲になつて、

徳公「こりや、高公、貴様は何と云ふ勿體無え事を言ふのだ。それ程悪い酒なら

何故ガブガブと飲んだのだい」

高公「あまり此處の親分が無茶な事をしやがるので癢に觸つて仕方がないから、

焼糞になつて一杯飲んでやつたのだ。酒なつと飲まねばお愛の幽霊が何時出て來るか分つたものぢやないわ、小氣味が悪い。それだから味なくもない嫌ひ……で

も無い酒を辛抱して飲んでやるのだ」

徳公「勿體ない事を言ふな。こんな結構な酒があるものか。貴様今幽霊が出ると吐しやがつたが、生た人間は幽霊になつて堪るか」

高公「それだといつて、お愛を現在殺したぢやないか。さうして二人の男を縛つて生理にしたぢやないか。どんな強い男だつて土中に埋められ、あんな重たい石を載せられちや往生せずには居られないわ。屹度今夜あたり貴様の素首を引つこ抜きに來るから用心せいよ」

徳公「馬鹿云ふな。そこには底があり蓋もあるのだ。お愛の奴ア決して死んでは居やせぬ。彼奴ずるいから死眞似をして居やがつたのだ。親分が「ちやん」と其呼吸を計つて死んだにして了つたのだ。外の二人の奴だつて其通り疵一つした奴はない、兼公の野郎でも只縛りあげた丈の事だ。彼奴等三人を一所にまつべて置いたのは互の温味を保たす爲めだ。そして頭の處に細い穴をあけ、息の通ふ様に

してあるのだよ。そこは與三公哥兄が呑み込んで、如才なくしてあるのだよ。お前は端くれの人足だからそこ迄は分るめえ」

高公「それでも、あれ丈け重たい石を澤山載せられちゃ、身體も何も潰げて了ふぢやないか」

徳公「貴様は馬鹿だな。あれ丈け親分が戀慕して居るお愛を、さうムザムザと殺しさうな筈があるかい。之には深い計略があるのだ。あの澤山に積んだ岩の下には、三人は決して埋つてあるのぢやない。うまく其上が外してあるのだ」

高公「何で又そんな妙な事をしたのだい」

徳公「馬鹿だなア、貴様等には親分の神謀鬼策は分るものぢやない。祕密を守るなら云つて聞かせてやらう。如何だ他言はせぬか」

高公「決して決して誰にも云はないから、俺に其譯を聞かして呉れえ」

徳公「やあ何奴も此奴も酒に喰ひ酔うて寝りよつたな。與三公の哥兄迄ズブ六に酔うて居らあ。そんなら云つてやらう。抑も其理由は斯うだ。此徳公はな、遠國

から來たものだからまだ虎公やお愛に顔を見られて居らないのだ。それを幸に親

分ぶんから頼たのまれたのだ。之これから旅人たびびとの装束しやうぞくをして道みちに迷まようた様な顔かほをし、昨夕ゆうべの喧けん譁わ場ばへやつて行いつて土つちをクワイクワイと掘ほり上げ、三人さんにんの奴やつを引張ひり出し先まず一番いちばんにお愛あいの縛いましめを解とき親切しんせつさうに水みづでも飲のまし、懐中ふところから薬くすりでも出だして與あたへてやり…
…何處どこのお方かたか知しりませぬが危あやふい事ことで御座ございました、ネ、わつちや旅たびの者ものでげえすが、夜前やぜん此邊このあたりに大喧譁おほげんくわがあつたと聞きき、一寸ちよつと道寄みちよりをして探さがして見みた處ところ、御存ごぞんじの通とほり此處このこに此様このやうな大おほきな石いしが積つんである。見みれば土つちは新あたしい、何どうやら昨夜さくやの喧譁けんくわで何人なにびとかが殺ころされ、埋いけられて居ゐるのであらう。あゝ氣きの毒どくな、何なんとかして助たすけてやらうと思おもひやして、之これ御覽ごらんなされ、此通このとほり大おほきな石いしを此處このこに積つみ上げ土つちを搔かき分わけて見みれば、貴方あなた等がたさん三人にんの御遭難ごさうなん、此奴こいつア一ひとつ助たすけねばなるまいと、秘藏ひざうの薬くすりを與あたへ水みづを飲のませた處ところが、お前まへは此通このとほり生いき還かへつて、何なんと斯こんな嬉うれしい事ことは御座ございませぬ…と一ひとつかち込こむのだ。さうするとお愛あいの奴やつ、優やさしい目めをしやがつて…妾わたしは虎公とらこうと云いふ男をとこの女房にようぼうで御座ございますが、大蛇をろちの三公さんこうと云いふ大親分おほおやぶんの爲ために斯こんな目めに會あはされ、土つちの中なかに埋うめられて死しんで了しまふ處ところで御座ございましたが、お前まへのお蔭かげで可あたらい生命いのちを助たすかり斯こんな嬉うれしい事ことは御座ございませぬ、生命いのちの親おやの

旅人様、何卒妾を何時迄も可愛がつて下さいませ、虎公が何程偉いと云つても、女房がこれ丈け偉い目に合うて居るのに、夢にも御存じないとはあまり情ない男だ。何卒旅の御方、妾の力になつて下さい：：：へん：：：なんて吐しやがるのだ。さアそうなれば占めたものだよ。そこで俺が：：：これこれお女中、お禮は却て痛み入る。世の中は相見互だ：：：とかますのだ。さうするとお愛の奴は俺の男前と氣前に「ぞつこん」惚込みやがつて、俺が右へ向けと云へばハイと言つて右を向き、左へ向けと云へばハイと云つて左へ向くなり、死ねと云へばハイと云つて死ぬし、肩を打てと云へば肩を打つし、随分もてたものだよ。オホ、々、々」

高公「オイ徳、涎が落ちるぞ。見つとも無い。捕ぬ狸の皮算用しても駄目だぞ」

徳公「何、大丈夫だ。チャーンと確信があるのだから滅多に外れつこは無いわ」

高公「さうして其お愛を手に入れて貴様の者にするのか。大親分に返上するのなら

うな

徳公「そこは、うまく徳公の辨舌でチヨロまかし、或山奥へ手に手を取つて忍び入り、一寸した小屋を結んで：：：お前と妾と添ふならば、竹の柱に萱の屋根、虎

狼おほかみの棲處すみかでも決して厭いとひはせぬ程ほどに、コレ徳とくさま、何卒どうぞわたし妾いづを何れの山奥やまおくなりと連つれて往いつて下ください。虎公とらこうや大蛇をろちの三公さんこうにでも見付みけられたら大變たいへんだから……と向むか方うから急せきたてられるのだ。そこで態わざと此徳公このとくこうは落おちつき拂はらひ……これお愛あい、天てん下無雙かむさうの英雄豪傑えいゆうがうけつ、此徳公このとくこうが居ゐる間あひだは虎公とらこうの千匹せんびきや萬匹まんびき、又大蛇またをろちの三公さんこうがどんなに不足相ふそくさうに云いつて來きても大丈夫だいぢやうぶだ……と太ふとう出でてやるのだ。さうするとお愛あいの奴やつ……否いやいや何程なにほどお前まへが強つようても、欺だますに手てなしと云いふ事ことが御座ござんす。さあ一時いちじも早はやく妾わたしを奥山おくやまへ連つれていつて下ください……とお出いで遊あそばすにチヤンと定きまつてるのだ。そこで此徳公このとくこうが……エー仕方しかたがない、女子ぢよしと小人せうにんは養やしなひ難がたいだ、然しかしお前まへがそれ程怖ほどこわがるのなら俺おれが一つ山奥やまおく迄送おくつてやらう。然しかし決して夫婦ふうふにならう等などの野やし心んを起おこしちや可いけないぞ……と高尚かうしやうに出でるのだ。さうするとお愛あいの奴やつ、益々ますます感心かんしんしやがつて、終しまひの果はてにや本氣ほんきになつて惚ほれて來きやがるのだ。その時とき甘あまい顔かほしちや可いけない。ピンと一つ肱鐵砲ひざてつぱうを喰かますのだ。……思おもひきつて……さうするとお愛あいの奴やつ益々ますます戀慕心れんぼしんが募つつて來くる。彈はじかれた女をんなには益々ますます男をとこが熱心ねつしんになる様やうに、女をんなの意地いぢを立てておかねばならないと妙めうな處ところに力ちからを入れて、俺おれを手込てごみにしよう

するのだ。そこで俺はツンと澄ました顔して……これこれ女の身としてあられもない事をなさいますな。みつともない……と喰はすのだ。お愛の奴益々カツ力となり……（サワリ）ほんにまあ女の心と男とは、夫ほど迄に違ふものかいな。生命の親と思ひつめ、ホんに氣の利いた男ぢやと、思ひ初めたが病みつきで、戀の虜となりました。もう斯うなる上は徳公さま、焚いて喰はうと煎つて炙つて喰はうとも、貴方のお好きに紫壇竿、一筋縄で行かぬ此女、何卒三筋の絲で引き殺して下しやんせ、拜むわいなと手を合し、口説き嘆けば徳公も、轟く胸をジツと抑へ、お前の心は察すれども、此徳公にも國許には可愛い女房がある。如何して二度目の妻が持たれようか。そこ放しや……プリンと背中を向けるのだ。さうするとお愛の奴……：：：そんならもう仕方がない、妾は之で死にます……と九寸五分をスラリと引き抜き、アハヤ喉につき立てむとする。徳公慌しく引き止め……：：：やれ待てお愛、お前の心底見届けた。此世は愚か七生迄も誠の夫婦……：：：と喰すと宜いのだが、其處はそれ、大蛇の三公と云ふ大親分が後に控へて居るのだから、お愛を山奥の一つ家に連れ行き……：：：これお愛どの、一寸此徳公は買物にいつて来るから、淋し

からうが留守をして下さい。直に歸つて来るから……と喰まして置いてフイと其處を外すのだ。さうすると大蛇の親分が、與三公、勘公等の面々を引き連れ、其小屋を十重二十重に取り巻かせ置き、自分が否應云はさず責め立てるのだ。何程嫌がった女でも、一邊ウンと云はすれば、もう此方の者だ。チャンと斯んな段取が出来て居るのだから驚いたものだらう。俺の責任も重且大なりと云ふべしだ』
と云ひ乍ら、一升徳利の口から又もや喇叭飲みを初める。與三公は此場に行歩躡躑として現はれ來り、
與三『やあ何奴も此奴も意地汚く酒に酔ひ潰れて寝て居やがるな。何だ、そこら中に八百屋を開店しやがつて臭くて居られたものぢやない。ヤアお前は徳公じやないか』
徳公『へい、徳利で御座います。【トク】とお改め下さいませ。徳公の徳利飲みでげえすから何卒【トク】心の行くところ迄飲まして下さい。お愛に又【トク】りと納【トク】をさせねばなりません。【トク】命全權公使だから【トク】に大目に見て下さいませ』

與三「そんな事で【トク】別の使命が勤まると思ふか。もう時刻だ。【トク】トク行かねばなるまいぞ。貴様は酒癖が悪いから【トク】りと心中するかも知れやしない。【トク】りと考へて見よ」

徳公「八釜しう云ふない。俺だけは【トク】別待遇をやつて呉れ。斯んな役に行くのは俺ら一寸氣が進まないのではないけれどな、本當の事を言へば哥兄、お前が【トク】派される處だつたが、生憎【トク】（禿）頭病の様な頭をして居るから、お愛の奴によく顔を知られて居るなり、又其様な土瓶章魚禿ではお愛だつて釣れはしないし、如何しても此徳公ぢやなくちや勤まらないのだから、【トク】別大切にするのだよ」

與三「エ、俺の頭の批評までしやがつて仕方の無え奴だ。貴様は如何やら秘密を此高公に打あけた様だ。よもやそんな事あ致しちや居るまいなア」

徳公「高が知れた高公位に言つた處で、ナニそれが邪魔になりますけエ。高を括つて云つたのだからそう聲高にケンケン云つて下さるな。相互に迷惑だからエ、ガラガラガラ、エ、酒の奴、あと戻りをしやがる。怪しからぬ奴だ、ウンウンウ

ン

與三「いい加減に準備をして行かないと遅くなるぞ」

徳公「八釜しう云ふない。死んだつて何だい。お愛が俺の女房になると云ふでは

なし、折角骨を折つて成功させた處が鹿猪つきて獵狗煮らると云ふ様な目に會ふ

かも知れないからな。まあ酒の飲まれる時に飲んだ方が餘程利口だなア。自分の

思ふ様にするのが人間と生れた身の一生の徳利だ。オツハツ、

斯く管を巻く處へ門前俄に騒がしき人の足音……其處へ勘公がやつて来て、

勘公「オイ皆の奴、宜い加減に起きぬか。今六公が歸つて来たから席をあけねば

なるまい」

此聲に一同はムクムクと頭を上げ、ヒヨロヒヨロし乍ら裏の田圃へ驅出し、風

に酒の酔を醒まして居る。

(大正一一・九・一四 舊七・二三 北村隆光録)

第二三章 動靜（九六四）

六公の一部分が歸つて來たと聞いて、大蛇の三公は、六公を祕かに吾居間に通した。そこには與三公、勘公の兩人が兩脇に控へてゐる。

三公「オイ六、甘く往つたらうなア」

六は頭を一寸かき、首を三つ四つ振り乍ら、

「へー、夫れは夫れは何で御座います。筑紫ヶ嶽の高山峠の頂上に参りました所、五人の奴は、忽ち雲を霞と逃げ散つて、行方知らずとなりにけり……と云ふ爲體でござえやした。誠に以て大勝利を得ましてござえやすから、どうぞ御安心下さいませ」

三公「随分骨が折れただらうな」

六公「イーエ、どうしてどうして、滅相も御座いませぬ。大親分の御威勢と云ふものは、大したものので御座いますワ。吾々一同が高山峠へ行つてみると、虎公の奴、吾々の匂ひを嗅いで、雲を霞と逃げ去り、猫の子一匹居らぬやうになつて了

ひました」

與三「オイ六公、虎公は逃げたのぢやあるまい。居らなかつたのぢやないか」

六公「そらさうだ。逃げたから居らないのだ。居らないから、逃げたと云ふのだ」

與三「貴様、今迄何をして居たのだ」

六公「俺は、大親分の命令に依つて、虎公一統の所在を探ねむと、夜を日に繼い

で、筑紫ヶ嶽に向つて、汗をタラタラ流し乍ら、崎嶇たる山路を、ウントコドツ

コイ、ヤットコマカセと登つて見れば、レコード破りの大暴風雨、岩石は中天に

舞ひ上り、凄じい音をして、ドサン、バタンと所構はず降つて来る、大木は惜氣

もなく、根元から吹倒される、木の股は裂ける、礫の雨は降る、夫れは夫れは開

關以來の大騒動だつた。其中を泰然自若として行進を續けたのは、此六公の一行

だ。六公も偉いが、親分の威勢も大したものだよ。生れてからあの位壯快な目に

會つた事はねえワ。虎公の野郎、此烈風に吹かれて、どつかの谷底へ、ズデンドー

と落込んでくれたばかりやがつたに違ひないと、千尾千谷隈なく捜し求むれど、狼に

食はれて了つたか、虎にいかれたか、影も形もなくなりけり。ハテ不思議と、

山頂さんちやうに佇たたくみ、雙手もろてを組くみ、思案しあんをして見みれど、根ねつから、良よい思案しあんも浮うかんで来こず、止やむを得えずオーイオーイと味方みかたを呼よび集あつめ、一旦いったん高山たかやまたうげの絶頂ぜつちやうで人員じんあん調査てうさを、一いち二三にさん…とやつた上うへ、石塊いしころだらけの峻坂しゅんぱんを、エンヤラヤアと驅降かけくだり、櫛かしの木きの森もりに一い同集どうあつまり、大方おほかた虎公とらこうの奴やつ、三五あななひけう教しんじやの信者しんじやだから、建日たけひの館やかたへ行ゆきよつたに違ちがひなからう、これにより一隊いったいを引ひつれ、華々はなばなしく館やかたにかけ向むかひ、一戰いっせんを試こころみ、一ひと泡あわふかしてくれむかと許ばかり思おもつたが、イヤ待まて暫しばし、軽々かるがるしく進すすんでは、却かへつて戦たたかひ利りあらずと、あせる胸むねをグツと押おさへ、手具てぐすね脛ひ曳ひいて待まつ所ところへ、虎公とらこうの奴やつ、神かみならぬ身の知しる由よしもなく、又またツクリと此場このばに現あらはれ来きたりけり…だ

三公さんこう「それから如何どうしたと云いふのだ。早はやく後あとを云いはねえか」

六公ろくこう「言いはぬが花はなと云いふ事が御座ございますから、モウこころで打切うちきりにさして頂いたきませうか、六公ろくこうが六ろくでもない事ことをしよつたと云いつて、御立腹ごりつぶくなせえましては、雙方さうの氣きが悪わるうなりますから、何れいづ六ろくのやつた事ことに六ろくな事ことは御座ございますせぬワイ」

三公さんこう「オイ六ろく、シツカリせぬか。貴様きさまの云いふ事ことは支離滅裂しりめつれつ、前後矛盾ぜんごむじゆん、何なにが何なんだか譯わけが分わからぬだないか」

六公「へ、すべて物事は分らぬ所に價値が御座いますので……」

三公「ナニ、分らぬ所で、勝を得たと云ふのか。虎公は如何なつたのだ」

六公「トラ一寸分りかねますなア。何れ何とかなつて居るでせう。そこ迄詳しう查べる餘裕がなかつたので……無念乍らも、殘黨を引集め、やみやみ立歸つて候

……と云ふ様な事でござえす」

三公は面をふくらし、

三公「エ、何奴も此奴も碌な奴アないワイ。オイ與三公、勘公、六をトツクリ査べて、委細を俺に報告してくれ。俺はこれから、徳に一寸用があるから……」

と云ひすて、此場を立つて今酒宴の開かれてゐた廣い座敷へ進み行つた。

徳、高の二人は差向ひになつて、相變らず管を巻き乍ら、何事が囁いて居る。

三公は聲をかけ、

三公「オイ徳、お前に言うておいた仕事に早く往つて呉れないと、遅れちや駄目

だぞ」

徳公「へエ、行く事は行きますが、どうも根つから葉つから、はづみませぬワイ。

今日は餘りお酒がまはりましたので、體が自由になりませぬから、明日に延ばして下せえなア

三公 「明日に延ばせる位なら、貴様に言ひ付けるか。サア早く用意をせよ」

徳公 「用意をせよと仰有つても、是丈【ヨイ】が廻つたら、此上、【ヨイ】の仕方もあります。あんなシヤンに對して、私の此レツテルでは、如何も成功覺束なしと觀察致しましたから、實ア、胴を据ゑて思ひ切り酒をあふつた所で

三公 「お前は此用を果す迄、酒を呑まぬと言つたぢやないか。肝腎要の時になつ

て、さうへべレケに酔うて如何なるものか、サア早く立てい」

徳公 「親方、何と云つて下さつても、腰が立ちませぬワ、腰が……それよりも直接に親方が行かれた方が、手取早う話がつくかも知れませぬで。二人の奴は元の通り埋めておき、お愛のシヤン丈を、山奥へかつぎ込み、そこは甘く、あなたの御器量で要領を得なさい。それが何より早道だ。三五教の言ひ草だないが、人を杖につくな子分をたよりにするなと云ふ事がござえますからな、ゲীগープ」

エー、あゝ苦しい、斯う苦して如何して道中がなるものか。動中靜あり靜中動ありだ。「ドウセイ」お前さまの物になるのだもの、私が「ドウチウ」譯にも行かないのだから、親方「ドウ」ドウセイセイ行つて来て下さいな。私も「セイ」一杯「ドウ」を据ゑて、酒でも飲んで、親分の「セイ」功を祈つてみませうかい」

三公「「ドウ」も仕方のねえ奴だなア」

徳公「本當に「ドウ」も仕方のねえ奴だ。他人の女房に横戀慕をするなんて、人の風上に立つ親分にも似合はねえ卑怯未練な行方だねえか、エーゲブ、ウー」

三公は癪高な聲を出して、

三公「與三公勘公」

と呼んだ。此聲に與三、勘の兩人は、行步蹣跚として此場に現はれ來り、

與三「親分、何ぞ御用でげすかなア」

三公「徳公を一つ裏の谷川へ連れて行つて、水を吞ませ、酔をさまさして、早く

今の所へ行く様にしてくれないか」

與三「そりや與三さうな事です、オイ徳、立たぬか。貴様ア、肝腎の時になつて、

何なんの事ことだ。そんな事ことで親方おやかた勤めとが出来できると思おもふか」

徳公とくこう「トク」と思案しあんをして見みた所ところ、何を言いうても人里ひとざとはなれた、あの森林しんりんだ。

もしもお愛あいの奴やつ、息いきでも止とまつて居をらうものなら、ヒュードロドロだ。夫それを思おもへば怖こわくも…何なんともないが、何時いつの間まにか酒腰さけこしがぬけやがつて、如何どうしても動うごけ

ないのだよ。哥兄あにき、頼たのみだが、今日けふは俺おれの代理だいいりを命めいずるから、トツトと行いつてく

れねえか。本當ほんたうに親方おやかたもあこ迄まで仕組しぐんだ大芝居おほしばゐだから、此儘このままオジヤンになつては

殘念ざんねんだらうし、俺達おれたちも甘うまい酒さけを親方おやかたからおごらした手前てまへ、氣きの毒どくでならねえから

なア」

與三よさ「俺おれや駄目だめだ。そんなら仕方しかたがねえから、オイ勘州かんしゅう貴様きさま、徳とくの代かはりに行いつた

ら如何どうだい」

勘公かんこう「おれやモウ御免ごめんだ。今日けふは親おやの命日めいにちだからなア」

斯かかる所ところへ二三にさんの乾兒こぶん共ども慌あわただしく驅かけ込こみ來きたり、

「ヤア與三よさの哥兄あにき、夕た々いへん、大變たいへんだ大變たいへんだ。お愛あいの幽靈いうれいと虎公とらこうの幽靈いうれいが、澤山たくさんの亡まう

者じゃを連つれて押寄おしよせて來きよつたぞ。サア用意よういだ用意よういだ」

者じゃを連つれて押寄おしよせて來きよつたぞ。サア用意よういだ用意よういだ」

與三、勘の兩人は「アツ」と云つた儘、腰を抜かしてその場に倒れて了つた。
館の外には唸りを立てて夏の風がゴーゴーと吹き渡つてゆく。油蝉の聲は館の
庭先の木の上から、耳が痛い程ゼミゼミ、ミンミンミンと聞えて来る。

（大正一一・九・一四 舊七・二三 松村眞澄録）

）））））））））））

靈界物語 第三四卷 海洋萬里 酉の卷

終り